文學士三上參次
文學士高津鍬三郎 合著
落合直文補助

# 日本文學史

東京 金港堂

# 緒言

一文學の効用、文學史の價値等は、本書總論に於て之を論じたれば、今、茲には、著者が此書を作りたる來歷を述べて、其志のあるところを示し、幷せて、此書の体裁に就きて一言せんとす。

一著者二人曾て大學に在りし時、共に常に西洋の文學書を繙きて、其編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、また文學史といふ者ありて、文學の發達を詳かならせるを觀、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜びき。之と同時に、本邦には未ざ彼が如き文學書あらず。また文學史といふ者もなくして、本邦の文學を研究するは、外國の文學を研究するよ

かば、著者が每に遺憾とせし文學書も、慨嘆せし文學史も、遠からずして世ゝ出づるならんと、心竊かに喜びたり。然るに著者の希望ハ全く畵餅に歸して、たゞ小說のみ偏頗なる發達をなし、世人をして、文學は即ち是小說なりとの考を懷かしむるに至れり。不規則なる韻文も、また之に伴ひて、稍、世にあらはれしかど、未ざ大に勢力を得ず。抑も、小說の隆盛なるも、甚ざ喜ぶべしと雖ども、小說は、唯、是れ一種の美文學のみ。歷史、哲學、政治學等の如き、所謂理文學の、之と相雙びて發達するにあらざれバ、文學の正しき進步とは云ふ可からず。若し著作者には、徒らに文筆を弄ぶ者多く、滔々たる讀者も、亦、輕薄浮華なる文章を喜ぶが如き、當時の狀態にて進み行かんには、文學をして、如何でか本

りも一層困難なるこを感ずる毎に、未だ曾て、彼を羨み、此を憐み、如何にもして、我國にも彼に劣らざる文學書、また彼に讓らざる文學史あらしめんとの慷慨の念、勃然として起らざること無かりき。是を以て、正科を修むる暇には、西洋各國の文學書、文學史を繙きて、其叙述評論の体裁より、時代分割の方法などを考へ、一方にハ、己が文學上の書類を通讀して、その性質を明かにし、其發達の跡を尋ねて以てわが文學歴史の材料を蒐集し、時に或は或る時代の文學の形勢を述べ、或は大家の著作を批評して、考試に充てたる事ありき。然れども、學業の餘暇極めて尠かりしかば、空しく他日を期したり。かくて著者が大學の業を卒へし頃まは、我が國文學の勢、恰も朝日の昇るが如くなりし

者の事業を賛成し、その材料を寄せ、なほ力を此書の助成に致さん事を語らる。是れ昨年十月のことなりき。其後、著者怠りしに非ざれども、一人は公務に鞅掌し、一人はなほ大學院に在りて、暇少かりしかば、當時既に殆んど材料の蒐集を終へ居たりしにも關はらず、敍述の体裁を改め、評論の不當を正し、或は作例を取捨増減するうちに、早くも殆ど一年を經過したり。而して此一年間には、我國、文學界の風潮、稍、其方向を變じ、余輩が隆盛を企圖せし國文學は、漸く其價値を世人に知られんとするに至れり。此際、著者の學友なる上田萬年氏は、國文學なる一書を出板せられ、芳賀矢一、立花銑三郎の兩氏、また國文學讀本を公にせられたり。此二書の如きは、從來の學者の著書とは、大に其趣を

書の總論に云へるが如き、大効を奏せしむるを得ん。されば、著者は此弊を匡正する事の、極めて急務なるを感じたり。而して此匡正を圖るには、國文學の講習を教育界に導きて、文學は徒らに翫弄物たるのみにあらざることを明かにし、また一方にありては、世人をして、文學の全體に注意せしめ、以て、或は小說を著はし、或は和文を綴り、さらずば歌詠詩賦等、凡て文學の一小部分を以て、其全體の如くに思惟せる感想を打破するに在りと考へたり。是に於て、文學書を編み、文學史を著はさんとせし當初の決心は彌固く、益、材料を蒐集したり偶、落合直文氏に會して此事を談ぜしに、氏も亦夙に此邊に着目して、將に著す所あらんとし、既に其材料を蒐むるに盡力せることを告げて、大に著

文体等を叙述評論したる者あり。或は主として作者の傳記を掲げ、其傑作の一二篇或は一二節を示したる者あり。其体裁一ならずと雖とも、能く其文學の大体を網羅して、順序の整然たること、我國從來の著書には見ざるところなり。さて著者が此書の体裁を撰ふに當り、始めは西洋文學史に於けるが如く、作者の傳記を詳細にすると、其著書を評論するとにのみ、專ら力を盡さんとせしが、退て考ふるに、我國の文學界には、西洋文學書の如き纏まりたる書なく、之を研究する者も、我國文學の一斑を目途とするに過ぎず。されば一の文學史を以て、各種の文學を總括し、其發達變遷を論評敍述するも、普通の讀者には了解し難きこと多かるべし。故に著者は、先づ文學史と相伴ふべき文學

異にして、余輩がかねて企圖せし一部を成就せられたるものなり。蓋し此二者は、わが國文學の、科學的研究ヽ大功あるものなるべし。天下の勢かくの如くなれば、文學史の如きも、必ず此際に見れるヽあらんと希望せしに、今日に至るまで、未だ之を著述する者あるを聞かず。思ひきや、終ヽ余輩をして、今、此書を公にせしむるに至らんとは。

一本書の体裁は、西洋各國にある文學史と、文學書との体裁を參考して、之を折衷斟酌したるものなり。かく爲しゝも目的あることなれば、之を述べて讀者の注意を乞はんとす。抑も西洋の文學書は、大抵名家の傑作を掲げて、之に批評を加へ、之か註釋を下し、且つ作者の小傳を付したるものなり。而して其文學史には、或は單ヽ文學の發達、作者の

しこの憂なく、また作者の詳傳を掲げて、其人物事業を褒貶し、且つ其著作の細密なる評論を下し、稍、完全なる文學史をつくらんは、長日月を費すにあらずんば能はざるべし。余輩は世人の早く之を成さん事を希ひ、著者自身もまた之を成すに怠らざるべし

一本書は實に本邦文學史の嚆矢なり。されば其欠点も少からざらん。然れども、之を著述するの困難なることは、同感の士必ず能く之を知らん。この書の体裁の如きは、著者の最も苦心せしところにして、歴史の部分と例證との權衡を保たしむる事に於て特に然りとす。既に文學の歴史といへば通常の文學書に於けるが如く、妙絶にして弊害なき例證をのみ掲げ、以て足れりとする能はず、猥雜卑野な

書を撰びて、文學の實質を一讀の下に知らしめ、而して後其各種の文學は、如何にして現はれしかを示すべき文學史を作らんと思ひき。次でまた、かゝる二書を各別に作らんよりは、寧ろ二者を合せて、一種特別の文學史を作らんには、讀者をして、我國文學全体の實質を知らしむるのみならず、之と同時に、其變遷を知らしむることを得べく、特に教科用に於て其便多かるべしと思ひたり。この故に本書には、我國文學全体の、起源發達及び變遷を論述し、主なる作者の畧傳を掲げ、且つ散文韻文の實質を示さんが爲に成るべく多くの例證を載せたり。然れども、あまり浩瀚に渉るの恐れあるを以て、割愛して載せざりし名文秀歌も極めて多し。是れ著者の最も遺憾とするところなり。蓋

べし。之を要するに、本書の作例を講讀する順序、及び之が撰擇取捨は、一に之を教授する者の、方寸にあるべしといへども、著者の考案は、先づ本書に載せたる近代の和漢混交文より始め、次第に溯りて、中古体の文を講習し、稍、中古体の文に習熟したる時に當りて、韻文即ち和歌の類を講授し、終に上古の文學に進むにあり。而して專ら作例を講授するときにも、一方に於ては、教師常に本書の總論を斟酌し、また其時代の文學の狀態を節略して、生徒に話すべし。且つ教師生徒互に例證を批評するも、亦甚だ有益なるべし。

一本書は、本書の總論に述べたる、文學の定義に從ひ、漢文は凡て之を採らず。但し其國文學と關係せるところは、固よ

る時代または、之が反照として、必ず猥雜卑野なる文學のあるあり。故にかゝる時代を論ずるときまれ、必ずかゝる文學の例證を示さゞるべからず。然れども、苟も之を以て教科用の書籍とせんと欲すれば、勢、然するを能はざるものあり。故に平安の朝、及び江戸時代の文學の例證は、著者の最も心痛せしものなるに關はらず、或る讀者の叱責を蒙るべきを期す。

一此書を教科書として用ひんには、江戸時代の文學より始めて、次第に古に溯るべし。これ易きより難きに進み、近きより遠きに及ぼす教育の原則によりてなり。然れども、江戸時代の文學にも、王朝の文學に類する者あり。鎌倉時代の文學に、却りて江戸時代の文學より、解し易き者もある

謬を指摘して、充分に之を訂正せられよ。生徒をして之をたゞさしむるも、亦可なるべし。

一本書人名を呼ぶに、一定の規則なく、唯、便宜に従ふのみ、或は直に其姓名を表し、或は字、もしくは號を擧げ、或は敬語を附し、或はしかせず、決してこれを以て、褒貶黜陟の意を示すにあらざるなり。

一著者の意は古を述べて今に示すに在り。今を頼として、以て後に垂るゝに非ず故に筆を江戸時代の末葉に絶つ。加之戊辰の改革は、實に文學上にも大時期を劃せる者なり、今や王政維新を距ること、尚近しといへども、文運の隆んなるは、振古なきところにして、名家と稱せらるゝものの極めて多し。然れども此が評論は他日に讓る。

り之を明かにせり。

一散文韻文の例證より就きては特に讀者に注意すべき事あり。其は記、紀、萬葉の歌、祝詞、宣命の文等、上古の漢字のみの者は假名を交じへ、源氏物語、枕草紙等の假名文には、漢字を混じて之を寫したり。蓋し讀者をして、無益の勞を避けしめんが爲のみ。但し其本來の体裁は歴史の部分に之を述べたり。專門に國文學を修めんと欲する者は、其本來の体裁に熟せんこと、固より言を待ざるなり。

一例證の中にて假名遣の誤謬などは或は、之を正したれども、語格文法上の誤謬は今之を正さず。蓋し此等誤謬の有無多少は、以て其時代文學の形勢を窺ふに足るべければなり。之を教場に講讀するに當りては、教師諸君一々其誤

# 日本文學史上卷目錄

## 總論

一本書を著はすに當り、內藤耻叟、井上頼圀、關根正直等の諸先生、前後有益なる注意を、著者に與へられたり。玆に一言を記して感謝の意を表す。

明治二十三年十月

三上參次　識
高津鍬三郎

# 第一編　日本文學の起源及び發達

## 第二編　奈良朝の文學

# 第三編　平安朝の文學

# 日本文學史上卷

## 總論

### 第一章　文學史とは何ぞ

文學史は、歷史の一種にして、文學の起源、發達、變遷を、志るすものなり。さて、歷史の本體にも、世界史と、各國史との別あるが如く、文學史にも、また、世界文學史と、各國文學史との二種あるなり。前者は、普く各國を綜合して、人智の發達進步を、文學上より、觀察したるものにして、後者は一國內にあらはれたる、文學上の現象を、歷史的に、叙述したるものなり。

歷史、特に、文明史は、汎く政治。宗教、學問。美術。人情。風俗等の變遷を攷究して、事實の原因結果を明かにし、以て、智識道德の

文學史に於て、文學史こそ、即ち眞の歷史なれとさへ云ひしと覺ゆ。

西洋にても、文學史といふものは、遠き古よりあるに非ず。又、文學史を作るには、不都合少からざる邦國も亦多し。即ち古の羅馬は、文華の國なりしが、摸擬的の文章のみ多くして、其國固有のもの少し。今の日耳曼の如きも、近代こそは、其文學燦然として、觀るべきもの多けれども、耶蘇紀元千五百五十年頃より全千七百五十年ごろまで、大約二百年の間は、殆んど文學無かりき。以太利、西班牙等の諸國も、彼の第十七世紀の中葉以後は、文學と目すべきものを有せず。されば、唯、英吉利、佛蘭西、及び古の希臘のみは、首尾貫徹せる、完全なる文學史を有し得べき國なりと云ふ。顧みて、我邦は如何といふに、

發達を示すものなれば、文學史は、其一部分なること、固より言を待たず。然れども、文章詩歌は、最も能く、人の思想、感情、想像をあらはすものなれば、人間の發達を知るには、此上なき材料なりとす。夫れ、文學は、政治の爲めに動かされ、宗教の影響を蒙り、人情風俗の變遷に伴ふものなれども、文學、益、發達するに從ひては、文學其物のうちに、一種の元氣を蓄へ、却りて、政治、宗教、人情、風俗を左右するに至るものなり。余輩、日本、支那、西洋、各國の既往を通觀するに、實に、文學は、邦國人民の盛衰興亡に繫ることの至大なるを見る。故に、文學史は、文學の起源發達を叙すると共に、つとめて、其中に潛伏せる元氣の活動せし跡を示すべし。是を以て、文學史は、即ち是れ文明史なりと云へる學者あり。ファン、ローンの如きは、其著、佛國

史を有し得る國なるべし。

文學は人心の反照なり。故に、文學史を以て、古來、人の智德の進歩せし蹤跡を探り、時代によりて、人間の思想、感情、想像に高下あるを知り、さて、之に應じて其時代の人情、風俗、嗜好の類の如何なりしかを、察すれば、啻に人をして、見聞を廣くし、智識を增さしむるのみならず、之に鑑みて、其人の思想、感情、想像を高尙にし、其嗜好を優美にし、また野卑陋俗なる性情を脱し去りて、道德も之によりて明かに、政敎もこれによりて進みゝ、從ひて凡ての人間をして、漸く、此世に生活すといふ大目的なる、眞正の幸福の存在せる方針に、向はしむることを得べし。歷史、小說、詩歌より政治、宗敎、其外の事柄に涉れる凡ての文章の、人間に必用なりといふも、畢竟は、この大目的

隣國の支那と同じく、其文學は實に貧しからざるなり。原來、貧富長短等は、比較上の語なるが故に、從來、國學者が和文を誇稱せしは唯、我、古文學を以て、之を支那文學に比較せし上のみの事なれば、其比較の區域甚狹し。今、余輩は、我邦二千數百年の間に現出せし、諸般の文學を總轄して、これを我國文學の全體とし、之を西洋各國の文學と對照比較するに、彼に及ばざる處、少からずといへども、また、其特有の長處多きを見る。而して、室町幕府の時代にこそ、文學も一時は衰微したれども、尚、寺院のうち、文庫の隅々、學問の蟄伏せしのみならず、さらに、新奇なる文章の現出するもありて、之に先んずる鎌倉時代と、後に來たる江戶時代と、聯結すべき文學の橋梁は、かつて斷絕せし事なし。されば、我邦も、まづ、完全なる文學

# 第二章　文學の定義を下すの困難なること

## 文學の定義

我邦、近來文運大に開けて、樵夫牧童も文字を知らさるはなく、下等社會の隅々までも、新聞小説を弄ぶほどなれば、文學といふ語も、廣く世人の談話に用ひられて、文字を知るほどの人なれは、其意義を解せさるは無きが如し。然れども、文學とは如何なるものなるか。文學といふ語の定義は如何、と改めて問ひかくれば、普通の人は云ふに及ばず、稍、高尚なる教育をうけし人といへども、其答には窮すべし。たとひ、答に窮せさるも、十人、十種の答を爲すべし。世間には極めて普通なることの、さて、それは、何ぞと、問はるゝときには、答へ難きもの多し。惟ふに、文學は其種類の中にても、最も甚しきものな

を遂せん爲めの方便なるが故のミ。

今、余輩が此文學史を著して、本邦文學の光輝を發揚し、以て右に云へる效果を奏せん事を冀ふは、特に今日に於ては、甚だ必要のことゝ信ぞ。蓋し文學史は、國民をして、自國を愛慕する觀念を深からしむるのミならぞ、現時文章の体裁の千差萬別なるを憂ふる者は、此史に徵して既往ヲ鑑ミなば、其適從するところを定むるにつきて、裨補そることあるべければなり。

に用ひ、クィンチリヤンは、文法を以て文學と呼び、シセロは、文學なる語を、汎く一般の學問といふ意に用ひたるが如き是れなり。降りて、近代に至り、歐洲文學史を著して、有名なるハラムの如きは、文學即ち「リテラチューア」又「リテラツール」といふ語は、もと文字といふ意義の語より轉化せるものなれば、文字に頼るもの、即ち文字を以て表はし得る限りは、人間の智識の及ぶところ、感情の到るところ、皆是れ文學なりと云へり。これまでは、文學の意義、あまり廣きに過ぎて不都合多し。何となれば、旅店の止宿人名簿、銀行の金銀出納帳、圖書館の書目、またハ戸籍帳までも、苟も、文字にて書きたるものは、みな文學と云はざるを得ざればなり。

また、文學とは人の思想を表明したるものなりといふ、漠然

るべし。世に文學者と稱するもの少からず。又文學を弄ぶ者甚だ多けれども、其所謂文學とは、如何なる者をいふか。能く之が定義を下しゝ者、古來幾人かある。蓋し定義を下しゝ者の、全く無きにはあらざるも、之が完全なる定義を下したる者は、殆んど無しと云ふべきなり。試に、古今東西の有名なる學者が、文學に就きて述べたる意見を見よ。其間一致する處少く、實に、文學といふ語の、用ひ易くして、定義の下し難きを知るならん。是を以て、文學の本領、範圍、如何を思念するときは、恰も五里霧中に彷徨するが如き感あるを免れず。

之を西洋の昔に徴するに、古羅馬の學者の中にも、文學といふ語には、定まりたる意義なかりき。即ち、有名なる史家タシタスは、希臘文學といふ語を以て、希臘文字の形をあらはす

の始に位せり。これらは、文章技藝を以て、文とし、たるが如し。
通書、文辭章には「文は即ち道を載する所以の者なり」といひ、
程子は「道は文の根本。文は道の枝葉」といひ、元史儒學傳には
「六經は道の在る處なり、文は即ちその道を載する所以の者
なり」とあり。此等の句によりて察する時は、支那にては、常に、
文章と道義とは、相離るべからざるものと思へるが如し。
我邦にて、徳川幕府の世の末葉までは、學問といへば、まづ漢
學の事にて、「學者と云へは漢字を讀む人」と思ふほどなりし
かば、「經學即ち聖人の道を講習する外には、別に學問と云は
るべき者無くして、文章詩歌のごときも、或は末技として賤
められたり。今日にても、殊に漢學者の中には、文學の本は、道
義を明かにするに在り。文學の用は、政教を輔くるに在り」「而

たる說あり。これは、其意義、尙、一層廣きに失せり。蓋し、人の思想を表明するには、形語。繪畵。建築物。彫刻品。音樂。文字。言語等の諸方便あり。然るに、此等の者を、總べて文學なりと云ふの、不都合なることゝ、また、言を待たざるなり。

支那は、古代より學術の開けたる國なれば、文學といふ語も早くより行はれたれど、其意義は、此國にても亦一定せずして、さま〴〵に用ひられたるを見る。卽ち孔子が文王を稱すれば、「文王既に沒したれども、文は玆に在らずや」と云ひ、遠人を服することを云へば、「文德を修めて、以て之を來たす」と云へり。此等の語に據りて考ふれば、孔子は、先王の道を以て文と云ひたるがごとし。又、孔子が弟子の職を語れば、「行うて餘力あらば、則ち以て文を學べ」と云ひ、また四敎を語れば、文そ

よりて、人間の生活と、稟性とに關係する事柄を、叙述するものを文學といふ事となりぬ。然れども、是れ尚廣濶なる意義にして、其中に種々の異分子を含むこと勿論なり。加之、科學上の書中にも、文學上の價値あるものあり、文學と稱せらるゝ者の中にも、却りて文學界より遠くべき文章も少からざるべし。されば、余輩は、茲に醇平たる純文學（ピユーアー、リテラチユーア）の定義を下して、左の如く云はんとす。

文學とは、或る文体を以て、巧みに人の思想、感情、想像を表はしたる者にして、實用と快樂とを兼ぬるを目的とし、大多數れ人に。大体の智識を傳ふる者を云ふ。

今、此定義を分析して、之を説明せん。

第一。或る文体を用ふ。　これは、著作者、各、自家獨得の妙を

して、文章を雕琢し、字句を修飾するの謂にあらずと云ふもあらん。或は、古典を考證し、古語を研究するを以て、文學の本分と思ふもあらん。或は、古聖先王の教を講じ、治國經世の術を明かにするを、文學と稱ふるも有らん。或は、詩歌小說を以て、眞正なる文學と認むるもあるべく、或は、俳諧狂歌を以て、文學の精粹と心得るも有るべし。これらは、いづれも、文學の一端なるべけれど、文學の全体には非ざること勿論なり。斯くの如く、文學といふ語の意義は、一定せずと雖ども、近時は、大抵、學問を大別して、文學と科學との二つとし、事物の原理原則を探求し、若くは、此原理原則を演繹すべき材料を捜索する學問は、大抵、皆、之を科學の範圍内に讓るを以て、文學の區域も大に定まりたり。即ち主として、想像、推理の作用に

の必需要件となさゞるべからず。

第四。大多數の人に、大体の智識を傳ふ。　諸種の科學、假令は、理化學。法律學。醫學。工學などの書は、區域の定まれるものなれども、文學上の著作に至りては、苟も文字を解するものは、之を讀まざるものなかるべし。又、其記載せる事柄も、大抵、大体上の事のみ。かの科學に於けるが如く、空氣の重量を計算し、天神の存否を論じ、流通貨幣の高を定むる如き、格段なる事は、文學の眞意とせる處に非ざるを知るべし。

以上述べたる處にて、略、文學の何ものたるかとの疑問に答へ得べし。されども、この定義とても、いまだ完全なるものには非ざるべし。

具へ、之を文字に表明するに當り、或る格別なる方法を用ふるを云ふ。巧みに、文法上、美辭上の規則を應用する事等是れなり。この故に、旅店の止宿人名簿。銀行の金錢出納帳の類は、文學上のものに非ざるを知るべし。

第二。人の思想、感情、想像を表はす。　文章を以て、思想をのこ表明するものこ限るときは、これ、智力の作用を主とするものにして、科學上の著書に多き處なり。故に、文學には感情と想像この必要にして、詩歌小說などには、殊に此の原素の多きを知るべし。

第三。實用こ快樂こを兼ぬるを目的こす。　是れまた、明白なる事實にして、專ら實用の一邊を說くは、是れ科學上の事なり。文學は、讀者に諸種の快樂を與ふる事をも、一

ても、また分派大に行はれて、一部分のことを、精確に攷究することゝなれり。是を以て、法律學も、政治學も、理財學も、道義學も、審美學も、哲學も、歷史學も、各一科專門の學となりて、文學と相幷立す。さて、此等の學問は、いづれも、其性質と目的とが、各、異なるによりて、相分たれたるものなり。卽ち、法律學は、主として權利義務の性質關係を說き、理財學は、生財、配財、交易の方法を論じ、歷史學は、邦國の盛衰、興敗、存亡の來歷を明かにし、道義學にては、道德の性質より、何故まで人間は、道德を守らざるべからざるかの理由を示し、哲學は、眞理の何物たるかを研究する等、是れなり。但し、此等の學は、皆、文學に賴りて、存立するが故に、此等と文學との間には、尙未だ劃然たる境域を設くること難きに似たり。旣に、定義に云ひし如く、文

## 第三章　文學と他の學問との差別、

### 文學の目的

前節、既に、文學の定義を試みたれども、文學と他の學問との差別は、尙未だ明かならず。之を詳かにせんには、うれぞれ、學問の性質と、目的とを、明かにせざるべからず。さて、法律學、政治學、理財學、歷史學、道義學、審美學、哲學等は、大に文學に關係ありて、屢、同一視せらるゝ事なきにあらず。蓋し此等の學は、皆、無形の事理を攷究する者なれば、いづれも文字に依りて、存立するものなり。されば、古今東西の學者、これらの諸學をたしなべて、文學の範圍内に入るゝもの多し。これ文學なる語を、廣濶なる意義に解したる一例とすべきなり。然れども近來は、勞働社會に分業の法盛んになりしと共に、學問の、上

として觀るときは正確なる事實を傳ふや否やとの一邊より論ずべし。されば、文學としては、名文なるも、法律の文としては、拙劣と見なすべく、また歷史の文としては、採るに足らざるもあるべし。これ文學は歷史學、法律學など丶は、其目的を異にすればなり。上に述べたるところを考ふるときは、文學と他の學科との差別は、自から、明了なるべし。

さて文學の目的とする處は、實用と快樂とを兼ぬるにあり。此事、既に上に云ひたれども、尚少しく之を詳にせん、抑茲に、實用と云ふは、敎訓を垂れ、事實を傳ふることにして、快樂とは、專ら精神上の快樂を云ふなり。蓋し、文學は、經學の如くに、純ら名敎のためにするにあらず。又、史學の如く、只管、事實を調ぶるものにもあらず。然れども、また單に快樂にのみ供する

學は、或る文體により、巧みに人の思想、感情、想像を現はしたるものなれば、單に此點に於て論ぞる時は、法律學、理財學、歷史學、哲學なごゝ、異なることなきのみならぞ、此等の文の中にも、文學こして探るべきものも多かるべければ、かゝる場合に於ては、文學も、法律も、歷史も、同一なりこいふべきなり。然れごも、是れ唯、皮想の見にして、其實は決して然らぞ。かゝる場合まても、尙、文學は文學、法律、歷史は、法律、歷史こ、それぞれ判然たる差別を存するなり。それは如何にこいふに、同一の文にても、文學こして觀るこきは、文法上、美辭上、等より、其書方の面白きを賞すれごも、之を法律の文こして觀るこきは、書方の面白きこ否こを問はずして、たゞ意義の精確にして、誤解すべき恐れなき一點より評すべく、又、之を歷史の文

したる者は、手にだに觸れず。かゝる人情は、古今同一なるものにや。孔子の如き、ソクラテスの如き大聖人にても、之れを如何ともする能はさりき、かくの如く、道德の說、忠孝の敎も、正面より直接に人心に注入して、人を感化することは、最も難けれども、之を小說に寓し、詩歌に寄する時は、文字を知る者は、之を讀み、文字を知らざるものも、之を謳歌すべければ、知らず、識らず、其意味を解得して、間接に、事實を知り、學理を悟り敎訓を受くべし、かくて、漸次にまことの學問にも志し、道德の說、忠孝の敎にも、耳を傾くるに立ち至るべし。

いづれの學問にても、深く之を攷究探尋して、其眞味を解得する時は、心裡に無上の快樂を、感ずるものなり。之を心悟の樂といふ。この種の樂は、總ての學問の中に、ひとしく存在す

ものにもあらず。さらば如何にして、此の二者を兼ぬべきかといふに、他の專門の諸學に於いては、直接に教訓を垂れ、事實を傳ふれども、文學は之を間接になすなり。たとへば、名君、賢相、忠臣、孝子、節婦、義僕、豪傑、學者等の言行事業を、詩歌に吟咏する時は、之を聞くもの、たゞ其音律聲調の、曲節緩急あるを喜ぶのみならずして、その事柄に感動すべし。これ、古昔支那などにては、詩を教化の具に用ひ、今日各國の學校にては、唱歌を普通學科の中に加ふる所以なり。良藥は口に苦く、忠言は耳に逆ふ。如何に苦心して道德を說き、忠孝の教を談ずとも、俗人の耳を傾けしむることは、軍談落語に及ばざること遠からん。近來我國にては、小說盛に行はれて、車夫も之を街頭に繙くほどなれども、道德を說き、學理を述べ、事實を記

たゞ、人によりて、樂む所の物異なるのみ、酒を飲み肉を食ふも樂なり。されど、この樂は、肉體の樂にして、心身を害する恐あり。詩歌を謳ひて、思ひをやり、音樂を聞きて、鬱を散ずるは、精神の樂にして、害なきものなり。文學は、此の精神上の快樂を目的とするものなるが、之と同樣なる趣味を有する學問は、他にたゞ一の審美學あるのみ。

前にもいひしが如く、文字を讀む程の者は、概ねみな、文學を弄ぶものなり。文學を弄ぶものは、即ち文學の趣味を知り、精神上の快樂を、感得するものなれば、苟も、眞の文學の、盛に行はるゝ時は、國民の精神をして、自から優美ならしめ、高尙ならしめ、又、純潔ならしむ。此の如く、人をして、高尙、優美、又、純潔なる、精神上の快樂を、感ぜしむる間に、道德、宗教、眞理、及び美

るものなれば、暫くおきていはず。余輩の所謂通常の精神的快樂を目的とするものは、文學の外にあることなく。たとへば、法律學は、權利義務の性質間係を、明かにするを主眼とし、歴史學は、精確なる事實よりて、事變の源因結果を探り、邦國の治乱盛衰の跡を明むるを目的とし、哲學も眞理を撿討するを以て、職分とするが如く、いづれも皆、眞率なる目的を、有するに止まる、唯この文學のみは、快樂を以て、その一要素とせり。抑も、快樂と勞苦とは常に相伴ふものにして、世に勞苦のみありて快樂なき時は、人生は無味淡泊にして、厭ふべきものならん。されば、一陶の濁酒に、終日の勞苦を忘れ、一曲の吟誦に、一日の鬱を散する等、上は王公貴人より、下も田夫野人に至るまで、その分に應じ、其職に從ひて、快樂なきはなし。

## 第四章　國文學

先に述べたる文學の定義は、廣く取すべて云へるものにして、何國の文學にも適用して、不可なきのみならず、特にかの所謂世界文學（又は萬國文學）なるものに適合すべし、然れども、文學は、もと人の作出する處なれば、其人が社會を組織する分子たる上は、動、內外の森羅萬象によりて、種々なる影響を蒙むるは勿論なるべし。而して其影響は、即ち人情、風俗、言語、制度の、同一なる邦國內に在りても、人によりては一樣ならず、況んや、東西處を異にし、人情、風俗、言語、制度の、齊しからざる邦國に於てをや、其外にあらはれて、文學となるに當りても、互に殊異なる現像を呈するは勿論なり。かく邦國によりて、其固有の特質を具ふる文學を指して、其國文學（ナショナルリテラチユーア）といふ

術上の觀念を起さしめ、知らず識らず、大切なる敎訓を受けしめ、要用なる事實を知らしむることそ、まことその文學の目的ならめ。

は、其痕跡の顯然たるが如き、皆、其明證なり。又概して、日本文學を、優美といひ、支那文學を、雄壯といひ、西洋文學を精緻といふも、みな此理に外ならざるなり。

第二、身外の現像。　こきは、邦國の地位、地勢の形狀、氣候の寒暄、天象の異動、山川の景色、動植物の有様等、凡へて人の周邊の事物をいふ。此等の物が、國の文明、特に文學の上ま大影響を及ぼし、以て、其國の人情、風俗、制度等に、殊異なる容色を有せしむるは、今特にいふまでもなかるべし。

第三、時運。　これは、朝廷の政略、宗教の勢力等をいふ。歐洲にて、夫の宗教大改革の乱のありし時代には、文章、皆、宗教の臭味を帶び、又、佛王路易第十四世が、文學に法被を着せためしは、人の能く知る處なり。文學に法被を着せしめしと

なり。

茲に、文學は對して、影響を及ぼし、以て各種の國文學を構成する個條(エゼント)を、大別して三ツとなす。

第一、國民固有の特性、　世界各國の人民、各、其特異なる氣象品格を具ふ、近頃、世に云ふ國粹とは、即是れにて、皆、其國の文學上に、歴然としてあらはるゝものなり。日本人は、敬神忠君の念に富み、支那人は、禮義秩序を重んぢ、而して、其は仁義忠孝を主とするより、其文學は、稗史小說に至るまで、勸善懲惡を旨とする傾きあり。西洋人は、自由、權利の念想、盛んにして、婦女子を敬すること厚し。全く西洋にありても、英吉利人は、沈着にして、實際を喜び、佛蘭西人は、豪爽輕快にして、感情に制せられ易し。故に、英、佛、兩國の文學に

心理學を研究すといへり。これは。心理學にて心内の現像智情意の三者を、知り得るがごとく、文學史は、以て其國民の心を、窺ひ得べしと云ふ意義なり。さて、我國の如きは、中古以來、支那の制度を摸し、支那の文學を學びたれども、原來、國柄も全まからず、民心も亦異なれば、其文學の上にあらはるゝ所も、おのづから一様ならざ。齊しく漢語を用ひ、漢語の法則に從ひて、作りたる詩文だにも、我國人の作りたるは、其精神、甚た彼國人の作りしものとは異なれり。

されば、一國の文學といふものは、一國民が、其國語によりて、その特有の思想、感情、想像を書きあらはしたる者なりと云ふべきなり。さては、文學と云へば、各國を通して云ひ、國文學といへば、一國に限りたる文學を云ふなり。

は、路易十四世が、賄賂等の手段を以て、文學者を籠絡し、只管國王を賞揚したる文章をのみ、著はさしめしをいふ。幸にして、日本文學上には、政治と宗教との係累を蒙りし事割合に少し。蓋し、日本の文學は、勢力の薄かりしが爲めに、法被を着するを、必要と感ずる人のなかりしものなるべければ、幸にしての一語は、適當せざるべきか。

右に陳べたる三條は、多少、孰れの國、孰れの時を問はず、其文學に、影響を及ぼすものなれば、或は、勇壯嚴肅、或は、慷慨の文學となり、或は、優美の文學となり、或は、猥褻卑陋等の差違を生ずるなり。これ等の現象を蹤跡するは、文學史の要務なり。されば、文學史は、即ち是れ文明史なりと云ふも、あまり失當の言にあらず。佛國の碩學テインは、文學史を編して、其國の

もの全體を指して云へるが如し。さては、言語なければ思想なしといへるなり。氏の說の如きは、極端に走りたるものなれども、二者の關係の親密にして、いづれか、其一を欠く事能はざるを示すは明かなり。されば、二者の沿革變遷の如きも、常に一途に出づべきものなること、勿論なるべし。

然るに、言語は、人の口より出づる聲音にして、もとより無形のものなれば、之を久しきに遺し、遠きに傳ふること能はざ。されば、社會の進步して、人の思想緻密となり、人事も亦、益、複雜となる時は、單に言語のみにては、諸種の不便を感ずべく、勢ひ、聲音の符牒言語の記號として、廣く人々の間に用ひられ、後世にも傳へ得べき者の發明せらるゝに至るべし、されば、人智のさまで開らけざりし代にも、結繩の制を用ひたる者

## 第五章　文學の起源及び發達

人々の思想、感情、想像を、表はすには、形語、繪畫、音樂、彫刻品、建築物等の如き方便、甚だ多しと雖ども、精細緻密にして、又複雜變化の極まりなき、心裡の現像を表はすまは、言語より優れたる者なし抑、音語ハ、天の特に人類に賦與せる賜ものにして、人と人との媒介をなすもの、此に過くるものなかるべし。其思想との關係は、極めて親密にして、二者の前後輕重を論ずること難し。何となれば、言語を外ましては、思想を能く表はす事能はず。また思想なければは、完全なる言語を得る事、能はざればあり英國の博言學者、マクス、ミュラーは、言語ありて、而して後に思想ありとさへ云へり、但し、氏が言語といへるは、余輩の所謂口語のみに限らず、人の思想を表明すべき

り、進化したるものなり、この二種の假名の、象形文字より脫出して、遂に單音字となりたるは、實に驚くべき進化といふべきなり。而して、其進化の道途を蹤跡するに、之によりて、國文學の步を進めしのみならず、常に人智の發達に伴ひ、社會全体の歷史的進步と、相照應するを見るなり。

さて、人智未だ甚だ開けざる社會の文學は、感情より湧き、想像より生れたる者多し詩歌の如き即是れなり詩歌は、物に觸れ事に感じて、悲喜哀樂の情を、巧みに云ひあらはしたるものなれば、太古、文字のなかりし世にも、言語をだに使用したらん者は、詩歌を有したるべきこと、言を待たず、此詩歌こそ、不文の文學ともいふべくして、眞正文學の萌芽の地中に埋伏せるものといふべけれ、されば、いづれの國にても、最初の

あり。畫樣の符號を用ひたるものありき。之より漸く進みて、遂に文明の最大要具たる、文字の如きも、發明せられて、文學始めて玆に其嫩葉軟芽を發生す。さて、此文字も、繁より漸く簡に進み、難より易に入り、以て自由自在に、言語を、うつし得るに至ることは、遠く其證を求むるに及ばず。かの漢字發達のあとゝ、我國にて、假名の製作ありし次第とを見ば、自から分明なるべし。即ち漢字は、もと象形文字にして、其始は、繪畫を去ること遠からず、古文といふもの、即ち是なり。それより時代を經るに從ひ、大篆となり、小篆に進み、隷書と化し、また一變して楷書となりて、以て今日の姿をなしたるなり。また我片假名は、漢字の點畫を省き、偏傍を去り、徐々欠略の法によりて、出來たるものにして、平假名も、また漢字の草体よ

想像の力に富む者なれば、其心内の現像を發表するに當りても、感情を本とし、想像を旨とする詩歌を、適切とする事勿論なり。然るに、散文は、主として理論を述べ、事實を記するものなるが故に、事物を比較的に攷究し、彼此を辨別するの能力に乏しき彼輩に取りては、甚ど不適當なるものなるべし。かく云ふ時は、未開人は、想像力に富み、文明人は想像力に乏しきが如く思はるれども、決して然らず。感情こそ未開人は、文明人よりも、激烈ならぬ想像力に於ては、然らず。未開人の想像は、背理的にして、所謂、妄想といふものなり。文明人の想像は、合理的にして、理想に近づくもの即ち是なり。未開人は、學理に背きて、妄想を逞しくし、文明人は、推理の法に因りて、事實より理想に押し移るなりさて、文學の中まで、理論を述

文學は、概ね詩歌の類なるは、何故なるかとの理、自から明白なるべし加之、文字なくして、言語のみの時代には、啻に感情を表はす時のみならず、口碑を以て事蹟を後世に傳ふるには、自ら誦記に便なる歌謡の体を用ひたりし事常なり、然るに、文字の發明ありし上は、思想、感情、想像は、長くして複雑なるも、短くして簡易なるも、思ひのまゝに書き記すことを得べければ、是に於て、散文体の文學なる者起り、論説。歴史。記行。日記小說の類もあらはるゝなり。

文學の發達を考ふるに、始に韻文あらはれて、後ゝ散文の出づる所以は、右に述べたるが如く、一つには、文字との關係にも因るべけれども、また一つには、人智の進歩にも、因るなるべし、そは如何といふに、未開の民は、推理の能に乏しくして、

た之を鑑識すべき眼を、有するに至るべし、是に於て文學また大に進步の途に就くは、各國皆其歸を一にせり。

べたるものは論文にして、感情想像を主としてうつしたる者ハ、詩歌小說の類なり。されば、文學の種類に於ける發生の前後を知ること難からざるなり。

是れより人智、益開け、社會漸く進みて、貨殖の術も盛んに、生活の路も豐かなるに從ひ、人の嗜好も、共に進みて、遂には文學を以て、一種の樂みとし、之を弄ぶの念も起るなり。蓋し人智は經驗によりて進み、人情は事變に遭ひて精しくなるもののなれば、仔細に之を表はすべき道具、即ち文字なるものゝ、既に具はりたらんには、何人も之を書きあらはさんことを務むるは、勿論にして、之を書きあらはすならば、後世にも傳はり、見る人も多からんと思慮するにより、自から考案を積み、想像をめぐらして、文章上の美を企圖すべく、見る人もま

次に、韻文とは、即ち詩歌を云ふ。詩歌は押韻せざる者も多し、特にわが和歌の如きは、韻文とは稱へがたしといへども、しばらく、散文に對すべき、雅馴なる語を看出だし得ざるにより、習慣によりて、韻文の二字を用ふるのみにて韻文もまた散文の如くに、人の思想、感情、想像を、表はしたるものなれども、之を表はすに當り、散文の如くに、率直ならず。自由自在なること能はず。孰れの國にても、詩歌には、其性質と、形狀とに、嚴格なる規則の在るありて、苟もこの規則に從はざる者は、詩歌たること能はざるなり、さて、其規則とは、國語の性質によりて、同一ならざれども、概して云へば、左の二樣なりとす。

第一　聲音に輕重ある語を、一定の規則に從ひて、配合せる

# 第六章　文學の種類

孰れの國の文學にても、大別して散文と、韻文との二種類と爲すことを得べし。散文とは人の思想、感情、想像を、率直に文字を以て、書きあらはしたるものにして、通常、文章といふもの即ち是なり。散文の中にも、亦、種類多し。文の體裁に依りて、之を分てば、論、說、記、敍、等となり、文の本質によりて分ては、小說。日記。紀行。史傳。歷史を始めとし、哲學、法律、宗教、政治上の文學となる。推理を主とするもあり。事實を主とするもあり、想像を主とするもあり。或は、此三者を交ゆるものあるなり。然れども、前にも云ひし如く、各國の文學は、各、幾分か、其特異なる點を有するが故に、文學の種類に於いても、大別こそは概ね違はねども、其小分に至りては、互に異なる所ありとす。

抑、詩歌は、もと、をりにふれ、物に感じて、喜怒哀樂戀愛の情を巧みに謳ひあらはしゝ者なれば、之を聽く者をして、自から同感を起こさしむべき聲調を有する者なり故に、詩歌は古へより、言語の音樂とも云ひ、極めて、聲調を重んじたり、然れども、世界各國の詩歌の最初のものは、多くは、感情を打ち出でたるまゝにして、修飾を加へ、想像を回らすことなければ、皆、唯、自然の調に從ひ、自然の風趣を具へたるのみ決して、ことさらに、調を整ふる規則の如きは、無かりしが如し、然るに、星霜を經るに從ひて、調を整ふる峻嚴なる法則さへ設けられ、漸く天眞の爛熳を失ひて、人巧の優婉なるものとなり、韻文または、全く別天地のあらはれしかと、疑はるゝに至るなり、さて、詩歌もまた前に云ひし如く、人の思想、感情、想像を表は

もの。

第二單音の數を限りたる句を、一定の規則に從ひて配合するもの。

具さに云へば、凡そ言語に、音聲の高低輕重を有する國語の人民は、第一種の規則に從ひて、其高聲低音を都合よく配合して、聲調を整ふ。此種に屬する詩歌は、また押韻と、となへて、毎行若くは毎句の結尾に、全韻の語を置き、或は、全聲の語尾を有する言語を用ひて、其聲調を輔助すること多し。又、言語に、聲音の高低輕重を有せざる國語の人民は、第二種の規則に從ひ、單音の語數を限りたる句を配合して、聲調をよくするなり。即ち支那、印度、英吉利、日耳曼等の詩歌は、第一種に屬し日本、佛蘭西などの詩歌は、第二種に屬する者とす。

故に、茲には之を省略す。

我邦の文學は、極めて豐富にして、他國の文學にあるほどの種類は、殆んど網羅して遺すところなし。特にわが國、特有の種類の、他邦に誇るに足るべきものも、また少しとせず。そは皆之を茲に述べず。この文學史中に於て、自ら明瞭なるべし。

したる者なれば、散文の如くに、其種類を分ちて、叙事体、記事体、論説体、小説体、史傳体等に分つことを得べし。然れども、詩歌は、もと思想より寧ろ感情に基くこと多きものなれば、議論よりは記事に富み、事實よりは想像に富みたり。されば古人は、之を想像の言語とも云ひしことあり。故に、西洋にては、概ね、特に韻文を大別して、諷誦の詩(リリック)(又樂詩)叙事の詩(エピック)(又史詩)及び、戯曲(ドラマ)の詩の三種とすれども、我邦の韻文は、大に此分類と一致せず。

上に詩歌に就きて述べ来たりしところを、とりすべて云へば、詩歌は、人の感情に本づきて、一定の規則に従ひ、主として、感情想像を寫し出だしたる文辭なりと云ふに外ならず。尚、散文と韻文との詳細を論ずることは、美辭學の本領なるが

十餘年の後ま、出でたる書にして、釋日本紀い、それより又四百餘年を經て、あらはれたるものなり。孰れも、上代を去ること、甚だ悠遠なれバ、此等の書にのみ據りて、上古文字の有無を、判定せんことは、到底不充分なるを、免れざるべし此故ま余輩は、茲に之が判斷を下すに臨み、たゞ古書の傳說のみに、依賴せずして、他に其論據を求めんとす即ち、上古の風俗、及び、上古文字の性質是れなり。

第一上古の風俗。　我邦神代の狀態を考ふるま、文化未だ大に開けずして、人々概ねみな、山野に鳥獸を狩り、河海に魚介を捕りて、其生を送りたるか如しかく生活の業にのミ、奔走する時代に在ては、風俗は、質朴にして、尙武の氣象、甚だ盛えなりしかバ、武藝に身を委ぬる者は、多かりしなるべけれ

# 第一篇　日本文學の起源及び發達

## 第一章　日本上古文學有無の論

既に、前に云ひし如く、眞正なる文學は、文字ありて、而して後、始めて其形を成すものなれば、文字の出來し時代を知らざらんは、安んぞ、文學の起源を、知ることを得ん。されば、いま日本文學の起源を論ずるにも、先づ、かの議論の紛々たる、上古文字の有無より、論定せざるべからず。

我國上古文字の有無に就きては、古來、學者の所說多端にして、未だ一定せられず、上古は文字ありしといふものは、釋日本紀などを根據とし、日文、天名地鎭、秀眞等を認めて、我國上古の文字となし、之を無しと論ずるものは、主として、古語拾遺等を確徵とするなり。然れども、古語拾遺は、紀元千四百六

と云へる證歌をとゞめ、又續日本後紀には、實に左の語あり。

日本乃倭之國波、言靈乃、富國度曾、古語爾、流來禮留。

これみな、余輩の所論を、確むるに足るものなり、また。我國語には、他邦に比類なき、枕詞といふ者ありて、妙に言語の曲節をとゝのへ、特に記誦に便なる性質を、備ふる事といひ、古事記の撰ばれし時にも、稗田阿禮をして、古語を熟誦せしめたりといひ、踐祚の時には、中臣氏の壽詞を奏上するにも、語部に任じて、文字には頼らざりしと、いふを考へ、其他、日本書紀中の歌、續日本紀中の宣命の文などの、其前後は、皆、莊嚴華麗なる漢文なるが中に、ひとり字音を以て、國語をうつしたるを察すれば、上代は、最も言語を重んじたりし風習の一斑を、窺ひ知るべし。されば。古語拾遺に、蓋し聞く、上古の世、未だ文

ど文事に心を寄するものは、極めて少かりしが如し。されば古へより、我國語の美はしきをのみを誇稱して、文字などを顧みざりしことは、後世の歌文に、其蹤跡を留むるを見る。たとへは萬葉集に、

神代より言ひつてけらく、　そらみつ倭の國は、
皇神のいつくしき國、　言靈のさきはふ國と、
語りつぎ、いひつがひけり、　※　※　※　※　※　※　※

とあるは、山上憶良の歌なり、又、柿本人麿も全書に

葦原の瑞穂の國は、　神ながら言あげせぬ國、
しかれども、　※　※　※　※　※　※　※
敷島の、やまとの國は、言だまの、
さきはふ國ぞ、まさきくありこそ。(全反歌)

の上より考ふるときは、古語拾遺は、釋日本紀に引く承平私記に先だつこと、百三十年程なれば、其書き傳ふる古事は、釋日本紀のよりも、一層信を措くべきに似たり。加ふるに、上古に文字ありといふ説は、前段に述べし如く、我國上古の風俗と枘鑿相容れざるなり。また釋日本紀に云ふ處の「龜卜の術は、神代より起れり、文字なくんば、豈、卜を爲すべけんや」との論の如きは、牽强附會も、また甚しといふべきのみ。神代既に文字ありしならば、かの佶倔解しがたく、書しがたき漢字の渡來するあるも、安んぞ其傳播のかの如く速かなるをえん。如何で固有の文字を、壓倒し去る事を得たらんや、

第三、神代文字の性質。　世に神代文字と稱する者、數種ありて、日文、天名地鎭、秀眞等の名あれども、其字形構造は、みな朝

守あらず。貴賤老少「口々に相傳へ「前言往行、存して忘れず」とあるは「正確なる事實ならんと、おもはるゝなり。

第二傳說。　古書によりて、上古文字の有無を論ずる者は、前にも云ひしが如く、まづは、古語拾遺に據りて、文字なしと說き、釋日本紀などによりて、之を反駁す。今、此兩說の當否を辨ぜんと欲せば、此二書の中、孰れか最も信憑すべきかを考へ、以て其價直を論定せざるべからず。

古語拾遺は、歷世朝廷の祭祀を掌りたる齋部廣成の、大同二年に奏上せる書なるが、釋日本紀は、其後四百餘年を經て、文永の頃、神道者吉田家の祖先なる卜部懷方が著したる書なり。されば、此二書の作者は、共に我國の古事舊典を、傳へたる家柄にして、容易には之を輕重軒輊しがたし。然るに、唯年代

| | ㄱ k | ∧ s | ㄷ t | ㄴ n | 合 h | ㅁ m | 工 y | コ r | ○ w |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ト ア | ㄱト カ | ∧ト サ | ㄷト タ | ㄴト ナ | 合ト ハ | ㅁト マ | 工ト ヤ | コト ラ | ○ト ワ |
| ｜ イ | ㄱ｜ キ | ∧｜ シ | ㄷ｜ チ | ㄴ｜ ニ | 合｜ ヒ | ㅁ｜ ミ | 工｜ イ | コ｜ リ | ○｜ ヰ |
| T ウ | ㄱT ク | ∧T ス | ㄷT ツ | ㄴT ヌ | 合T フ | ㅁT ム | 工T ユ | コT ル | ○T ウ |
| ╡ エ | ㄱ╡ ケ | ∧╡ セ | ㄷ╡ テ | ㄴ╡ ネ | 合╡ ヘ | ㅁ╡ メ | 工╡ エ | コ╡ レ | ○╡ ヱ |
| ⊥ オ | ㄱ⊥ コ | ∧⊥ ソ | ㄷ⊥ ト | ㄴ⊥ ノ | 合⊥ ホ | ㅁ⊥ モ | 工⊥ ヨ | コ⊥ ロ | ○⊥ ヲ |

| | ㄱ | ∧ | ㄷ | ㄴ | 合 | ㅁ | 工 | コ | ○ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ト | ㄱト | ∧ト | ㄷト | ㄴト | 合ト | ㅁト | 工ト | コト | ○ト |
| ｜ | ㄱ｜ | ∧｜ | ㄷ｜ | ㄴ｜ | 合｜ | ㅁ｜ | 工｜ | コ｜ | ○｜ |
| T | ㄱT | ∧T | ㄷT | ㄴT | 合T | ㅁT | 工T | コT | ○T |
| ╡ | ㄱ╡ | ∧╡ | ㄷ╡ | ㄴ╡ | 合╡ | ㅁ╡ | 工╡ | コ╡ | ○╡ |
| ⊥ | ㄱ⊥ | ∧⊥ | ㄷ⊥ | ㄴ⊥ | 合⊥ | ㅁ⊥ | 工⊥ | コ⊥ | ○⊥ |

右の如く、我神代文字と朝鮮吏道とは、字形構造を同くし、等しく、ト(ア)｜(イ)T(ウ)╡(エ)⊥(オ)を以て字母とし、ㄱ∧ㄷㄴ合ㅁ工コ○を以

鮮文字の吏道、或は諺文といふ者と、全く同一にして、僅かに異なりとも云ふべき點は、朝鮮音と、皇國音と、の差別より生ぜる文字の聲音のみなれども、これとても、甚しき差異あるにはあらざるなり。さて、この神代文字の起源まつきては學者の說、一ならざるが如し。或は我國神代に製作せられたる者にして、朝鮮に傳はりたるなりといふ者あり。或は之と反對に朝鮮より、皇國に傳來したるなりと云ふものもあれど、こは、たゞ字形の同一なるよりして、想像を逞くしたる論なるのみ。余は、これより、神代文字と吏道との字形構造を、對照比較して、其出りて來りし根源に遡らんとす。

日本神代文字
朝鮮吏道

二十六字と異なることなし。其母音は、अ आ इ ई उ ऊ ए ऐ ओ औ にして其略字は ा ि ी ु ू े ै ो ौ なり。故に梵字にて、「カキクケコ」「タチツテト」の成音字を作らんとせば、父音 क त に、母音の ि ु े ो を添ふるなり。即ち、क कि कु के को त ति तु ते तो となるが如し。文字組織の方法は、右のごとく、神代文字も朝鮮の吏道も、梵字も、同樣なるが上に、梵字母音の略字と、神代文字、及び吏道の母音とは、其形狀、稍、相似たる處あれば、此三種の文字は、同一起原より、流出したること、疑ふべからず。然るに、朝鮮吏道は、佛法を學びたる者の子の、つくりたりと云ふ傳說さへあれば、其梵字より出でたること、明らかなり。

（朝鮮史略の註に、吏道をつくりたる薛聰が事をしるし、聰が父を元曉といふ、沙門にて、佛書に該通せりとあり。また其後、世宗の時に、諺文を作りたる事をしるして、其字體梵字によりて、之をつくる、と、備齋叢話などに載せたり。然るに、吏道と諺文とは、同物なれ

て父音とし、父母相合して、始めて一字一音となるものなり。母音は、羅馬字を以て表はせは、AIUEOにして、父音はkstnfmyrwなり。而して前の表にも示したるが如く、母音を右とし、父音を左にしきて、組みたてたる字と、父音を上に戴き、母音を下に置きて、構成したる字と、二樣あれども、これたゞ左右上下の違ひたるのみにて、其構成上の學理的精神に至りては、異なることなきなり。

今、一步を進めて、所謂神代文字、及び朝鮮吏道の構造は、全く梵字と同一方法なることを明かし、而して、前者は、後者によりて、製作せられたる者なることを論せん。梵字には、父音三十三、母音及び半母音、合せて十四と、外に二箇の符號(・:)とあり。之れを綴り合せて、其語音をあらはすこと、我國の五十音、西洋の

是れなり。
日文の外に、所謂上記の假字などあれど、その僞書なる事は、既に先哲の定論ありて、疑を容るべきに非ざれば、茲に之を論ぜず。されば、我神代の頃には、歌謳等の文學の種子たるべきもの、即ち不文の文學有りしは、勿論なれども、この種子萠芽して、地上に出で、以て文學の第一段階を來しゝは、漢字の入り來りしによれり

ば、いづれにしても、梵字より出でたること明らかなり。）』扨、この吏道と、神代文字とは、同じく梵字より出でたる者と斷定せば、次には、我より朝鮮に傳へしか、彼より我に傳へしかを、論ぜざるべからず。若し、吏道は我より彼まで傳へたる者とせば、我國には、彼より先きに、梵語に通じたる者無くばあるべからず。然るに、我國にて、梵語に精通したる者は、かの高僧、空海を以て嚆矢とす。空海が入唐せしは、篩聽の時代を去ること一百二三十年なり。また年代の上より云ふも、佛教は、韓土より我に傳へたるほどなれば、其梵語に明かなる者を、我より先きに出ださしも、當に然るべき理なり。また、彼より我に此文字を傳へたりといふ結論を、確むべき地理上の證據あり。そは、日文を傳へたる處は、對島の卜部氏、出雲の大社、或は九州の邊隅のみなりし事

字漢語を、傳へたりしこと、疑ふべくもあらず。且また、我國の交通せし國は、獨り三韓のみにあらず。既に開化天皇の頃より、漢土にも交際せしこと、前漢書、後漢書などにも見えたれば、我國に漢字の傳はりしは、蓋し遲くとも、崇神天皇以降にはくだるべからず。其後三百餘年を經ては、神功皇后が使を魏に遣はして、書を贈り給ひしことあれば、この頃には、既ま漢文を綴るものさへ有りしを疑ふべからざ此皇后が、三韓を征服し給ひてより、彼我の往復も、一層繁くなるに隨ひ、我國の全く開けざりし風氣を闢き、有形上に、無形上に、大に我國の文明を進捗せしめたるのみならず、內政の事業も、漸く多端に趣きしあるべければ、百般の事、唯之を語り傳ふるのみにて、足るべきにもあらず。交際上、政治上よりして、定めて文字の

## 第二章　漢字、及び、漢籍の渡來。

前にも論じたるが如く、我國の上古は、風俗淳樸にして、人々其生活に奔走すると、時々干戈を提げて、戰場に臨むとの外は、事業も頻繁ならざりしかば、文字の必要を感ずる事薄く、また、廣く、人々の間に、通用する文字も無かりしまゝに、我國を言靈の助くる國、言靈の幸ふ國といひて、國語の自由なる事を誇り、萬の事を云ひつぎ、語り傳へて、久しく年處を經過したりき。然るに、我國と三韓との交通は、早く神代より開けしを明らかにして、紀元六百年、崇神天皇の頃に至りては、愈盛になれり。而して、韓土にては、早くより支那の學術行はれたりしかば、我國との交通、漸く繁くなりて、天日槍の如き、本邦に歸化する者も多くなりしに隨ひ、彼の言語文字、即ち漢

皇が、荒宮に安し給ひて、租税を免ぢ、百姓を惠み、民の富めるは、朕の富めるなり、民の貧しきは、朕の貧しきなりと宣ひしが如き、もと聖德の盛なるに、由るべしとは云へ、儒學を修め給ひし效も、亦與りて力ありしならん。所謂、堯舜の政、早く既に、我國に傳はりしものなるべし。然れども、當時、學問を修むる者は、尙、甚少く、專ら漢文を讀み、又之を綴りし者は、多くは、三韓より歸化したる者、若くは其子孫なりき。されば、王仁の後は、文氏といひ、阿直岐の後は、史氏といひ、共に其血脈繁衍して、大和河内の兩國に居り、東(大和)西(河内)の史部と云ひて、奕世文筆の業に從事したりき。其他は、朝廷の重臣といへども、文事には、甚だ冷淡なりしが如し。是れ一は、我上代の世職の風俗によれるなるべし。次で履中天皇の四年には、始めて、

必要を、感じたりしならん。されば、應神天皇の十五年ま、百濟の王子、阿直岐こいふもの朝廷の命に應ぢて來りしかば、皇子稚郎子、之を師として、經典を學び給ひ、其のち阿直岐更に其國の學者、王仁を推薦したりしが、其渡來せし時には、論語十卷、千字文一卷を獻上せり。皇子稚郎子、又之を師として、經典の敎を受け給ひし事、史上に見ゆ。是れ實に、我國、文敎れ始にして、神武天皇即位紀元をさるを、正に九百四十六年なりとす。『皇子稚郎子は、聰明にして、能く經書の義理に通ぜられしかば、高麗王の使を遣はして、表文を上りしとき、稚郎子は、其文辭の暴慢無禮なるを怒りて、之を破り、其使を詰責し給ひき。應神天皇の崩御ありしに當り、其兄、大鷦鷯皇子と、互に皇位を讓りて、謙遜の徳を表はし給ひしが如き、また、仁徳天

茂、全、段揚爾等百濟より貢せられ、醫、易、曆道の博士も來りて其法術を布きたり。かく文字の用法、大に開くるに從ひて、上古の歌謳をはじめ、貴賤老少の口々より言ひつぎ、語り傳へ〳〵といふ古事なども、漢字にて、書き寫されて、以て後世に遺りしものあるべし。

漢字及び漢籍の渡來は、略、右に述べたれば、今、簡單に、漢、呉音の事に就きて、一言を附加し、以て此章を終るべし。抑、漢字には、必ず其字音あり。而して、字音に。漢呉の兩樣あるは、人の知る處なるが、原來さかありしには非ず。支那東晉の世の末葉に至り、鮮卑の諸族、中國を蹂躪せしかば、內外の音、混亂せる事甚だし。而して、麻の如く亂れし天下は、南北の兩朝と分れしかば、漢以來の古音は、南朝に存し、雜糅の音は、北朝に屬し

諸國に史官を置き、民の言事を記さしめ、四方の志を達せしめ給ひき。此等れ文体は、如何なりしか、今日之を知るによしなしといへども、古事記。氏文。上宮記等の文体より推考するに、蓋し漢字の音訓を並用し、本邦の言語を寫したるものにして、不整頓なる漢文の如きものなりしなるべし。是れより、世運の益開くるに從ひ、雄略天皇の代にい、東西史部をして、出納を勘錄せしめ、また秦酒公をして、大藏の記簿を掌らしめ給ひ、欽明天皇の朝には、王辰爾に命じて、船賦を錄せしめ給ひ、其他、田令を置き、戸籍帳を定めて、田部丁籍を作り、津史を設けて、港泊出入の船舶を記せしむる等、文筆の必要を感ずる事、次第に多くありき。されば、三韓より、學者の渡來せし事も少からず。繼体天皇の十年には、五經博士漢高安

て、拗音を直音に約め、通音に轉じ、或ハ鼻口の音を相移し、或は急緩の發聲を、相換ふる等の事ありたるべきは、夙に本居宣長等の論ぜしが如くなるべし。

て、全く分離し、南朝は古の呉の地に都せしかば、其音を呉音と稱し、北朝は漢の地に在りし故に、其音を漢音と呼ぶに至れり。されば、漢字と共に早く我國に傳はり、繼で阿直岐、王仁等の來りて敎へしも、呉音なる事、言ふまでもなけれど、當時、固より未だ呉音といふ名稱はあかりき。かの古事記中の假名の専ら呉音なる事、また古よ里日常通用の語は、今日。元年。食物。等の如く、大抵呉音なる事等を見ても、此音の、早く我國に流傳せしを知るべし。さて、推古天皇以降、直接に隋唐と交通する事、頻り里なるに及びては、隋ハ北朝、即ち漢音の國と里起りて、兩朝を一統したるものなれば、漢音ハ此頃より我國にも傳はりしなるべし。然れども、漢音も呉音もひとしく、聲音の同一ならざる我國に入りし事ゆゑ、多少の變化を受け

聖德太子が、島大臣馬子と共に議して、始めて、國史を編修し天皇記。國記。臣。連。伴造。百八十部、并に公民等の本記を作られしも、其文章はみな漢文体なりしならん。其外、當時乃文にして、今日に傳はる者は伊豫の道後温泉の碑文、十七憲法、大和法隆寺なる二臂如意輪觀音の銅像の銘。同藥師像の佛背の銘、釋迦佛銅像の銘等あれども、一として漢文体ならざるはなし。

さて、漢學は、忠孝仁義を說き、政治、法律、道德の合一を以て基礎とし、鬼神を敬し、祖先を祭ることを旨とするが故に、其渡來せし後も、唯、本邦從來の風俗習慣を牢固にするのみにして甚た撞着矛盾する處なかりき。されば、我文學には、名教といへる一の精神ありて、古今を貫徹せる事の淵源は知るべき

## 第三章　佛教の東漸。大化の改新。及び、人心の變遷。

漢籍渡來の後、文運漸く開けたりしが、佛教新に東漸するに及びて、頓に大に之を鼓舞したり。佛教は、實に欽明天皇の十三年に（紀元一千二百十二年）百濟より傳へたるものにして、始めて、論語千字文の渡りしより、二百三十餘年を歷たり、其經卷は、概ね漢文なりしかバ、佛教の流行は、自から、漢文を奬勵せし事、勿論なり。此後、聖德太子の憲法十七ケ條の制定といひ、推古天皇の十五年に、小野妹子をして、始めて、隋國に使せしめ、彼我の通交を開き給ひしといひ、これと同時に、學生高向玄理。南淵請安。僧旻等を入唐留學せしめしといひ、孰れも、漢文學の進步を促ししものに非ざるはなし。されば、同帝の二十八年に、

勝ちたることあり。疫病の流行を、鎭めたることあり、また、訴訟に探湯を用ひて、神の裁決を受けし類、枚擧すべからず。此風習は、漢學渡來の後も、變ることなかりしのみならず、却て、益、其鞏固を致したり。佛法、東漸の際には、尙ほ中臣氏、物部氏の如きありて、佛法を排擊して、若し佛を祀らば、神譴を受けんと云ひ、時に偶ま疫病の流行ありしを以て、國神の怒を示し給ふなりと論じ、佛像を水中に投じ、堂舍を燒き拂ひしかども、其より三四十年の間に、民心頓に變じて、佛を敬するもの多く、疫病の流行に逢ひて、先きに佛像を毀ち、堂舍を燒きたる祟なりと云ひ、天子の弑逆を以て、過去の報なりといふに至れり。夫れ、古より、我天子には、神命に逆ひて、死を招き給ひし君こそあれ。過去の報によりて、刀刄に斃れ給ひし君や

のみ。其後、佛法の東漸、唐土との通交等は、何れも、非常の大事件なりしかば、其人情風俗を感化し、從ひて、文學上の面目を改めしこと、また著るしく、殊に、奈良の朝、及び平安の朝の間の文學は、佛教の影響を蒙ること、最も甚し。故に、我王朝時代の艷麗なる文學の眞相を、明らにせんと欲せば、之が先蹤として、茲に此等の大事件が、如何に人情風俗を、感化せしかを、略述せざるべからず。

夫れ、我國古來の政治の有樣を觀るに、所謂祭政一致にして別に嚴然たる法律制度なく、宗教なく、天子は、天神地祇を祀り、祖先を敬ひ給ひ、人民は天子を現神として、之に仕へまつりき。此の如く、上下一般に敬神の風篤く、吉凶禍福、皆、神意のまに〱、如何にもなるものと思ひしかば、神を祀りて、戰ふ

の變遷を促したる者は、獨り佛法の如き、無形のもののみなら
ず。推古天皇の朝に、聖德太子が、十二階の冠を作り、群臣の服制を定め、參朝の禮を、整へられたるが如きは、官民をして、靡然、唐風を慕ふ念を、生ぜしめしならむ。また、寺塔の巍峩たるは、人目を眩曜して、其心を變せしめしならむ。此外、天文、地理、暦術等の學問より、繪畫、彫刻、舞樂等の技藝、また、紙、墨、碾磑等の製方に至るまで、新奇の物、多く出でたれば、形而上、形而下の論なく、一として、人心の變動を、促さゞるものなかりけり。抑、佛法の東漸は、政治の上などにては、皇室の威嚴を損し、權臣の專橫を、來たしゝ等の弊害ありしかど、其弘通は、唐風の摸倣と共に力を幷せ、我國の樸實なる風氣の前に、漢學の渡來によりて、開けしものを、更に大に、進歩せしめ、遂に、奈

はある。昔は、天子は人種にあらず、天神の裔孫なりとして疑はざりしに、佛法の隆なるに隨ひ、萬乘の尊きも、自ら三寶の奴と稱し給ふに至りては、人民も之を觀て、釋迦こそ至尊よりも、尚遙に尊きものなれ。僧尼こそ、天子よりも大に賴もしきものなれと思ひき。されば、寧ろ君命に背くとも、僧尼の語には從はん。王法は如何にもあれ、佛法には違ふまじと注意し。苦しむ者は、彼岸の安樂を願ひ、樂しむ者は、來世の呵責を逃れんと欲し、貴賤上下、貧富强弱の別なく、一意たゞ因果應報、地獄極樂の說に迷溺したり。聖德太子が、憲法を制定して、其第二條に「篤く三寶を敬へ。三寶は四生の終歸、萬國の極宗なり。」と云はれし如きは、大に此勢を激進したるものあり。然れども、儒學の說く處は、尚未だ甚だ衰へざりき。さて、人心

の往復繁く、文物制度、悉く彼を摸擬せらるゝ、此くの如くなるに至りしかば、漢學の必要、益甚しくなりき。是を以て、孝德天皇の時には、漢學奬勵のために、高向玄理、僧旻を以て、博士に任じ、天智天皇のごときには、はじめて學校をおこし、大學頭などを任命し、博士學生等を置きて、學事を奬勵し、文武天皇の時には、大學に諸道の博士を置き給ひき。されば、漢學の進歩は著しくして、弘文天皇の如きは、巧みに唐詩をさへ賦し給ひき。其妙作、多く懷風藻にあり。此他、律令の撰定といひ、壬申の變亂といひ、此百有餘年の間には、古今未曾有の大事變のみ、重なりしかば、見るとして、目の驚かざるはなく、聞くとして心の動かさるはなかりき。而して、此等の事變よりして、人の智識も、大に開發せられ、想像も、益精緻を極め、感情も、亦

良朝以降の文化を、見るに至らしめしは、毫も疑を容れざる處なり。

これより後、間もなく、復び政治上の一大變動を以て、人心を動かしたり。それ、大化の改革なり。抑も、此改革は、神武天皇以來、一千三百有餘年間、行はれたる政治の有樣を一變し、地方分權の舊制を改め、中央集權の唐制に倣ひ、其他、朝廷には、八省百官を置き、冠位を定め、人民の爲めには、戸籍を作り、班田の制を設け、租、庸、調の法をたてられたりき。是に於て、我國ふも、文物制度の、燦然として見るべきもの、始めて見はれぬ、蓋し、此改革は、十七憲法の趣意を布衍し、之を實行したるに、外ならざるべし。是より先き、推古天皇の代に、漢學の起りしは、佛教興隆の餘波ともいふべきなれども、其後、遣隋、遣唐、諸使

## 第四章　奈良朝以前の文學。

漢字渡來して、わが文學、始めて其嫩芽を萌生し、爾後、漢學、佛敎、次き〳〵に東漸して、其成長を促かしゝは、前章に述べたるが如し。當時、文學の土壤は、尙未だ荒蕪不毛にして、文學として觀るべきもの殆となし。然れども、既に前に云ひし如く、我國は、古より言靈の幸ふ國、言靈の助くる國と唱へて、國語の優美なるを誇り、百般の事物を語り傳ふる風習なりしかば、己れの喜を述べ、悲をやり、或は他人の憤怒を解き、鬱憂を慰むる爲に、言詞を飾り、節調を附したる歌謳の類、又激切なる感情を述べ、人の同情を起さしむる爲めには、たとひ歌ならずとも、冠辭を設け、對語を作りて、言ひ出したる祝詞の類のみは、さすがに後世にも、傳はりたれば、其數は多からずと

大に、高雅となりしかば、其影響は、忽ち、日本文學の上にあらはれたり。殊に其著しきハ、次編に論ぜる處の奈良の朝、及び、平安乃朝の文學に於て、しるべきなり。

熟を經たるにあらず、聲調を巧みにせしにもあらざりしが如し。素盞之男尊が、天より降り給ひて、出雲の國、簸の川上に到り、櫛名田姫と相住まんとて、須賀の宮を作り給ひし時、雲の其地より立上りしを、見給ひて

八雲たつ、出雲八重垣、妻ごめに、
八重垣つくる、そのやえがきを。

と詠み給ひしを始めとし、天神、國神の中にも、歌に巧みなりし者少からず。人皇の御代となりては、歴代の天皇及び皇后、殆んど、詠歌あらざるはなく、特に神武。應神。仁德。允恭。雄略。武烈。推古等の諸帝、及び媛蹈韛五十鈴姫、(神武の皇后)盤之姫、(仁德の皇后)等の諸后は、最も巧妙に渡らせ給へり。其外、衣通姫、影媛、勾大兄皇子、平群鮪、蘇我入鹿等、皆、秀歌あり。然れども、孰れも、歌人文

雖ども、尙ほ上古の人の思想感情の一斑を窺ふべく、我國文學の萠芽は、如何なる土壤に發生し、如何なる容貌を。有するかを見るに足るべし。

推古天皇以前にありて、我上古の文學として、ミるべき者は、まづ、古事記、及び、日本書紀に載せられたる歌謳れ類みみといふべきなり。古事記、風土記、及び祝詞れ中ゐ、諸神の語を記るたる處には、上古より語り傳へたる者も、多かるべし、と雖ども記者の改竄添削しさるも、亦甚だ多りるへければ、全く上古の者なりとは、斷言すること能はざるなり。さて、古事記、及び日本書紀に、載せられたる歌は、能く當時百般の事物が、皆、簡單素樸なりし狀態を、示せるものにして、概ね感慨の切なる時ま、眞情を打出したるまゝまして、別に練

後の歌の第二句に、鄙つ女の語あるにより、兩首を通おて、夷曲といふに至りしとぞ。曲とは凡て歌の曲節の狀をいふなり。又、來目歌といふものあり。是れ、神武天皇が、戊午の年（紀元前三年）八月に、兄猾を滅ぼし給ひし時、其弟、弟猾、盛宴を張り、皇師を勞ひしかば、天皇酒肉を軍卒に班ち賜ひて、謠ひ給ひしものなり。其歌は

「菟田のたかきに、鴫わなはる。吾が待つや、鴫はさやらず。いすくはし、鯨さやる。こなみが、な乞はさば、立ちそばの、みのなけくを、こけしひゑね。後妻が、な乞はさば、いちさかき、みの多けくを、こきたひゑね」

といふ、後世の久米舞といふもの、蓋し是れより始まるといふ、また對話の場合にも、歌調を以て、意を通はせしことあり。大

學者として、之を視るべからざるは勿論なり。今二三の例を、次に擧けて、上古歌謳の体裁を示さん。

神代の時、天の稚彦の死せしとき、味耜高彦根神來り弔ひ給ひしに、衆のためま、死せる稚彦と誤認せられしかば、大に忿りて、飛び去り給ひしに、其いろも高姫命、其場に在り、高彦根の名を顯はさんと思ひ、歌ひ給ひしもの、二首あり。左の如し。

天なるや。乙たなばたの、うながせる、玉のみすまる、みすまるに、あな玉はや、み谷、ふたわたらす、味耜、高彦根の、神ぞ。

又

天さかる、鄙つ女の、い渡らす瀬戸、いしかは片淵、かたぶちに、網張りわたし、女ろよしによし寄り來ね、石河かたふち。

右兩首の歌は、是れ、後世大歌所にて、夷曲と稱ふる者なり。蓋、

みな風流の心に富み、戎馬の際にも、かゝる逸興ありしを知るべし。或は之を以て、後の所謂、連歌こいふものの濫觴こすといふ。武振熊が、歌を以て戰を挑みしなど、事頗る奇なるが如しと雖とも、是れ今の軍人が、進軍の喇叭を吹くと同樣なりしなるべし。すべて、此時代の歌は、天眞爛漫の一語を以て、評し盡くすべし。前にも云ひし如く、上古の人は、折にふれ、喜怒哀樂の情を動かしゝ時、平語に曲節を付して、謳ひ出したるもの、即ち是れ歌なれば、其詞勢率直にして、至誠の情、其樸野遒强なる詞のうちにあらはる。然るに、五七、七五の調は、もとより、我國語を歌誦するに便利なるを以て、此等の歌謳の中にも、存在すれども、決して、之れに一定せるにあらず。其用語の種類と、曲節の如何とによりて、隨意に、長短の句を聯結

久米命が、伊須氣余理姫を、神武天皇はすゝめ給へる折の對話の如し、即ち是なり。顯宗、仁賢の二帝が草盧は坐ましゝとき、歌舞を以て、其帝系に屬し給ふを、知らしめ給ひしも、是に近し。景行天皇が、筑紫に幸きし給ひ、高田の行宮に座しましし時、群臣百寮が、僵樹の上を往來するを見て、時の人の歌をよみたる。また、應神天皇の吉野に幸きありし時、國巣の人の、醴酒を奉るとて、歌を詠みしが如き、卑賤なるものも、亦之を能くせしを見るに足る。又、日本武尊が、東夷を征伐し給ひて、途次、常陸を經、甲斐の國に至り、酒折の宮に憩ひ、食を召し給ひし時は「にひばり、筑波をすぎて、幾夜かねつる。」と歌を以て、侍者にたづね給ひければ、燭を執りて侍せし者答へて「かゝなべて、夜にはこゝの夜。日には十日を」と云ひしが如き、上下

くものふるまひ、こよひしるしも

天皇、此歌を聞き、大に感じ給ひ、之に和して

ささらがた、錦のひもをひきさげて、

あまたはねきに、たゞ一夜のみ。

と詠じ給ひき。其十一年三月、茅渟の宮に、行幸のときには、衣通姫、歌ひて曰く

とこしへに、君もあへやも、いさなとり、

海のはまもの、よるときときを

これらは、既に、完全なる三十一文字の歌の樣を、なしたるものなり。尙、歌體の事は、次編萬葉集を、論ずるときに云ふべし。稍、下りて、推古天皇より、天武天皇に至るまで、八代九十餘年の間は、社會大に開け、漢學進歩の影響によりて、文字を用ふ

せる事を知るべし。さて、人の情の中にて、最も初に發達し、最も勢力の强大なるは、男女相愛の情なり。蓋し戀情は、古今の差なく、貴賤賢愚の區別なきものにして、飮食飢渴の慾よりも、一層烈しきものなれば、我國古代の歌謠にも、男女贈答の歌、最も多きは、怪むに足らず。夫の歌垣と云ひて、男女相集まりて、舞跳して、歌をかけ合ひて、意を通せし時の歌の如き、多くは是れなり。然れども、後世、かの平安の朝に至り、只管、遊惰を事とし、其風延いて、戀歌の盛んなるを致しゝと、稍其事情を異にせり。允恭天皇の八年春二月、藤原の宮に幸し、密に衣通郎姬を察給ひしに、是夕、衣郎通姬は、天皇を戀ひて、獨り思ひ沈み、天皇の臨御を知らず、歌うて曰く

わがせこが、來べきよひなり。さゝがにの、

れの國の文學も大方は歌謡を以て、始まりし所以なり。されば、祝詞は、其文の結構、語りつぎ、言ひ傳ふるに便利なるのみならず、敬神の風篤くして、祭祀の制の、嚴かなりし我上代の事なれば、極めて古き祝詞の、永く傳はりたるなるべし。

然れども、祝詞の中には、御代〱に新たに作られたるもあるべく、また古のを、改定したるもあるべし。而して、誰か之を作り、誰か之を改めたりしか、其詳細は知り難しといへども、加茂眞淵の説に據れば、出雲の國造の神壽詞は、舒明天皇の朝にあらはれ、大祓の詞は、天智、天武の朝の頃に作られたるものなるべしと云ふ。本居宣長は之を駁して大祓、大殿祭、御門祭等の詞は、既に神武の朝にありと云へり。さて、祝詞は、其文字こそ漢字なれ、孰れも、國文の純粹なる者にして、就中最

る事も、大に自在になりしかば、文學も、自づから、著るしき進歩をなしたり。それ古事記、日本書記に載れる歌謡と、萬葉集の初巻に載れるのとを、比較せば、其優劣自づから知らるべし。また質樸にして、しかも優美なる延喜式の祝詞の文の、あられたるも、此時代なりとす。

此祝詞は、實に、我國散文の始めともいふべきものにして、祭詞、壽詞、大祓等數種あり。（誄詞も亦此類なり）凡て、神前に告白する詞にして、概ね神の怒を宥めて、災禍を除き、神の心を悦ばしめて、幸福を求むる爲めのものなれば、對句を設け、枕辭を冠し、巧に言詞を修飾して、神明も賞し給ふばかり優美に、綴りなしたるものにして、句節正しく、聲調甚だ佳なるが故に、殆んど、歌調と異なることとなし。是れ蓋し總論に於て云ひし如く孰

高天原に、神づまります、皇親神漏岐、神漏美の命もちて、八百萬の神たちを、神集へ、つどへ玉ひ、神議り、議り玉ひて、我皇御孫の命は、豐葦原の水穗の國を安國と、平けく知ろし召せと、事よさし奉りき。かくよさし奉りし國中に、荒らぶる神どもをば、神問はしに問はし玉ひ、神掃ひに掃ひ給ひて、語問ひし磐根あのたち、草の垣葉をも、語止めて、天の磐座はなち、天の八重雲を、いづの千別きちわきて、天降しよさし奉りき。かくよさし奉りし、四方の國中と、大倭、日高見の國を、安國と定め奉りて、下津磐根に、宮柱太しき立て、高天の原に、千木高しりて、皇御孫の命のみづのみあらか、仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と、隱りまして、安國と平けく、知ろしめさん、國中に成り出でん、天の益人等が、過ち犯し

も見るべきは、祈年祭の伊勢太御神に白す詞。大祓の詞。出雲國造の神壽詞等なるべし。昔、天祖、天照大神の天の窟戸に籠りましゝ時、天兒屋根命が、岩戸の前にて、奏し給ひし諄辭とは、如何なる物なりけん。今日に傳はらずといへども、天祖、これを聞こし召して、「未だ此言の若き美麗なるはあらず」と宣ひしを見れば、是れまた、祝詞の一なりしこと、疑ひなかるべし。今此種の文例として、大祓の詞を、左に掲ぐ。

大祓の詞

集侍はれる親王、諸王、諸臣、百官人等、諸聞こし召さへと詔る。天皇が朝に仕へ奉る(中畧)人々の、過ち犯しけん種々の罪を、今年の六月の晦の大祓に、祓ひ給ひ淸め玉ふ事を、諸聞こし召さへと詔る。

をかき別けて聞こしめさん。」かく聞こし召しては、皇御孫の命の、朝を始めて、天下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の、天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風夕風の、吹き拂ふ事の如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、艫解き放ちて、大海原に、押し放つことのごとく、彼方の、繁き木が下を、燒がまの敏鎌もて、打ち拂ふ事の如く、遺る罪はあらじと、祓ひ給ひ、淸め給ふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに、落ちたぎ、早川の瀨にます、瀨織津姫といふ神、大海原に、持ちいでなん。此く持ち出往ば、荒塩の、塩の八百道の、八塩道の潮の八百會に坐す、速開津姫といふ神、持ちかゞ呑みてん。かくかゝのみては氣吹戸にます、氣吹戸主といふ神、根の國底の國に、氣吹

けん、種々の罪事は、天津罪と、畔放ち、溝埋め、樋放ち、頻蒔き、串刺し、生剝ぎ、逆剝ぎ、屎戸、こゝだくの罪を、天つつみと法別けて、國つ罪とは、生膚斷ち、死膚たち、白人こくり、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高つ神の災、高つ鳥の災、畜仆し、蠱物せる罪、こゝだくの罪出でん。」かく出では、天つ宣事もちて、大中臣、天津金木を、本打ち切り、末打ちたちて、千座の置座に、おき足らはして、天つ菅そを、本苅り斷ち、末苅り切りて、八針に取りさきて、天つ祝詞の、太祝詞事を宣れ。」かく宣らば、天つ神は、天の磐戸を、押し開きて、天の八重雲を、いつの千別きに千別きて、聞こし召さん。國つ神は、高山の末、低山の末に、上りまして、高山のいほり、低山のいほり

まはく朕が崩後、必ず朕が陵に合葬せよと、廼ち歌を作り給ふ

其一

今城なる、をむれが上に、雲だにも
しるくし立てば、なまがなげかん。

其二

射ゆしゝを、つなぐ河邊の、わかくさの、
若くありきと、あが思はなくに。

其三

飛鳥河、みなぎらひつゝ、行く水の、
あひだもなくも、おもほゆるかな。

上代には、童謠の見るべきもの、また少しとせず。皇極天皇の

き放ちてん。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國に在す、速すさら姫といふ神、さすらひ失ひてん。かく失ひては、天皇が朝に、仕へ奉る官々の人どもを始めて、天下四方には、今日よりはじめて、罪といふ罪はあらじと、高天の原に、耳振り立てゝ聞く物と、馬牽き立てゝ、今年の六月の晦の日の、夕日の降の、大祓に、祓ひたまひ、清め玉ふ事を、諸聞こし召さへと宣る。四國の卜部ども、大川道に持ちまかり出でゝ、祓ひ却れと宣る。

今、また、推古天皇以後の歌謡の一例を、左に擧げん、

齊明天皇の四年五月に、皇孫建王年八歳にして薨じ給へり。今城の谷の上に、殯を起てゝ、之を收め奉りしが、天皇、哀悼に勝へ給はずして、群臣に詔りた

といふ。これ外國の人を以て、橘に喩へたるものにして、外國の人は、兵法。醫藥。五經。陰陽道等、其才藝、各、異なれども、等しく朝臣の列に在りて、榮を受くる事を詠みしものなりと云ふ

二年十月、蘇我入鹿、上宮王を廢して、古人大兄を立てゝ、天皇となさんとせしときに

岩の上に、こ猿米やく、こめだにも、たけて通らせ、かましゝのをぢ。

といふ童謡あり。次で、其戊申に上宮王、罪なくして、蘇我氏に殺され、報はずして在ませども、他人の中大兄皇子、藤原大臣等、其讎を報ひたりといへる意を寓せし童謡あり。即ち

をちかたの、あはのゝ雉子、響（とよも）さず、われは寢しかど、人ぞとよもす

又、天智天皇の十年春正月の童謡は

橘は、れのが枝々、なれれども、たまにぬくとき、おやじ緒にぬく。

# 第二篇　奈良朝の文學

## 第一章　總論

通常、歴史上にて奈良の朝と稱ふるは、紀元一千三百六十八年より、一千四百三十八年まで、凡七十年の間にして、即ち元明天皇の第三年より、桓武天皇が、延暦三年に都を山城に遷し給ひしまで、前後八代、帝都を奈良に奠め給ひし間を云ふ。然れども、玆に奈良朝の文學と稱するは、其區域少しく之より廣く、元明天皇より二代二十餘年以前、即ち持統天皇の朝より、平安遷都の頃まで、凡九十餘年間の文學を總稱せるなり。蓋し、文學は人心の射映にして、鎖のごとく連續せるものなれば、政治歴史に於けるが如く、一事實を以て時限を區劃する事能はず。柿本人麿を始めとして、歌人の元明天皇以前

て、寺領を寄附し給ひしが、國庫は漸く空耗を告げしかば、帝は佛法の爲めには、律令を曲けられ給ひし事もあり。是より朝廷の威嚴漸く減じ、規律漸く正しからざなりき。是より先き、天智天皇始めて學校を剏始し給ひ、歷代の天子之が整頓に注意し給ひ、又京都のみならず、普く國學を諸國に置き、主として經籍を學ばしめ、兼て他の學科をも修めしめられき。當時、大學の内に設けられし專門學科は、四種ありて、記傳明經明法算道といひ、之を總稱して、四道と呼びき。此の如く、學校を設けて、學問を奬勵せられたりしかども、其目的とする處は、單ゞ官吏を養成するにありて、普く人民を教育する旨趣ゞはあらざりき。されば、其學生となるゞも、嚴に資格の制限ありて、一般人民は、入學を許されざりしなり。

にあらはれ、以て其れより後の文學の基礎を、据ゑたるもの少からず。然るに、之を奈良朝以外の文學として、別に論ぜるは、極めて不便なり。故に、勢、持統天皇の朝までは、溯らざるを得ざるなり。

此九十餘年間は、前代既に大改革を舉行せられし後なれば、顯著なる政治上の變動なし。持統天皇より元正天皇の朝に至るまで、四十七年間は、唯前代の律令制度を、增補改修して、完備ならしめ、大化の新政の趣意を、實行するを務められしに外ならざりき。是に於て、政令能く行はれ、文武並び進みて、內外王化に浴し、上下富み榮えたれど、聖武天皇に至りては、制度已に整ひ、天下大に無事なりしかば、專ら心を佛事に用ひ、自から三寶奴と稱し、護國滅罪の爲めにとて、國分寺を建

據り、諸説を綱羅して、撰び給ひしところにして、上は天地開闢より、下は持統天皇に至るまでの事實を記したるものなり是れ實に、我國史撰修の始まりして、此後、次々に撰ばれし續日本紀、日本後紀、續日本後紀。文德實錄三代實錄と幷せ稱して、本朝六國史と云ふ。此書第一第二の卷は、乾坤剖判より鸕鷀草葺不合尊まで至るまでの傳說を、蒐錄したるものにして、所謂神代卷と號し、敬神家の經典とする處なるのみならず、我國上古の事を記せるものは、唯此書と古事記とあるのみなれば、其貴き事云ふべからず。全篇、皆、漢文なれども、神代以下の歌謠等は、其文字こそ漢字なれ、さすがに之を國音に當て、口誦のまゝを載せたるものなれば、さてこそ余輩は上代の歌謠、即ち日本文學の種子は、如何なるものなりしかを、知

斯く、朝廷まて奬勵せられし學問は、即ち漢學なりしかば、此際、漢學者の多く出でしは、言を待たぞ。即ち持統、文武の朝には、葛野王、粟田眞人、山田三方、刀利宣令、守部大隅、の如きあり。元明以後の朝には、舍人親王、紀清人。太安广呂。越智廣江。壚野古麿、淡海三船。吉備眞備、等ありて、漢文學として觀るべき價値あるもの、漸くあらはれき。即ち古事記の序文の如きは、之を推古天皇以前の漢文に比するに、實に別天地の思ひあらしむるほどの名文にして、又、懷風藻の如きは、我國、詩文集の嚆矢たるべき名譽を擔ふ。特に莊麗なる漢文を以て、日本書紀を撰ばれしは、實に我學問上の大事件なりとす。此書ハ、元正天皇の養老四年に、舍人親王。太安麿。紀清人。三宅藤广呂。等が勅を奉じ、故老の口碑に殘りて、神代より傳はれる舊辭に

美艶麗の姿となしたるなり。かゝる人情風俗は、平安朝に至りて、最も其甚しきを見ると雖ども、其陰影は、既に奈良の朝に於て認め得べきものあり。漸次、後に論ずるところを見よ。

此外、奈良の朝には、印刷の業さへ起りき。それ孝謙天皇が天平寶字八年に、勅願によりて造り給ひし百萬塔の中に納めんが爲め、無垢淨光經等の陀羅尼經文を、板刻し給ひしを始めとなす。然れども、余輩が、特に此時代に於て注目すべきは、曰く片假名の發明なり。曰く宣命。古事記。風土記等に於ける散文なり曰く萬葉集の韻文是れなり。今、順次に之を論せん。

ることを得るなれ。

既に、前編に陳べしごとく、推古天皇の朝に、聖德太子の冠位を定め、憲法を撰び給ひしよりして、隋唐の風俗漸く行はれ始めしが、其後、唐との交通、益繁く、次で大化の改革ありて、典禮制度は云ふも更なり、衣冠調度より、車輿家屋に至るまで、只管、彼れを摸倣する事となりたれば、是れは、外面より唐風の流行を促し、之と共に、漢學の隆盛は、内部より人心を激動して、唐風を歆羨せしめしのみならず、之に加ふるに、佛教冲天の勢力は、よく千有餘年の事物を打破して、國民の精神を豹變せしめしかば、人情風俗の變遷極めて著しかりしなり。

之を要するに、佛法の流行は、勇進活潑の志氣を挫きて、優柔懦弱の心を養成し、唐風の摸倣は、質素樸野の風を變じて、華

を異にしたれば、たとひ音訓を幷せ用ふとも、漢字を借りて國語を其儘に寫すことい、極めて難かりしなるべし。太安麻呂が、古事記の序文を書きしは、漢學の既に大に開けたる時なるが、尚、其文中に云へることあり。「文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し。既に訓に因りて述ぶれば、詞、心に逮はず、全く音を以て連ねたるものは、事の趣更に長し、云々」と、此く、音を用ふれば文章冗長に陷り、訓によれば國語の眞体を寫し難しと、嘆息せるを見ても、當時漢字を用ひて國語をうつすこと、極めて困難なりしことを知るべし。是を以て、天武天皇は、夙に境部連石積等に命じて、特に我國に通用すべき新字四十四卷を撰ばしめ給ひ、其後追々新字を作りし人あり。新字は今盡く傳らずと雖ども、椿、薮、榊、辻、峠の類、皆是れなりといふ。

## 第二章　萬葉假名　片假名の制作あるに至りし所以



前にも述べし如く、推古天皇の朝より、漢學頻りに行はるゝに從ひ、文章を綴るにも漸く盛になりしかば、純然たる漢文を用ひざる限りは、漢字の音訓を并せ用ひて、我國語を寫したるものゝ如し。然れども、漢字は、もと有意文字にして、毎字或る限畫せられたる義理を有するものなれば、日本人の云ひあらはさんとする國語に適應せる、漢字漢語を看出すこと難し。當時上流の人士が、專ら書き習ひたる文章は、即ち漢文なりしが、其漢文だに四六駢儷のもの多くして、充分に作者の述べんとする思想と、其用字との適當せるもの少なし。況や、わが國語を其儘に寫すべき國文は、大に漢文と其法則

を促したる大原因となりしものにして、國文學を講究する者は勿論、國史を繙くものゝ、最も注意せざるべからざる大事實なりとす。何如となれば、我國特有の大利器たる假名文字は、實に、此萬葉假名より出でたるものなればなり。

さて如何にして、萬葉假名といふ漢字よりして、片假名といふ文字出たりしかといふに、漢字は点畫複雜にして、一字を書するも容易の事に非ず。然るに、其音韻を以て國語を寫すには、許多の漢字を連用せざれば、或はその一語だもあらはすこと能はず、安广呂が、古事記の序文に於て嘆ぜしが如く、其煩わしさに勝へざりしなり。故に、人智開け、文筆を要すること次第に多くなるまゝに、誰の發明となく、筆記に從事せし者、或は漢字の点畫を省き、或は其偏傍を去りて、記號樣の

然れども、漢學の漸く進歩するに隨ひ、窮屈なる範圍内に跼蹐しながらも、漢字を用ふること漸く自由になりしと見え、日本書紀、古事記中の歌謡、及び其處々に散見せる神語などの、大抵、漢字の音をかりて、國語を寫したるものは、其大に巧みなるを見る。尚、進んで、萬葉集の歌に至りては、單に字音のみを用ひて甚だ巧みなるあり、單に字義のみを用ひて妙なるもあり。殊よ遊戯書法を用ひたるなどは、其國語をうつす技倆に長じたることを徵するに足れり

萬葉集中の歌を書きたる者の如く、國語を直寫するに用ふる漢字を總稱して、萬葉假名といふ。之は主として漢字の音聲を假用し、其意義を省みざるものなり。此く有意文字を利用して、單音文字となしたるは、實に我國文學の、長足の進歩

が極めて便利なりしを以て、漸次に流布して、遂に世人一般に、之に頼るに至りしものあればなり。されば、假名は如何なる人が、如何なる時に、之を作りたりと云ふをなく、當時文筆に從事せしもの、特に佛者の間に、自づから發達せしものなるべし。但し、之を五十音圖に組立てたりしは、世に傳ふるが如く、吉備眞備なるべきか。蓋し、深く音韻の學に通じたる者ならでは、能くしがたき事業なりとす。余輩熟ら五十音圖を考ふるに、大体は、梵字の排列にならひて、組成したる者なるべし。先哲も既に此說を主張せり。

片假名、既に發明せられたれば、是より漢籍の讀方なども、甚だ學びやすくなりたるべしといへども、僅かに五十の文字だに熟知せば、如何に複雜なる思想、想像をも、自由自在に表はし得

文字を用ふるに至りき。是れ必要より起れる自然の成り行きにして、繁雑より簡單に進み、不便より便利に遷りたるなり。今日と雖、佛者が菩薩をサヽと略し、又普通に、暦歴雁等の文字を、單に厂とする類皆之と同じ。而して、かく漢字の省略法を用ひて、世用を辨ずるに至りしは、全く漢字の意義を省みず、音韻のミを主として用ひ來りし人々ありしによるなり若し、其意義のミに拘泥したらんには、いつの世までも、假名の如き便利なるものゝ發明なかりしならん

さて、此片假名の發明も、また佛教の影響に由れる事多し。蓋し佛說の講演、盛大に行はるゝに及び、之を筆記するものゝ、漢字の不便を感ぜしは、最も切なりしならん。されば、此徒は、初めは自己一人の符牒を設け、漢字に省略法を施したりし

## 第三章　奈良朝の散文

奈良の朝は、我國の文學の、始めて光輝を放ちし時代にして、就中、其最も觀るべき者は和歌なり。散文も亦、發達して、古事記、風土記、宣命等の文章の如き、一種の特色を具ふるものあらはれたり。然れども、散文の尚未だ素樸なるは、和歌の豐富婉麗なるに比すべきに非ず。實に此時代の和歌は、孰れの點より觀察するも、秀妙なるものにして、後世の企て及ぶ處に非ず。故に此時代を呼びて、和歌の時代といふも、決して失當の言にあらざるべし。

かく、奈良朝の文學が、歌に富みて散文に貧しきは、其理なきに非ず。抑、歌は、たとひ漢字を用ひて書きたりとも、之を諷詠するには、必らず國語の讀法に隨はざるべからず。然らざれ

るゝ至りしかバ、我國文學の一蹶して豐富の域に入りしは、また言を待たず。されども、五十音全く整頓して、片假名の一定したりしは、奈良朝の末の事なれバ、其光輝を發揚せしは、卽ち平安の朝に在りとも。嗚呼、我が日本文學の萠芽は外國文字の渡來を待ちしといへども、玆に至り、假名文字の製作ありて、遂に我國特有のものと、誇稱するを得るに至りしは、豈、快心の事にあらずや

く思はれしかば、又何を苦みて、特更に難きを撰ばんや、唯、已むを得ざる場合に限り、國語の散文を用ひしのみ。是れこの時代には、散文の觀るべきもの、割合に少なき所以なり。

## 第一節　宣命の文

右に云へる已むを得ざる場合の第一は、宣命即ち是れなり。宣命とは、國語にて綴れる國風の詔詞を云ふ。是れ藤原、奈良の朝廷に用ひられたるものにして、續日本紀中に載する處の者なり。續紀は、所謂、起居注、簿錄の類にして、即位、行幸、任官等朝廷の行事を、同じさまに書き連ねたるのことなれば、少しも變化活動の妙なきが中に、宣命の文の散見するは、頗る奇

ば、少しも歌の歌たる興味なければなり。是を以て、歌へ如何なる煩冗をも厭はず、國語のまゝに、之を書すべき必要ありたれば、さてこそ、彌よ早く發達したるなれ。然るに、世上の事變狀況などを記すには、漢文を以て足れりとせしが故に、朝廷の記錄、制令の類は、悉く漢文のみを用ひき。加之、當時朝廷までは、專ら漢學を獎勵せられしかば、上流の人種は、漢文には漸く習熟したるべけれども、漢字を以て國語を寫すことは、依然として困難なりき。されば、太安广呂の如く、絕佳なる漢文を綴りし人と雖、他の一方に於ては、甚だ苦しみたりしことは、前に掲げし古事記の序文にいふところを見ても知るべきなり。加ふるに、漢文を用ふること、啻に學者にとりて容易なりしのみならず、當時は、漢文こそ、却りて縉紳の一技能の如

を受け給はりて、之を宣り聞かせる所作をのみ示したるものにして、詔勅の文を指して、しか云ひしに非らざるべし。然るに、後世には、直ちに詔勅の文をさして、宣命と稱することとなりぬ。

總て、上代の詔勅は、漢字を以て記されし限りは、皆この宣命といふものゝ、書体なりしなるべきか。古事記にも、日本書紀にも、之を記さゞれば、持統天皇よりあなたの時代の者は、一として傳はらず。書紀に多く載せたる詔勅は、神武天皇東征の意を示し給ふものを始として、皆、華麗なる漢文を以て、綴りたれども、此は修史家が、随意に飜譯したるものなることは、世に既に定論あり。且つ、かく純粋なる漢文と改めしにより、意義も文詞も、まことの上代のとは、異れる者多きこと、亦明ら

觀なり。かゝる體例は、漢土の歴史にも其類なく、唯、元史に、蒙古の詔勅を飜譯せる處、稍、之に似たりと云ふべきのみ既に前にもいひし如く、朝廷にては、切りに漢學を奬勵し、百般の事、唐風を摸し給ひしほどに、遂には、詔勅をも漢文を以て、下し給ふことゝなれり。かく、漢文にて書せる者を、詔書、勅書と稱し、國語を以て書せるをば、特に宣命といひならひき。然れども、こは後の世の事にて、續日本紀の頃は、尙さにはあらず。凡て、天皇の大御言を記せる、國風の文をも、共に詔といひ、勅と云ひしが如し。宣命こいふ名稱は、續日本紀の、第十の卷に始めて見ゆ。宣とは、王命を受け傳へて、普く衆民に告け聞かするの意にして、宣命とは、即ち王命を傳宣すといふ義なり。されは、續紀に見えたる宣命といふも、始めは、朝臣の勅命

乏人惠賜比、孝義有人其事免賜比、力田治賜　、罪人赦賜夫などあるは、當時日常に使用したる、漢語梵語を交へたるものなるべし、また孝謙天皇の宣命には、

然母、盧舍那如來、最勝王經、觀世音菩薩、護法善神、梵王帝釋、四大天王乃、不可思議威神力云々、

又、最勝王經乃、王法正論品爾、命久、若造善惡業於現在中、云々

の如く、梵語の多く挿入せられたるを見るなり。

上代詔勅の起草を掌りし者は詳かならざれども、續日本紀に載れる所謂宣命の文は、中務省大内記の作りたるものなるとは、職員令の文を見ても知らるゝなり。然るに漢學、益、開けて、文章博士の置かるゝに及びては、宣命を作ることも、亦、此

かなり。實際、朝廷にて、漢文の詔勅を用ひ給ひしは、蓋し推古天皇よりこのかたなるべし。是より後と雖、國風のを用ひ給ひしも、無きにはあらざるべし。然れども、それらは皆、漢文を以て書き改められたるなるべければ、孰れが、もとよりの漢文にして、孰れが後に書き改められしものか、辨知し難し。宣命の文は、もと國語を以て、國風を寫されたるものなれども、漢學と佛法との、熾んに行はれたる御代に成りし者は、漢語を交へ用ふること多く、或は梵語をさへ挿入して、其姿の國風ならぬのみかは、其意義さへ、甚だ國體を失ひ、後世の指彈を免れざるもの多し。是れ蓋し、時世の影響に外ならずとす。

今其一例を左に示さん。聖武天皇の宣命に、

**盧舍那佛能大前仁奉賜部止奏久、又高年人等治賜比、困**

ることゝ、亦、祝詞と同じ、蓋し祝詞の神前ゐ告白する詞なると等しく、宣命は、庶民に宣り聞かする詞ゐして、共に對者をして、感動せしむることを目的とすればなり、其用字の方法は、萬葉集の歌の如くにゝ、漢字にて國語をうつしたるものなれども、たゞ宣命文は、主として漢字の正訓を用ひ、助辭の假字は、所謂、宣命書きとて、多久故爾の如く、小字にて、割註の如くに挿みたり。これ、其讀みやすからん事を欲してなるべし。總て、宣命を傳宣する時は、聲音高朗なる者之を讀み、抑揚頓挫の妙を極めき、宣命讀、即、是れなり。其毎段落の終りに、諸聞こし召さへと宣ると、讀むときは、太子親王先つ唯と答へ、次に諸人同聲に唯と答へしといふ

今、余輩は、宣命文の例として、左の二詔を擧く。之を讀むに當

博士の任となりしこと、職原抄なごにて明かなり。されば、其文体は古のまゝなれども、漢語を交ふること多く、漢文の句調を帶ぶるに至りしは、自然の勢と云ふべきのみ。原來、宣命は、朝廷の百官、天下の公民に宣り聞かすべきものなれば、解し易きを主とし、通俗の國語を用ふれども、亦、種々の修飾を施し、音調の佳なるを欲したれば、まゝ婉麗なる處あり。然れども、概して雄壯質實にして、聽者をして感動せしむるに足る。若しそれ、之をしも漢文を以て綴りたらんには、天下の衆民、安ぞ其意をさとることを得んや。されば、漢學の盛なる、彼れの如き朝廷すも、これのみは、國語まて國風を寫されたるものなるべし。其文体は、祝詞の少しく變じたる如きものにて、通常の散文とは、其さま尙、大ゝ異なり。其韻文の容貌を帶びた

下の業を、日並知皇太子の嫡子、今天下しろしめしつる天皇ま授け玉ひて、並び居まして、此天下を治め玉ひ、諧へ玉ひき。是は、かけまくも畏こき、近江の大津の宮ま、天の下しろしめしゝ、大倭根子天皇の、天地と與に長く、日月とゝもま遠く、變はるまじき常典と立て玉ひ、布き玉へる法を、受けたまはりまして、行ひ玉ふ事と、諸承はりて、畏ミ仕へまつりつらくと、のり玉ふ大命を、諸聞こしめさへと宣る。かく、仕へ奉り侍るに、去年の十一月に、畏きかも、我が王朕子天皇の詔り玉ひつらく、朕御身勞らしく、坐すか故に、暇えて、御病ひ治め玉はんとす。此天つ日嗣の位は、大命にませおほましまして、治め玉ふ可しと、譲り玉ふ大命を、受けたまはりまして、答へ申しつらく、朕は堪へじと、辭び申し、受

りては、啻に其文詞に驚くのミならず、當時は上下、相、輯睦して、君臣隔意なかりしの狀、自から言外に溢るゝを見る。此外、宣命の文にては、天武、孝謙、兩帝の即位の時の詔詞も、甚だ賞揚せられ、特に寶龜二年、藤原永手の薨去に際し、光仁天皇の下し給ひし弔詔の如きは、最も名文なりと稱せらる。

慶雲四年、秋七月壬子、元明天皇即位し給ふ。乃ち詔して曰く、

現神と、大八洲くま知ろしめす、倭根子天皇が、大命らまとのり玉ふ大命を、親王等、諸王、諸臣、百官人等、天下の公民、もろ〳〵聞こしめさへと宣る。挂けまくも畏き藤原の宮に、天下知ろしめしゝ、倭根子天皇、丁酉の八月に、此の食國天

玉ひ、慈み玉ふ事は、事だつに非ず、人祖の、おのが弱兒をやしなひ治たる事の如く、治めたまひ、慈み玉ひくる業となも、神ながら念しめす、是をもて、まづまづ天下の公民の上を、慈み玉はくと、詔り玉ふ天皇が大命を、諸聞こしめさへと宣る。

天平元年八月戊辰、正三位藤原夫人を立てゝ、皇后となし給ふ。壬午、五位、及、諸司の長官を、内裏に喚び入れて、詔して曰く、

天皇が大命らまと、親王等、又汝王臣たちに語らひ玉へと、勅たまはく、皇朕高御座に坐し初めしより、今年に至るまで六年に成りぬ。この間に、天位に嗣ぎます可き次として、

けまさずある間に、たびまねく日重ねて、讓り玉へば、いとほしミ畏み、今年六月、十五日に、大命は受け玉ふと申しながら、此の重位に、繼ぎます事をなも、天地の心を勞しみ、重み、畏みまさくとのり玉ふ大命を、諸聞こしめさへと宣る。故是をもて、親王たちを始めて、王、臣、百官人等の、淨き明き心もちて、彌や務めに、彌や結まりに、あなゝひ奉り、輔け奉らん事に依りてし、此の食國天下の政は、平けく長くあらんとなも、おもほしめす、又、天地のむた、長く遠く、變はるまじき常典と、立て玉へる食國の法も、傾く事なく、動く事なく、渡りゆかんとなも、おもほしめさくと、のり玉ふ大命を、諸聞こしめさへと宣る。遠皇祖の御代を始めて、天皇が御世御世、天つ日嗣と高御座ましまして、此の食國天下を撫で

玉ふ大命を、聞こしめさへと宣る。かく詔り玉ふは、掛けまくも畏こき此宮にまして、現神と大八洲國知ろしめし、倭根子天皇、我が王祖母天皇の、始めこの皇后を、朕に賜へる口に勅り玉ひつらく、女といはゞ等しきや、我がかくいふ其の父と侍る、大臣の皇が朝を助ひ奉り、輔け奉りて、いたゞき恐こみ、供へ奉りつゝ、夜半、曉と休まふ事なく、淨き明き心を持ちて、はゝとひ供へ奉るを、見し玉へば、其の人のうむがしき事、いそしき事を、遂ま得忘れじ我が兒我が王、過なく罪なくあらば、捨てますな、忘れますなと、仰せ玉ひ、宣り玉ひし大命によりて、かにかくに、年の六とせを試こたまひ、使ひ玉ひて、此皇后の位を授け玉ふ。然るも、朕時のとにはあらず、難波の高津の宮に、天下知ろしめしゝ、大鷦

皇太子侍りつ、是れによりて、其の母といます藤原夫人を、皇后と定め玉ふ。かく定め玉ふは、皇朕御身も、年月積りぬ、天下の君として、年の緒長く皇后いまさゞる事も、一つの善からぬ行まあり。又天下の政ま於きて、獨り知る可きものならず。必ずも後の政あるべし。こは事だつに非ず。天に日月あること、地ま山川ある如、並びまして有る可しといふ事ハ汝等、王臣たち、明けく見知れる事なり。然るに、此位を遲く定めつらくは、とひとまにも、已があげ授くる人をば、一日二日と擇び、十日はつかと試ミ定むとし云はゞ、こきだしき多き天下の事をや、容易く行はんと、おもほしましてゝ此六とせの中を、擇び玉ひ、試ミ玉ひて、今日今時日のあたり、諸を召し玉ひて、細しき事の狀、語らひ玉ふと、詔り

天皇の御代には、史官を諸國に置きて、四方の言事を記さしめ給ひ、また推古天皇の朝には、聖徳太子、蘇我馬子と議りて、天皇紀、國記、臣、連、伴造、國造、百八十部、并に公民本紀を錄せられたりと雖、蘇我氏の亡びたるとき、大方は燒けうせたれば今日に傳らず、古事記より以前の記錄と稱せられて、今日に傳はるものは、上宮記（今亡びて釋日本紀より引用せる文あるのみ）聖徳法王帝說等にして、其書体如何にも古しと雖、其何の世に作られたるものなるか、詳かに知りがたし、高橋氏文と云ふものも亦然り。されば歷代の事跡を總叙したる書は、古事記を以て、最も古しといふべきなり。是より先き、天武天皇、古傳の或は亡佚し、或は漸く眞に違ざかるを憂ひ給ひ、稗田阿禮が、博聞强記にして、上世の事に詳はしきを聞こし召し、古來の傳說を誦み

鷯天皇、葛城の襲津彥の女、石姬命皇后と、御相坐して、食國天下の政を治め玉ひ、行ひたまひけり。今めづらかに新しき政にはあらず。本より行ひ來し跡事ぞと、詔り玉ふ大命を、聞こし召さへと宣る。

## 第二節　古事記の文

古事記三卷は、元明天皇の和銅五年に、太安麻呂が、勅命を受け、我國の開闢より、推古天皇の御代まで、歷世の事蹟を記したるものなり。抑、我國上古の傳說を書きたるは、この書を以て最も古しとし、日本書紀、之に次ぐ。前にも云ひし如く、記錄の業は、早くより行はれたれば、既に紀元千零六十四年、履中

成りしより八年を經て、新にかの書紀を、修撰せしめられたるものなりと、

其文体は、實に一種特別なり。漢字を用ひて記したるものなれども、日本書紀の如く、純粹なる漢文にもあらず。又、祝詞、宣命の如く、漢字を以て國語をうつしたるにもあらず。概して云へば、拙劣なる漢文の如くなれども、其間、神の言語歌謡等は勿論、其外にも、處々に字音を以て、國語をうつしたる處多し。夫れ太安广呂が、漢文に巧みなりしことは、古事記の序文を見ても知らるべきに、如何なれば、かく蕪雜なる書体によりて、此貴重なる歴史を記しゝか、是れ蓋し、安广呂が、古來の傳説をば、成るべく故老の語り傳へたるまゝに、筆記せんと企てたればなるべし。其自序中に、訓にのみよれば意を失ひ

習はしめ給ひき。元明天皇の朝に至り、太安广呂、詔を受けて、阿禮をして口誦せしめ、之を筆記せしもの、即ち此古事記なり。されば、其体裁は、日本書紀と甚だ異なれり。書紀は、之を唐土の人に誇示すべき必要もありしかば、華麗なる漢文を用ひ、務めて潤飾を加ふ。故に、史漢、文選などの成語を、其儘に取り、斧鉞牛酒など、我國の上古にはなき者まで、漢樣ま書きたるか如く、文の爲めに意を害したる處少しとせず。然れども、古事記は然らず、眞實に古傳説を記録して、少しも修飾辨護せざ、故に上古の風を觀、古語を知り、古文を察するには、此書の外あるべからず。是を以て、學者、全一事實ましして疑ふべきをあれば、多く書紀を棄てゝ古事記に從ふといふ。然れども、或は云ふ、當時は之を以て滿足し給はざりしかば、古事記の

文の摸範として見るべきものとす。其歌謡は上古文學に屬すべきものとして、既に前篇に掲げたり。

八百萬神、天祖を天の石屋より出し奉る。

こゝに、天照大御神、見畏みて、天の石屋戸をたてゝ、さし籠りましゝき。乃ち、高天原皆暗く、葦原の中國悉に闇し。これによりて、常夜往く、こゝに萬の神の聲は、さばへなす、滿わき。萬の妖悉に發りき。是を以て、八百萬神、天安之河原に、神集つどひて、高御産巣日神の子、思金神に、思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天安河の河上の天堅石を取り、天の金山の鐵をとりて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科せて、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺

易く、音のみよれば煩冗を免かれず。是を以て、今或は一句の中に、音訓を交へ用ひ、或は一事の內、全く訓を以て錄す。辭の見難きものは即ち註を以て意を明かすと云へるを見ても、其苦心して、國語のまゝを寫さんとせしこと明らかなり。されば、蕪雜拙劣なる漢文の中に、處々ま朴實璞のごとき文章の、萬丈の光燄を韜むを見る。特に其中卷は、下卷よりも美はしく、上卷は中卷よりも、更に見るべし。是れ其上卷は即ち神代の紀事にして、諸神の言語を直寫したる處多く、中卷以下は、事實を記錄せる漢文の方、居多なればなり。

今、古事記の文例として、次の三節を揭ぐ、此外、天安河御誓の段に、天照大神の御裝を寫せる文、素盞之男命の荒び給ふの段、大國主命、國讓の段、櫛八玉神の天の御饗獻つる文等、皆古

高天原ゆすりて、八百萬神共に咲ひき。こゝに、天照大御神、怪しとおもほして、天の石屋戸を細めに開きて、内より告り玉へるは、吾籠りますによりて、天の原自ら闇く、亦葦原の中國も皆闇けんとおもふを、などて、天宇受賣は、樂びし、亦、八百萬神もろ〱咲ふぞと、のり玉ひき。乃ち天宇受賣、汝命にまさりて、貴き神坐すが故に、歡喜ぎあそぶと白しき。かくまをす間に、天兒屋命、布刀玉命、其の鏡を指し出でて、天照大御神にみせ奉る時に、天照大御神、いよゝあやしと思ほして、稍戸より出でゝ、のぞみます時に、かの隱り立てる、天手力男神、其の御手を取りて、引き出し奉りき。即ち布刀玉命、尻くめ繩を、其の御後方にひきわたして、こゝよりうちに、なかへり入りましそと白しき。故天照大御神出

の勾璁の五百つのみすまるの珠を作らしめて、天兒屋命、布刀玉命を召びて、天香山のまを鹿の肩をうつ拔きにぬきて、天香山の、天の波々迦を取りて、占へまかなはしめて、天香山の、五百つ、まさか木を、根こじにこじて、上つ枝に、やさかの勾玉の、五百つの、みすまるの玉を取りつけ、中つ枝に八尺鏡を取り繋け、下づ枝に、白にぎて青にぎてを取り垂で、此の種々の物は、布刀玉命、ふと御幣と取り持たして、天兒屋命、ふと祝詞ごと、禱き白して、天手力男神、戸の掖に隱り立たして、天宇受賣命、天香山の天のひかげをたすきに繋けて、天のまさきを鬘として、天香山の小竹葉を、手草に結ひて、天の岩屋戸にうけ伏せて、蹈みとゞろこし、神がゝりして、胸乳をかき出で、裳緒を陰におしたれき。かれ

こに高志の八俣遠呂智なも、年毎に來て喫なる。今其れ來ぬべき時なるが故に泣くと申す。其の形は、いかさまにかと問ひ玉へば、彼が目は赤加賀智如して、身一つに、頭八つ尾八つあり、亦其の身に蘿、及、檜、榲生ひ、其の長さ、谿八谷、峽八尾にわたりて、その腹を見れば、悉にいつも血爛れたりと申す。爾、速須佐之男命、其の老夫に、是汝の女ならば、吾に奉らんやと詔り玉ふに、恐けれど、御名ぞ覺らだとまをせば、吾は天照大御神のいろせなり、故今天より降りましつと答へ玉ひき。こゝに足名椎、手名椎の神、しかまさば恐し、立て奉らむとまをしき。爾、速須佐之男命、乃ち其の童女をゆつゝま櫛に取りなして、御みづからにさして、其の足名椎、手名椎の神にのり玉はく、汝等、八鹽折の酒を醸み、また

でませる時に、高天原も、葦原の中國も、おのづから照りあかりき。

須佐之男命、大蛇を斬りて、寶劍を獲給ふ。

速須佐之男命、避追えて、出雲國の、肥の河上なる鳥髪の地に降りましき、此時、箸、其の河より流れ下りき、こゝに須佐之男命、其の河上に人ありけりとおもほして、尋覓のぼり、いでましゝかば、老夫と老女と二人ありて、童女を中に置きて泣くなり。汝等は、誰ぞと問ひ玉へば、其の老夫、僕は國つ神、大山津見神の子なり。僕が名は、足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣とまをすと申き、亦汝の哭く由は、いかにと問ひ玉へば、我が女は、もとより八稚女ありき。こ

## 天孫降臨

こゝに、天津日子番能邇々藝命、天の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋にうきじまりそり立して、筑紫の、日向の高千穗の久士布流嶽に、天降りましき。故、こゝに、天忍日命、天津久米命、二人、天の石靫を取り負ひ、頭椎の大刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の眞鹿兒矢を手挾みて、仕へ奉りき。故、其の忍日命、（此は大伴連等が祖）天津久米命、（此は久米直等が祖なり）こゝに向韓國を笠沙の御前にまぎ通りて、此地は朝日の直刺國、夕日の日照國なり。故此地ぞ甚吉き地と詔り玉ひて、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽たかしりて坐しき。

垣を作廻し、其垣に八つの門を作り、門毎に八つのさづきを結ひ、其のさづき毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて、待てよと、のり玉ひき。故、告り玉へるまゝにして、かく設け備へて待つときに、かの八俣遠呂知、まことにいひしが如來つ、乃ち船毎におのが頭を垂入れて、其の酒を飲みき。こゝに飲み醉ひて留伏し寢たりき。爾ち速須佐之男命、其の御佩せる十拳劍を拔きて、其の蛇を切りはふり玉ひしかば、肥の河血に變りて流れき。故其中尾を切り玉ふ時に、御刀の刄毀けき、怪しとおもほして、御刀の前もちて刺しさきて見そなはしゝかば、都牟刈の大刀あり。故、此の大刀を取らして、異しき物ぞと思はして、天照大御神に白し上げ玉ひき。こは草那藝の大刀なり。

處は少し。しかのみならず。上に云へる制令に基き、乾燥なる事實を列記したるものなれば、文詞の修飾なく、國文學上の價値は、殆と之れ無し。されども、出雲風土記中、國引の文のみは、自餘の處のとハ、其体大に異なりて、詞をかざり、あやなせる樣の、祝詞、宣命の文にも比ぶべきは、蓋し古來の傳說を、其まゝ記したる故なるべし。今、其節略を左に揭く。

## 國引き

意宇と名づくる所以は、國引きませる八束水臣津野命の詔り玉はく、八雲たつ出雲の國は、狹布の稚國なるかも。はつ國小さく作らせり。故作り縫はんと詔り玉ひて、栲衾新羅のみさきを、國のあまりありやと見れば、國の餘り有り

## 第三節　風土記の文

風土記は、不完全なる地誌の類なり。始め、元明天皇の和銅六年五月に、畿內七道の國々に令し、郡鄕の名は務めて佳字を擇び、又其郡內より生出する處の、銀、銅、彩色草木、禽獸、魚蟲等のもの、具さに其色目を錄し、及び土地の肥瘠、山川原野の名號の由る處、又古老の相傳ふる舊聞異事、凡て史籍に載せて、言上せよとの制を下し玉ひしことあり。之に基き、この朝ふ諸國より上りしもの、卽ち此風土記なれども、多くは散佚して、今日まで傳はる者は、たゞ常陸風土記のみなりといふ。此後、聖武天皇の朝に上れるものに、出雲、播广。肥前、豊後等の風土記ありて、今、尙、現存せり。

風土記は、皆、漢文を以て書せるものにして、國語を寫したる

## 第四章　奈良朝の和歌　萬葉集

奈良の朝は、和歌の時代なり。上は萬乘の貴きより、下、匹夫ょ至るまで、皆、歌を詠まざるなし、而して其精粹は、萬葉集に載れるもの即是なり。夫れ古事記、日本書紀の撰定は、我國史の嚆矢にして、萬葉集ハ國文の翹楚なれバ、奈良の朝をこそ、まここに我國學の曉とハ云ふべきなれ。

萬葉集は、實に我國の詩經なり。其名は、萬の言の葉ごいふ義なりごもいひ、或は、萬代といふ意ありとも云ふ。蓋し孰れにても可あり。其編者に就きても、古來諸說紛々ごして一定せぞ。然れごも、孝謙天皇の朝ょ、左大臣橘諸兄之を撰びしが、中途にして薨ぜしかば、後に大伴家持、更に之を增補訂正して完成せるものなりごいふ。是普通の說なり。其體裁より觀察

と詔り玉ひて、童女の胸すき取らして、大魚のきだつき別けて、旗すすきほふり別けて、三つよりの綱打ちかけて、霜つゞらくるや〳〵に、河船のもそろ〳〵に、國來、國來と、引き來縫へる國は、こづの打ちたへよりして、やほに杵築の岬なり。此くて、堅め立てしかしは石見の國と、出雲の國との界なる名はさひめ山是なり。又持ち引ける綱は、その、長濱是れなり（中畧）今は、國引き訖へぬと詔り玉ひて、意宇の森に、御杖つき立てゝ、おゑと詔り王ひき。故意宇と云ふ。云々

あり、借訓あり。例へバ花をハナ、月をツキ、明日をアスと讀むは正訓なり。春草をツカクサ、金山をアキヤマといふは義訓なり。荒磯をアリソとよみ、淡海をアフミと云ひ、不開有之をサカザリシとよむは約訓なり。住を誰加住舞無の句に於けるが如く、スとよみ、綱をアとよむの類は略訓なり。青丹吉をアヲニヨシとよみ、悪氷木。蘆檜木。足日木等と書して、いづれもアシビキとよみ、以て足引をあらはす類は、借訓なり。又別に、萬葉假名の用法の、甚だ活潑なりしを知るに足るべき、戯訓とも稱すべきもののあり。即ち八十一をク、十六を猪鹿、二二をシ、山上復有山を出と解し、或は馬聲の二字を以て、イ音を示し、蜂音の二字を以て、ブの響きをあらはすが如き是なり。字音にも亦正音と略音との別あり。阿伊宇衣をアイウエ

するに、決して勅撰の者にあらず。また徹頭徹尾、一人にて撰定したるものにあらざるは明かなりとす。此書、雄略天皇の朝より、淳仁天皇に至るまで、上下通じて凡そ三百年間の和歌を蒐錄したるものなり。然れども、雄略天皇より、舒明天皇に至るまで、殆んど百六十年の間には、開卷第一に、雄略天皇御製の歌、唯、一首あるのみなれば、舒明天皇の朝より、淳仁天皇の御代まで、凡百三十餘年間の和歌の集なりと云ふこそ、其正を得たるものなれ。

前にも云ひしが如く、此集の歌は、悉く漢字を以て國語をうつし、之を萬葉假名と稱したるものなるが、其漢字の用法は齊一ならず。或は漢字の義訓を用ひ、或は單に其音韻に賴り、或ハ之を混合す。而して訓の中にも。正訓あり、略訓あり、約訓

萬葉集の歌は、皆いまだ俊嚴なる規則に、拘束せられざる時代になりしかば、其風姿の自然なるは論なし。少しも顧慮する處なく、其襟懷を開き、素情をのべたるものなれば、概して雄健にして氣魄あり而して、此集これが類を分つに、後世の如く、四季、戀、雜等の區別を以てせず。雜歌、相聞、挽歌、譬喩及び四季の五種とせり其相聞とは、後の所謂戀歌にして、男女贈答の歌其多きに居るされども、稀には君臣、父子、兄弟、朋友等の間の、相思の情を述べたるものあり。挽歌は、後の哀傷の歌にして、人の死を傷み悲みて詠めるものにして、譬喩とは、物に寄せ事に譬へて、感情をあらはせるものあり。以上は、歌の性質より基きたる分類なるが、今、又、全集四千五百十五首の歌を、其形狀によりて區別するときは、短歌四千百八十六首、長

とし、加可、奇技、久九、氣家をカキクケと讀ましむる類は、正音にして、安印雲延をアイウエとし、汗吉君計をカキクケとするが如きは略音なり。

さて、古事記、日本書紀中の歌謳は、主として字音のみを用ひたるが故に、佶屈難解の文字甚だ多し。且つ其字音をとるにも漢音、呉音ともに相用ひたるによりて、益其讀みがたきに苦しむ。然るに、萬葉集の歌は、右に云へる漢字の用法に從ひ、音訓交へ用ふるのみならず、自由に記号的の文字を聯結するが故に、記紀中の歌よりは、大に讀み易きを覺え、前後漢字を使用するの功拙、甚だ懸隔あるを知る。然れども、尚是れ兩假名發明以前の書法なるにより、其解し易しといふも、蓋し紀記中のものに比較しての語なる事、また言を待たざるなり。」

ものなり。萬葉の歌、數千首、皆、上の三種ま分屬すべきものなりといへども、就中、萬葉の萬葉たる處ハ、實に其長歌にありとなす。その短歌もまた絶妙のもの多しと雖、古今集以後之と比肩すべきもの無しとはいふべからず。或一方より觀察すれば、却て之に駕するもののなきに非ざるべし。但し、長歌に至りては、萬葉以後絶えて之れなしと云ふも過言にあらず。稀れにあるものも、多くは古調を失ひしものにして、淺陋見るに足らず。決して萬葉に在るものと、仝日に論じ得べきものにあらず。

歌語は、當時普通の言語の都雅なるを用ひしものならん。されども、東歌ならざるものゝ中にも、或ハ用語の卑俗なるが如く、滑稽なるが如く覺ゆるも少からず。啻ま用語のみなら

歌二百六十六首と、施頭歌六十三首とを。抑、短歌とは、五七五七七の五句を以て成り、三十一文字を以て限りとする韻文なり。音の便宜によりて、或は一字、或は二字、或は三字までも制限を踰えて用ひ、之を字餘りと稱するは、古今集以後まも多しと雖、三十一文字より少き事あるは、唯萬葉集の歌まあるのみ。長歌は、五言七言の數句を聯接して、其一篇の長短を問はざるものなり。多く枕詞を冠し、對句を設け、以て修飾を加へ、又以て語調をよくするの具とせり。長歌は、また之に副ひさる反歌なるもあり。反歌は、通常短歌れ、本歌なる長歌れ後ま副ふものにして、多くは、長歌の意を約言するの用ま供し、或はその意の足らざるを補ふに用ひらる。施頭歌とは、短歌の頭尾何れの處をも問はず、別に七言の一句を加へたる

研究が時代によりて、榮枯盛衰ありしことは、漸を追ふて論ぞべし。

今萬葉集の歌を論ずるに當り、和歌の變遷を考ふるに、雄略天皇の頃よ里以前は更なり。佛法東漸の後といへども、舒明天皇の頃までは、未だ大に佛法漢學の影響を受けたりとも見えぞ。姿も意も尚上古のまゝにもして、要するに、太古より、千數百年の星霜を經過する間れ、たゞ時勢の發達進歩に隨ひて、和歌も自づから發達したりしのみ。舒明天皇の頃よりは、稍見るべき進歩を、和歌の面に表はしたれども、尚持統天皇の頃までは、さまで顯著なる形跡を認め得ず。此帝の朝に至り、始めて夫の柿本人麻呂、山部赤人等の出づるに當り、一躍して極盛の域に入りたるものといふべし。されば、舒明天皇

ず、萬葉の歌は、何につけても實に千狀萬態、變化を極めたるものなり。蓋し萬葉の歌は、皆山林原野の樹木の如し。少しも他の牽制を蒙らず。或は矗然亭立し、或は蟠桓屈曲し、逸氣奔放、自由自在に生長せり。故に槖駝師より剪裁せらるゝ、かの庭園の樹木を喜び、後世の纖巧なる歌風に慣れたる者の眼孔には、或は荊棘多くして入りがたしと見え、規律なき和歌の猥然錯雜せるものなりと見ゆるならん。然れども、是を、猶、陋屋內に跼蹐せる者の、別に天地の大なるあるを思念する能はざると、全日の談なるのみ。但し棟梁の材たるべきもの多き間には、まゝ薪炭の用にも堪えざるものゝ、少からず見ゆるは、爭ふべからざる事にして、決して或る萬葉崇拜者の言の如く、曲庇する能はざる處あるは事實なりとす。尙此書の

ひといはん。藤原の宮となりては、大海の原ま、氣色ある島どもの浮べらん樣して、面白き勢ぞ出來たる。これぞ二度のうつろひなりける。奈良の宮の初めには、此勢を學び移しヽまゝに、己がものともなく、うら狹くなりぬ。これぞ三度のうつろひなりける。其宮の中つ頃には、ゆかしき隈もなき海山を、風早き門に見んかごと、荒れびたる姿となりぬ。これぞ四度のうつろひなりける、それより後の歌は、此集(萬葉)には載らず。古今集に讀人知らずとふ中の古き調なるぞ、此宮の末より、今の都の初の歌ありける、たは彼の荒びたりしが、表裏になりて、淸らなる庭に、山吹の咲き撓めらん風して、ひたぶるま、妹に似たる姿となりにたり。これぞ五度の、終りの變なりけると、余輩は附言す。茲に荒ぶるといへる語は、穩當ならず余

以前の歌をみるに、概ね皆、事にふれ折に臨み、見るもの聞くものにつけて、悲喜戀愛の至情を洩らしたるものなれば、云はゞ自然に成りたる歌にして、特に思を運らし心を勞して、詠みたるにはあらざるなり。故に、其意平坦にして巧みなる思想なく、姿勢文詞共に率直にして華やかならず。然るに、舒明天皇の頃より後ないたりては、事にふれ折に臨みて、直ちに至情を述ぶるのみならず、未だ經驗せざる事物に就きても、種々驚くべき想像を逞しうして、高妙なる歌を詠み出だせり。是に於て、譬喩と稱する一部類をも成すに至りき。尚此頃の歌風の有樣を詳かにせんがために、加茂眞淵の語を引用すべし。眞淵曰く「高市岡本の宮(舒明天皇)の頃より云はゞ、三冬つき春去り來て、雪氷の解け行くが如し。これは初のうつろ

せるゝ、其大に佛法と漢學との、影響を蒙りたることゝす。此は既に前篇の終と、本篇のはじめとに於て論じたる如く、歴世務めて此兩道を奬勵し給ひ、遣唐使の派遣せられ、學生僧侶の留學するもの甚だ多くして、唐土の文學ゝ、佛法と共に上下に普及せしかば、人情風俗自づから一變し、僧徒或は漢學者の、歌を詠むもの多く出でしにより、佛教漢學の影響は、自づから和歌の上にもあらはるゝにいたりしなり。今其著るしき例を擧くれば、博通法師は、紀伊國三穗の岩屋を見て、

常盤なる石屋ゝ今ゝありけれど

住ミける人ぞ常なかりける

と詠み、沙彌滿誓は、

世の中は何にたとへん朝開らき

輩を以て見れば、これ氣骨の充溢せるものなりといはん。額田女王が、春花秋葉の優劣を判するに、歌を以てせしを始めとして、柿本人麻呂の歌集などに載れりといふ歌には、詠天、詠雲、詠雨、詠山、詠河、詠花、詠葉といふの類、又寄衣、寄玉、寄木、寄花、寄川、寄海、などの類の歌甚ど多し。是れ即ち譬喩の歌にして、文物の開くると共に、人の想像進歩して、歌の性質も亦一變せしことをあらはすものなり。上代は實用に供する爲めのみに詠みたる歌多かりしが、奈良の朝より後には、此外にまた慰みの爲めに歌を詠み、以て詞花言葉を弄ぶに至れり。されど遙かに後の世の如く、題詠のみを主として、强ひて歌を製造する如き事は、絶えて無かりき。

さて此時代の和歌が、上代の者と、最も著しき差別をあらは

酒の名をひじりとおほせし古への
おほきひじりの言のよろしき
古への七のかしこき人どもゝ
欲りするものは酒にしあるらし
夜ひかる玉といふとも、酒のみて
こゝろをやるに豈しかめやも
とあり。又或る人の歌に、
心をし無何有のさとにおきたらば
藐姑射の山をみまくちかけん
とあるが如き是なり。
萬葉集に歌を載せられしもの、極めて夥しく、上天皇皇子より、公卿官人は勿論、下りて樵夫海士に至るまで、一風ありて

漕ぎいにし舟の跡なきがごと

といひ、僧侶ならざる人も、大伴旅人は、

世の中はむなしきものとしる時し

いよ〳〵ますく悲しかりけり

といひ、大伴家持は、

うつ蟬の世は常なしと知るものを

秋風さむミしぬびつるかな

と詠みき。大伴氏の如き軍旅を職とする人にして、尚かゝる歌あり。

右は孰れも佛教の影響を蒙り、無常寂滅、輪回應報の說を以て動かされたるものなり。又漢學の風氣を帶びたるものは、大伴旅人が、酒をめでゝ詠みし歌に、

柿本人麻呂、山部赤人は、共に歌聖と稱せられ、歌仙と云はるる人なれども、其履歴の知られざる事猶泰西の詩祖と尊崇せらるゝホーマーに於けるが如く、其人物事業を詳かにする能はざるは、遺憾の極なりといふべし。記錄に就いて知らるゝは、唯人麻呂が持統文武の兩朝に仕へしことゝ、赤人はこれより稍下りて、聖武の朝に奉仕せし事とのみ。其他は唯其詠歌によりて、推測を下すに過ぎず。人麻呂は新田部、高市の諸王子に伴ひ、又聖駕に紀伊、伊勢、大和の間に陪し、また近畿及び筑紫の諸國に遊びしが、晩に石見ゝ居り、此國にて沒しぬ。其墓は大和の添上郡に在りと云ふ。赤人もまた鳳駕に隨從して、近畿の諸名勝を探り、或は遠く伊豫の靈泉に浴し、富岳千秋の雪を眺め、到る處に其吟詠を遺せり。歌枕のこと

見るべき歌を詠みし者は、皆之を採錄せられたり。特にかの防人の歌、役民の歌、東歌などの作者を考へ合せば、其數擧げて數ふべからず。天皇にして載せられ給ひしは、雄略、舒明、孝德、天智、天武、持統、元明、元正の諸帝にして、皇子皇女また多し。然れども、其最も特筆大書せらるべきは、柿本人麻呂及び山部赤人の二人にして、山上憶良、笠金村、大伴の一族之に次ぎ、高市連黑人、高橋連虫麻呂、三方沙彌、久米禪師、長忌寸意吉麿、春日老、田邊史さちまろ等、また之に次ぐ。此他よみ人の知れざるもの甚多し。女流には、額田女王。大伯女王、譽謝女王石川郎女、大伴阪上郎女等最も傑出し、大伴の一族は甚だ多けれども、就中秀俊なるものを旅人、家持の兩卿とし、阪上郎女、東人、駿河麻呂等之ま亞ぐ。

にせり」と云へるが如き、人は之を名吟といへども、余輩は之を以て、想像の未だ大に進まざりし一證となすゝ躊躇せざ。然れども、其風姿文辭、共に眞率雄渾にして、韻致に富み、氣力は溢るゝ計りにして、しかも優婉なるは、まことに空前絕後なるべし。殊に其長歌の巧妙なる、上下二千餘年に亘れるわが文學史中、また之と比すべきものなし。

人麻呂と赤人との、文學上に於ける位地は、實にかくの如し。然らば、此二人の優劣は如何にといふに、早く古今集の序に之を評して、人麻呂は、赤人か上に立たん事かたく、赤人は、人麻呂が下に立たん事もまた難しと云ひしは、正鴻を得たりといふべし。然れども、人麻呂は特に長歌に巧みにして、赤人に上ること一等なれども、短歌に於ては、即ち之れに一歩を

はかゝる事より起れるなるべし。然れども二人ともに、其官位だも知りがたし。

人麻呂と赤人とは、實に我歌學界の曉星といふべし。其詠歌を以て察する處によれば、其感情の微妙、思想の温和、想像の富贍なること、能く人と自然(ネーチユアー)とを寫して、其美を發揮し、眞の詩人たるに適せしを示すに足る。但し仔細に之を觀察するに、其想像の作用は、稍其感情と思想とに劣れるを見る。夫れ奈良の朝は文華の時代なり。豈上古の人の如く、妄想を逞しうせんや。然れども尚其形跡なきにあらず。「天のうみ雲のなみ立ち月の船、星のはやしに漕きかくるみゆ」の如きは、即ち既に大に想像の範圍を脫出して、妄想に近づけるものなり。

人麻呂の「久方の天行く月をつなにさし、わが大君はきぬ笠

豐富にして、姿勢甚だ遒強なり。憶良は漢學に長じたりしと見え、其歌序の如き、華麗なる漢文多くして、見るべきもの少からず。此人天武天皇大寶の初めに、遣唐少錄となり、伯耆守を經て、聖武帝のとき筑前守に任ぜられき。其外の履歷は今傳はらず。大伴旅人は名族を以て著はれ、左將軍、中務卿、太宰帥をへて、大納言に進み、元明、元正、聖武の諸朝に仕へて、大に眷遇せられし人なり。文藻あり、酒を嗜みて、酒德を贊するの歌を作りき。家持は即ち其子なり。父子共に雄壯慷慨の歌に長じ、また悲愴悽慘の詠に巧みなり。人或は云へらく、家持の歌は平坦なるが故に、初學の徒の摸範とするに宜し。但其奇骨なく餘韻に乏しきは、是れ父に劣るところなりと、夫れ或は然らん。然れども、尙嚴然として一大家たるを恥ぢざるなり。

譲るべきを、古人も既に看破せる處にして、讀者其歌集を比較せば、明かに其然る所以を知るべし。加茂眞淵が人麻呂を評して「その長歌の勢は、雲風に乘りて御空行く龍の如く、詞は大海の原に、八百潮の湧くが如し。短歌の調べは、葛城の曾津彦、眞弓を引ならさむなせり。深き悲みをいふ時は、千早振るものをもなかしむべし」といひ、赤人を論じて「人麻呂とうらうへなり。長歌は心も調もたゞ清らを盡くせり。短歌こそこれもひとりの姿なれ巧をなさず。あるがまに〳〵云ひたるが、妙なる歌となりにしは、本の心の高きがいたりなり。譬へば、檳榔の車して大路を渡るぬしの、あからめもせぬが如し」といひしは、至當の言なるべし。

山上憶良は、文詞稍粗笨なれども、其思想と想像とは、極めて

玉手襷　畝傍の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ
あれましゝ　神のことく　すがの木の　彌繼き〳〵に
天の下　しろしめしゝを　空にみつ　大和を置きて
青によし　奈良やまを越え　いかさまに　念ほしめせか
天さかる　ひなにはあれど　石走の　近江の國の
さゝ浪乃　大津の宮に　天のした　しろしめしけん
天皇の　神のみことの　大宮は　此處ときけども
大殿は　こゝといへども　春草の　しげく生ひたる
霞立つ　春日のきれる　百しきの　大宮どころ
見れば悲しも

反歌

さゝ浪の滋賀のからさきさきくあれど

今次に萬葉の歌例を擧ぐるに先だち、特に云ふべき事あり。そは此集は、啻に文學上の至寶あるのみならず、また大に史學上の參考を資くるものにして、奈良の朝以前の人情風俗、歴然として其紙上にあらはるゝのみならず、まゝ又歴史の足らざるを補ひ、誤れるを正すべき事實を發見する事ある是れなり。凡て歴代の歌集、或は物語日記等の文は、一として歴史の參考とならざるはなしといへども、其文學以外にも、價値を有すること此集の如きもの少かるべし。余輩は此至寶を讀者に紹介するにつきては、充分の紙數を之に宛つるを憚らざるなり。

近江の荒都を過ぎし時の歌　　柿本人麿

露霜の　置てし來れば　此道の　八十隈ごとに
よろづたび　顧みすれば　彌遠に　里はさかりぬ
益たかに　山も越え來ぬ　夏草の　思ひしなえて
忍ぶらん　妹が門見ん　なびけ此山

反歌

石見のや高つの山の木の間より
　　わがふる袖を妹見つらんか
笹の葉はみやまもさやにさわげども
　　我れは妹思ふわかれ來ぬれば

高市皇子尊城上殯宮の時作りし歌、　仝　人

掛け卷くも忌ゝしきかも　いはまくも綾に畏しこき

おほミや人のふねまちかねつ
さゞなみのしかのおほわだよどむとも
むかしの人にまたも逢はめやも

石見の國より妻に別れ上り來りし時の歌

仝　　人

石見の海（み）　角（つぬ）の浦まを　うらなしと　人こそ見らめ
潟なしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなけども
よしゑやし　潟はなけども　いさなとり　海邊をさして
にきたつの　荒磯（ありそ）の上ふ　かあをなる　玉藻おきつも
朝はふる　風こそ寄らめ　夕はふる　浪こそ來よれ
浪のむた　かよりかくより　玉藻なす　宿ねし妹を

さゝげたる　幡のなびきは　冬籠り　春去り來れば
野毎に　つきてある火の　風のむた　なびける如く
取り持てる　ゆはずのさわぎ　み雪降る　冬の林よ
あらしかも　いまきわたると　おもふまで　聞きのかしこく
引放つ　箭の繁げけくて　大雪の　亂れて來たれ
まつろはず　立向ひしも　露霜の　消なばけぬべく
ゆく鳥の　あらそふはしに　渡會の　齋の宮ゆ
神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず
常闇に　覆ひ給ひて　定めてし　水穂の國を
神ながら　ふとしきまして　八隅知し　吾大王の
天の下　申し給へば　萬代に　然しもあらむと
木綿花の　榮ゆる時に　吾大王　皇子の御門を

飛鳥の　まがみの原に　久方の　天つ御門を
かしこくも　定め給ひて　神さぶと　磐隠れます
八隅し　吾か大王の　きこしめす　そともの國の
まきたづ　不破山越えて　こまつるぎ　わざみが原の
かり宮に　あもりいまして　天の下　治め給ひし
をすくにを　定め給ふと　鳥か鳴く　吾妻の國の
御軍士を　めし給ひて　千早振る　人を和はせと
まつろはぬ　國を治めと　皇子ながら　まけたまへば
大御身に　大刀とりおばし　大御手に　弓とりもたし
御軍士を　あともひ給ひ　とゝのふる　鼓の音は
いかづちの　聲と聞くまで　吹き響せる　くだのおとも
あだみたる　虎かはゆると　諸人の　おびゆるまでに

かしこかれども

短歌

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに
　月日もしらず戀ひわたるかも

埴安の池のつゝみのこもりぬの
　ゆくへをしらずとねりはまどふ

神龜二年乙丑夏五月芳野離宮に幸せし時の歌　笠金村

足引の　御山もさやに　おちたきつ　芳野の河の
河の瀬の　きよきを見れば　上邊（かみべ）には　千鳥しば鳴く

神宮に　よそひ奉りて　遣はしゝ　御門の人も
白妙の　麻衣著て　埴安の　御門の原に
赤根さす　日のくるゝまで　鹿自物　いはひふしつゝ
烏玉の　ゆふべになれば　大殿を　ふりさけ見つゝ
鶉なす　いはひもとほり　さもらへど　さもらひかねて
春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　未だ過ぎぬに
憶ひも　未だ盡ねば　言さへぐ　百濟の原ゆ
神葬り　葬りいまして　朝もよし　木のべの宮を
常宮と　さだめまつりて　神ながら　しづまりましぬ
然れども　吾大王の　萬代と　おもほしめして
作らしゝ　かくやまの宮　萬代に　過ぎむと思へや
天のおと　ふりさけ見つゝ　玉手襷　かけてしぬばむ

天地の　別れしときゆ　神さびて　高く貴き
駿河なる　富士の高根を　天のはら　振りさけ見れば
わたる日の　陰もかくろひ　照る月の　光も見えず
白雲も　い行きはゞかり　時じくぞ　雪はふりける
語りつき　いひつぎ行かん　富士のたかねは

反歌

田子の浦ゆ打ち出でゝ見ればましろにぞ
　　　ふじのたかねにゆきは降りける

神龜元年甲子冬十月五日紀伊國に幸せし
時の歌　　　　同　　人

八隅知し　わが大王の　常宮と　仕へ奉れる

下邊には　かはづつま呼ぶ　もゝしきの　大宮人も
をちこちに　さゞましあれば　見る毎に　あやに乏しみ
玉かつら　絶ゆる事なく　萬代に　かくしもがもと
天地の　神をぞ禱る　恐しこかれども

反歌

萬代に見とも飽めやみよしぬの
　　たぎつかふちのおほみやどころ
人皆のいのちもわれもみよしぬの
　　たきのとこはの常ならぬかも

不盡山を望むの歌　　　　山部赤人

わかせこに見せんと思ひし梅の花
それとも見えず雪のふれゝば

あすよりは若菜つまんとしめし野に
きのふもけふも雪はふりつゝ

百濟野の萩のふるえに春まつと
すみしうぐひすなきにけんかも

故太政大臣藤原家の山池を詠みし歌　仝　人

いにしへのふるき堤は年深み
池のなぎさにみくさおひけり

勝鹿眞間娘子の墓を過る時の歌　仝　人

さひがぬゆ　そがひにみゆる　沖つ島　淸き渚に
風吹けば　白浪さわぎ　潮干れば　玉藻苅りつゝ
神代より　しかぞ尊き　玉津島山

反歌

沖つ島ありその玉藻しほひみち
　　い隱ろひなばおもほえんかも
和歌の浦に潮みちくればかたをなミ
　　葦邊をさしてたづなきわたる

短歌四首　　同　人

春の野にすみれつみにと來しわれぞ
　　野をなつかしみ一夜ねにける

## 惑情を反せしむる歌　　山上憶良

或は人あり、父母を敬するを知らず。侍養を忘れ妻子を顧ずして、脫履より輕じ、自ラ畏俗先生と稱す。意氣靑雲の上に揚ると雖も、身體猶塵俗の中に在り。未だ修行得道の聖に驗あらず。蓋是山澤亡命の民なり。所以に三綱を指示し、更に五敎を開き、之に遣くるに歌を以して其惑を反せしむ。歌に曰く

父母を　見れば尊し　めこ見れば　めぐしうつくし
世の中は　かくぞことわり　もちとりの　かゝらはしもよ
ゆくへ知らねば　うけぐつを　ぬぎつる如く
履みぬぎて　往くちふ人は　岩木より　なりてし人か

古に　ありけん人の　倭文幡(しつはた)の　帯ときかへて
ふせや立て　つま問ひしけん　勝鹿(かつしか)の　眞間のてごなが
おくつきを　こゝとは聞けど　まきの葉や　茂りたるらん
松か根や　遠く久しき　言のみも　名のみもわれは
忘らえなくに

反歌

われも見つ人にもつげん勝鹿の
眞間のてごなかおくつきどころ

勝鹿の眞間のいりえにうちなびく
玉藻苅りけんてごなしおもはゆ

て世間の蒼生をや。誰かは子を愛せざるべき。

瓜はめば　こども思ほゆ　栗はめば　ましてしぬばゆ
いづくより　來りしものぞ　眼之間(まなかひ)に　もとなかゝりて
安寢(やすい)しなさぬ

反歌

しろかねも　こがねも珠も　何せんに
まされるたから　子にしかめやも

貧窮問答の歌　同　八

風まじり　雨ふるよの　雨雜り　雪ふるよは
術(すべ)もなく　寒くしあれば　堅塩(かたしほ)を　取りつゝしろひ

ながなのらさね　　天へ往かば　汝がまま〳〵
地(つち)ならば　大王います　この照す　日月の下は
天雲の　むかぶす際み　たにぐゝの　さわたる際み
聞こし食(を)す　國のまほらぞ　かにかくに　欲しきまま〳〵
しかにはあらじか

反歌

久方のあまぢは遠しなほ〳〵に
　いへにかへりてなりをしまさに

子等を思ふ歌　　同

釋迦如來金口正說に、等く衆生を思ふこと羅睺羅の如しと、又說く愛は子に過ぐるなしと。至極の大聖尚子を愛する心あり。まし

伏せいほの　まけいほの内に　ひた土に　藁とき敷きて
父母は　枕の方に　妻子どもは　足(あと)の方に
圍み居て　憂へさまよひ　竈には　煙ふきたてず
甑(こしき)には　蜘蛛の巣かきて　飯炊しく　事も忘れて
ぬえ鳥の　のどよひをるゝ　いとのきて　短きものを
端きると　いへるが如く　しもとゝる　五十戸長(さとをさ)か聲は
ねやどまで　きたちよばひぬ　かくばかり　すべなきものか
世の中の道

短歌

世の中をうしとやさしと思へども
とびたちかねつ鳥にしあらねば

糟湯酒　打すゝろひて　しはぶかひ　鼻びし／＼に
しかとあらぬ　鬚かきなでゝ　あれをおきて
人はあらじと　ほころへど　寒くしあれば
麻ぶすま　引きかゝぶり　布かたぎぬ　ありのこと／＼
着襲へども　寒きよすらを　われよりも　貧しき人の
父母は　飢ゑ寒からん　妻子どもは　こひてなくらん
この時は　如何にしつゝか　汝が代はわたる
あめつちは　廣しといへど　あがためは　狭くやなりぬる
日月は　明しといへど　あがためは　照りや給はぬ
人皆か　吾のみやしかる　わくらばに　ひとゝはあるを
人なみに　あれもなれるを　綿もなき　布かたぎぬの
みるのごと　こゝけさがれる　かゞふのみ　肩に打ち懸け

して而して林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁皈る。是に於て天を蓋ひ地に坐し、膝を促て觴を飛し、言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然として自放に快然として自足る。若し翰苑に非ずば、何を以て情を攄ん。請ふ落梅の篇を紀さん。古今夫れ何ぞ異るべき。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

筑前守山上大夫

春されはまづ咲く宿の梅の花

ひとりみつゝやはるびくらさん

筑後守葛井大夫

秋野花を詠める　　同　人

秋の野にさきたる花をおよび折り
　かきかぞふればなゝくさの花
萩が花をばなくずはななでしこの花
　女郎花また藤袴あさがほのはな

梅花の歌(節略)

天平二年正月十三日帥老の宅に萃まる。宴會申るなり。時は初春令月。氣ハ淑に、風は和に、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。加之、曙には嶺雲を移し、松羅を掛けて而して蓋を傾け、夕は岫霧を結び、鳥縠に對

うちなびく春の柳とわがやどの
うめの花とをいかにかわかん
大判事船氏麿

ひとでとにをりかざしつゝあそべども
いや珍らしきうめのはなかも
藥師帳氏福子

うめのはな咲きて散りなば櫻花
つきて咲くべくなりにてあらずや
筑前介佐氏子首

萬代に年はきふともうめの花
たゆることなくさきわたるべし
壹岐守板氏安麿

梅の花いまさかりなりおもふどち
かざしまてな今盛りなり
笠　沙　彌

青柳うめとのはなを折りかざし
飮みての後は散りぬともよし
主　　人

わがそのゝ梅の花ちるひさかたの
天より雪のながれくるかも
少監阿氏奥島

梅の花散らまく惜しみわがそのゝ
たけの林にうぐひすなくも
大典史氏大原

春の野になくや鶯なつけんと

わがへの園に梅が花さく

筑前目田氏眞人

春の野に霧たちわたりふる雪と

人の見るまで梅の花ちる

土師氏御通

梅の花をりかざしつゝもろびとの

あそぶを見れば都しぞおもふ

小野氏淡理

かすみたつ永き春日をかざせれど

いやなつかしき梅のはなかも

春なればうべも咲きたる梅の花
　きみをおもふとよいもねなくに
　　　　　　　　　　　　　　　神司荒氏稻布

梅の花をりてかざせるもろ人は
　今日のあひだは樂しくあるべし
　　　　　　　　　　　　　　　藥師高氏義通

春さらばあはむともひし梅の花
　けふのあそびにあひみつるかも
　　　　　　　　　　　　　　　陰陽師礒氏法麿

梅の花たをりかざしてあそべども
　あきたらぬひは今日にしありけり
　　　　　　　　　　　　　　　竿師志氏大道

いでゝゆく道知らませばかねてより
　妹をとゞめん關をおかましを
妹が見しやどに花さくときはへぬ
　わがなく涙いまだひなくに
かくのみにありけるものを妹もわれも
　千歳のごとくもたのみたりける

痛悼未だ熄まずして詠める歌　全　八

世の中し常かくのみとかつ知れど
　いたきこゝろは忍びかねつも
佐保山にたなびくかすみ見るごとに
　妹を思ひでゝなかぬ日はなし

## 亡妾を傷む歌　　大伴家持

吾が宿に　花ぞ咲きたる　そを見れど　心もゆかず
はしきやし　妹がありせば　みかもなす　二人ならびゐ
手折りても　見せましものを　空蟬の　借れる身なれば
露霜の　消ぬるが如く　足引の　山道を指して
入り日なす　かくりにしかば　そこもふに　胸こそ痛め
いひもかね　なづけもしらに　跡もなき　世の中なれば
せんすべもなし

反歌

時はしもいつもあらんを心いたく
いにしわきもか若子（わくご）をおきて

反歌

ゆくへなくありわたるとも霍公鳥
　なきしわたらばかくやしぬばん

卯の花の咲くにしなけばほとゝぎす
　いやめづらしも名告りなくなへ

霍公鳥いとねたけくは橘の
　はなちる時になきとよむる

雨の落りたるを賀して　　　仝　人

わがほりし雨はふりきぬかくしあらば
　言擧げせずともとしはさかえん

むかしこそよそにも見しかわきもこが
　おくつきと思へばはしき佐保山

獨り幄裏に居て遙に霍公鳥の喧くを聞て
よめる　　仝　人

高御座　天の日繼と　すめろぎの　神のみことの
聞こし食す　國のまほらに　山をしも　さはにおほみと
百鳥の　來ゐて鳴く聲　春されば　きゝのかなしも
いづれをか　わきて忍ばむ　卯の花の　咲く月立てば
珍らしく　鳴く霍公鳥　あやめぐさ　玉ぬくまでに
ひるくらし　よわたしきけど　聞く毎に　心うごきて
うなげちき　あはれの鳥と　いはぬ時なし

短歌二首

われのみぞ君には戀ふるわかせこが
　こふとふことは言のなぐさぞ
夏の野のしげみに咲ける姫百合の
　しらえぬ戀はくるしきものぞ

防人の別れを悲む心を痛む歌　大伴家持

大君の　とほのみかどゝ　不知火　筑紫の國は
あたまもる　おさへの城ぞと　聞こしをす　四方の國には
人さはに　みちてはあれど　鳥が鳴く　あづまをのこは
いで向ひ　かへり見せずて　勇みたる　猛き軍士と
ねぎたまひ　まけのまに〱　たらちねの　母が目離れて

## 秋の歌　　　　　　　仝　　人

さをしかの朝たつ野邊の秋萩よ
　　たまとみるまでおける白露

## 短歌二首

淺茅原つばら〳〵まものもへば
　　ふりまお鄕のおもほゆるかも

わすれ草わか紐につくかぐ山の
　　ふりまし鄕を忘れぬかため

とりが鳴く吾妻をとこのつまわかれ
悲しくありけん年のをながみ

旋頭歌

自嘆歌　　　　　元奥興僧

白珠は人にしらえぬ知らぬともよし
しらぬともわれししれらし知らずともよし

春日なる三笠の山に月もいでぬるも
さき山にさけるさくらのはなの見るべく

白雪のとこしく冬はすぎにけらしも
はるかすみたなびく野邊の鶯なきぬ

若草の　妻をもまかぜ　あらたまの　月日よみつゝ
あしが散る　難波のみ津に　大船よ　まがいしゞぬき
朝なぎよ　かことゝのへ　夕潮に　かぢひきをり
あともひて　漕ぎゆく君は　波の間を　いゆきさぐゝみ
まさきくも　早く至りて　大王の　みことのまよま
ますらをの　こゝろをもちて　ありめぐり　今年をはらば
つゝまはぜ　皈りきませと　いはひべを　とこべにすゑて
白妙の　袖折りかへし　ぬばたまの　黒髪しきて
長き毛を　まちかもこひん　はしきつまらは

反歌

ますらをの　ゆぎとり負ひて　出でいけば
わかれを惜しみ　なげきけんつま

ふじ河と　人のわたるも　その山の　水のたぎちぞ
日本の　やまとの國の　鎭めとも　いますかみかも
寶とも　なれる山かも　駿河なる　富士の高嶺は
見れどあかぬかも

反歌

ふじのねに降りおける雪はみなつきの
もちに消ぬれば其夜ふりける
ふじのねを高みかしこみ天雲も
いゆきはゞかりたなびくものを
(高橋連蟲麻呂歌中に在り)

天皇高圓野に狩し給ふ時むさゝびを得て

譬喩歌

はふりらがいもふやしろの紅葉も
しめ縄こえてちるとふものを

富士山を詠める歌

よみ人しらず

なまよみの　甲斐の國　打よする　駿河の國と
こちごちの　國のみなかゆ　出立てる　富士の高嶺は
天雲も　いゆきはゞかり　飛ぶ鳥も　とびものぼらず
もゆる火を　雪もてけち　ふる雪を　火もてけちつゝ
いひもえず　名付もしらに　あやしくも　います神かも
せの海と　なづけてあるも　その山の　つゝめる海ぞ

鳴じもの　水に浮居て　わかつくる　日の御門に
知らぬ國より　こせぢより　我が國は　常世にならむ
ふみおへる　怪しき龜も　新代(あらたよ)と　泉の河に
持ちこせる　まきのつまでを　もゝたらず　いかだに作り
のぼすらむ　いそはく見れば　神ながらならし

天武天皇

みよしのゝ　みゝかの嶺に　時なくぞ　ゆきは降りける
ひまなくぞ　雨は降りける　其の雪の　時なきがごと
その雨の　ひまなきが如　くまもおちず
思ひつゝぞ來る　その山道を

上れるに詠みてそへたる歌　大伴阪上郎女

ますらをのたかまとやまにせめたれば
　さとにおりくるむさゝびぞまれ

藤原宮にたてる民がよめる歌

八隅おし　わか大王　高ひかる　日の皇子
荒妙の　藤原かうへに　食す國を　めし給はんと
みあらかは　たかしらさんと　神ながら　思はすなへに
天地も　よりてあれこそ　いはゞしの　淡海の國の
衣手の　田上山の　まきさく　ひのつまでを
もゝふの　八十氏河に　玉藻なす　浮べ流せれ
そを取ると　さわく御民も　家忘れ　みもたなしらず

寄花　讃人しらず

われこそは憎くもあらめわがやどの
　はなたちばなを見ては來じとや

寄物陳思

劒太刀なのをしけくもわれはなし
　このころの間のこひのしげきに

寄物陳思

梓弓ひきてゆるべぬますらをや
　戀といふものをしのびかねてん

吉野に幸し玉ひし時の御製　天武天皇

よき人のよしとよく見てよしといひし
　吉野よく見よよきひとよくみつ
　　　　　　　　持統天皇

春すぎて夏きたるらし白妙の
　ころもほしたり天のかぐやま
　　　　　　　　志貴王子

あしべゆく鴨のはかひに霜ふりて
　さむき夕れやまとしおもはゆ

おきていかゞ妹はまがなしもちてゆく
あづさの弓のゆづかにもがも

おくれゐてこひばくるしも朝獵の
君がゆみにもならましものを

東歌三首

玉川にさらすてつくりさら〳〵に
なにぞこのこのこゝだかなしき

信濃なるすがのあらのに霍公鳥
なく聲きけばときすぎにけり

遠江(とほつあふみ)いなさほそえのみをつくし
あれをたのめて淺ましものを

---

防人歌二首

# 第三篇　平安朝の文學。

## 第一章　總論。

桓武天皇延暦三年に、八代七十餘年の間、君民共に住み馴れし、奈良の都を、山城國乙訓郡長岡に遷し給ひしが、十年を經て、其工事尚成らざりしかば、延暦十二年、更めて全國葛野郡宇多村を相して、宮城を經營し、萬世不易の帝都と定め、平安城と名づけ給ひき。是れ實に延暦十三年、紀元千四百五十四年の事なり。是より明治二年、今の都に遷り給ひしまで、千有餘年の間、帝都は此處に奠まりしかど、文治二年に、源頼朝が覇府を鎌倉に開きしより、大權武門の手に落ち、京都はましますす天子は、唯垂拱して成るを仰ぎ給ふのみなりしかば、此書に於ても、普通の稱呼に從ひ、たゞ其以前をいれ平安朝といふ

漸が、如何なる影響を、我國の文明、特にそが文學の上に與へしかば、既に前に詳かにせり。其後漸く唐風の行はるゝに從ひ、質樸粗野の風俗は變じて、華美艶麗となり、聖武天皇の御代より、佛法の、益弘通せしと共に、勇壯活潑の氣風は失せて、優柔懦弱となりぬ。此の人情風俗は、稍既に奈良の朝に於て見るべかりしが、平安の朝に至りては、一層甚しくなりたり。抑、我國の上代は、一般に風俗の高尚なりしには似ず、男女兩性の間には、別に嚴正なる規則も無かりしほどに、高貴なる方々にても、賢明なる人々にても、此點に於ては、猥りがはしき舉動少からざりきされども、當時は上下の風俗質樸にして、尚武の氣象熾んなりしかば、さまでの弊害を見ざりしが、降りて唐風を摸して、浮華を尊び、佛法を信じて、無常を感ぜ

なり。されば、平安朝の文學とは、平安奠都の頃より、源平兩氏の時代まで、凡四百年間の文學を稱するなり。此文學は、國史の修撰といひ、漢文漢詩の流行といひ、みな奈良朝の文學を繼ぎ、其將に執らんとせし方角に、進步なしたるものなれども、國文學の上より觀察して、大に價値あるものは、大抵新に此時代にあらはれたるものとす。物語、草子、日記、紀行等の散文の文學の如き即ち是れなり。和歌は星霜を經るに從ひ、漸々變遷して、遂には萬葉時代のものと比較すべき價値なきものとなりき。されども、尙是れ平安朝の特有なる一種の光彩を帶びたるものにして、特に一時は、或る點より觀察すれば、萬葉時代にも凌駕するばかり進みし事ありき。

夫の推古天皇の時に始まりし隋唐との交通、及び佛敎の東

せて、穴隙を鑽り、此世の外なる樂ま、世の害はるゝも、民の苦ことなるをも顧みずして、此世をば樂しき夢の中に過ごしたり。また子孫の繁榮を希ひ、後生の安樂を求むる爲めに、代々莊嚴なる寺院を建てたりき。當時、朝廷の御慰みには、詩歌、管絃、蹴鞠、香、雙六等は常の事なり。此他、曲水の宴、紅葉の賀、四季折々の御遊の盛んなる、云ふばかりなし。かの競馬騎射の如きも、今ハ一の遊戯とのみなりたり。かくの如く、槐棘の地は、變じて歌舞の巷となり、花柳の境ともなる狀態なりしかば、終には政權の、地方ま移ることを如何ともする能はざりき。而して、公卿百官の、かくも遊宴にのミ耽る暇ありしは、何故ぞ。蓋しかの唐風を摸して、我國の進歩に比べては、頭の大なるま過ぎたる政府を設けられしかば、政務の割合に少かり

る時代に至りては、日本男子の勇壯なる氣風は、全く之がために消耗し、姿も心も女々しくなりて、遊惰の風漸く朝廷に盛んなるに從ひ、其弊害大に露はれ、夫の藤原氏が大權を恣にする頃に至りては、殆んど其極に達したり。蓋し此時に當りて、朝廷の顯要なる位置は、みな藤原氏の一族にて之を占め、全國の豐饒なる土地は、莊園として、多く彼等の爲めに領せられたりき。故に藤原氏は歷代天子の外戚として、政權を掌握せしのみならず、又、大地主として、貨財にも不足なかりしかば、此時にこそとて、宏壯なる邸宅を構へ、盛大なる宴會を催して、豪華を競ひ、奢侈を鬪はす事常となり、身には綾羅錦繡を纒ひ、口には豪粱美味に飽き、翩々たる佳人才子、春の朝、秋の夕、花にたはむれ、月に嘯き、慇懃を通じ、花鳥の使を馳

樂溢るゝばかりなりしかども、都を出づるゝ、僅に一歩なれば、宛も暗夜に夜會の席を出たでるが如し。されば、朱雀天皇の天慶年中に、平將門は東に、藤原純友ハ西に相叛きしも、藤原氏の力にては、擊ち平ぐるゝ能はず、諸國の武士の力によりて、其乱漸く定まりたり、然れども内には朝廷の紀綱次第に緩みて、圓融天皇の朝には、盜賊近畿を横行して火を放ち、人を殺ししかども、之を鎭むるゝ能はず、私に兵杖弓箭を帶ぶる者、多かりしも、亦之を禁ずるゝ能はず、外には諸國の武士、益、朝威を憚らず。或は、海賊の調庸を奪ふものあり、行路を妨ぐるものあれども、朝廷の力、勿論之を如何ともする能はざりき。其後、後一條天皇の朝に、平忠常の反せる時と云ひ、前九年後三年の兩役といひ、孰れも皆然らざるはなかりき。か

しにも由るべし。然れども、たとひ小なりと雖も、一帝國の政府なれば、事務なきに非ず。唯、浮華の空氣を呼吸して、游惰性を成したること久しければ、煩雜なる政務の如きは、多く下官に司らしめ、特に兵馬のことの如きは、最も其厭ふ所にして、之を武人に委ねて顧みざりしかば、さてこそ、かく遊宴にのみ耽るの閑ありしなれ。

此の如く、藤原氏も、中葉以後に至りては、復、大奸を倒して其家を起しゝ、鎌足の如き英傑なく、幼主を擁して政權を握りし、良房の如き智謀の人もなく、唯、一身の名利を謀り、目前の快樂を貪るが如き、凡庸の徒のみ多かりしかば、生れながら高位に居て、其門閥に誇り、實務を怠り、武官を輕じ、徒らに泰平無事を希ひたりしが、平安の地にこそは、歌舞管絃洋々の

て物の怪、生靈などの祟りとおもひ、惡魔の仕業ならんと、考ふるよりして、神職を招き、僧徒を集へて、加持祈禱を專らとしたり。されば、此際には祈禱の僧、修驗者などへ、極めて優待せられしほどに、折合悪しかりし神道と佛法とは相親和して、神佛一体、本地垂跡の說をさへなすにいたりぬ。惟ふに、これ一ツは當時、最澄、空海の如き名僧智識の多くして、其說法の巧みなりしと、二つには、當時の公卿百官より學者に至るまで概ね氣力なく、精神なくして、柔弱怯懦なるより、婦女子の如くなりしかば、神佛を識別するの力なくして、孰れも尊敬崇信すべきものと、思ひたればなるべし。此風俗いよ〳〵盛んなるに隨ひ、朝廷の律令、いつしか行はれず、佛法ひとり國家の護法となりしかば、暴風洪水の如き天災地妖より、疫癘兵

かる騷がしき世にありながら、上達部、殿上人は、毫も之を知らざるものゝ如く、詩歌管絃の遊宴に耽りて、春の日の暮るゝも知らず。秋の夜の明くるもしらで、ありしほどなれば、唯淫猥の風のみ盛になりて、晋に彤管の貽。芍藥の謔のみならず、關白にして一時に二妻を娶りたるものもあれば、名媛にして同時に二夫に見えたるものもありしといふ。風俗の乱れたること、推して知るべきなり。而して、これらの上達部、殿上人は、政治の爲めに精神を勞せず、衣食の爲めに手足を働かさゞれば、民を憐むの心なくして、衆ゝ驕るの情のみ、婦人に戯るゝ術と共に增長せり。而して、其智淺く、膽少にして、佛説に惑溺せるが故に、死を懼れ、生を希ふ心強く、病を恐るゝこと甚しかりしかば、聊にても、心身の不快あるときは、之を以

の亂の如きは、古人も云ひし如く、五倫五常を滅却せし大變亂なり。是れ、平安の朝を支配せし人情風俗が、其頂點に達したるを以て、さながら洪水の、堤を破潰せしが如く、天下を濁乱せしものなる事明白なりとす、此あひたに、藤原氏敗れて、源平兩氏の爭となり、源氏亦敗れて平氏獨り榮え、其所領は六十余州の半ばに及び、平氏の族にあらざる者は、人に非ずといふ勢に乘ド、漸く倨傲の志を生じ、事々物々、盡く藤原氏の驕奢を學びしかば、廿年榮華の夢、忽ち源氏の軍に破られて、西海に沒落し、天下の大權は、源家の握る所となりまき。平安の朝四百年間の形勢は、略、上に述べたるが如し此間にあらはれし文學は如何あるものか、讀者の容易に想像し得る所ならん。蓋し文學ハ人心の射映なり。平安の朝の人心は、

寇に至るまで、經文を誦して避けんことを祈り、佛陀の勢力を乞ふより外に詮方なかりき。

此間にも、前には宇多天皇の、菅原道眞を登用して藤原氏を抑へんとし給ひ、後には後三條天皇の、大に政綱を張り給ひし類なきにあらずと雖も、孰れも其志を遂げ玉はざ。又、貞觀(清和)延喜(醍醐)天曆(村上)の如き泰平の治ありしと雖も、是れ亦、流星が一時燦爛たる光りを發せるが如く、又、佛國路易十四世の治世の如く、要するに、浮華ならざるはなかりき。而して天下の人心は、かく朝廷に向はずして武家に皈せんとする折なるにも關せず、大宮人はたゞ私慾私情をのみ恣にして、人倫を忘れ、名分を失ひ、不潔卑劣の樂を極めしにより、其結果は、一轉して保元の亂を釀し、再轉して平治の亂となりたり。保元

## 第五　歴史体の文、

### 第六　和歌及び歌序。

今、之を述ふるに先ち、尙少しく、平安朝の漢學の狀態を示さゝるべからざるを蓋し、平安の朝は、國文學盛んなりしと雖も、漢學決して衰へたりしに非ず。朝廷の令達は勿論、歴史、法制等重なる著書は、皆漢文なりき、男子の往復文も、亦多くは漢文にして、漢文およそ、實に此時代の事情の外部を示すものなれ。されば、其裡面を明かにする國文と、其相頼ること、極めて深かりしなり。

是より先き、淳仁天皇の天平寶字元年、公廨田二十町を大學寮に供し、學生の費用にあてられしかども、桓武天皇の頃に至りては、漢學最も盛んにして、學生の數大に增加し、大學の

艶麗優美なること花の如く、又、月の如し。然れども、柔弱にして氣力なく、淫逸にして節操を缺く。さては此人心、文字にあらはれて、平安の朝の文學となり、其文學また飜りて人心を動かし、彼此相頼りて、四百年間の社會を左右したり。

此時代はかくの如く、柔弱なり又淫逸なりと雖も、國文學の上より觀察すれば、極めて價値あるものにして、其散文、韻文ともに見るべき者多し。今從來の類別法によりて、之を分ち、左の六章に於て、順次に之を論ぜんとす。

第一　平假名の製作。

第二　物語即ち小說の文。附消息文。

第三　日記及び紀行の文。

第四　草紙即ち隨筆の文。

の朝に。菅原道眞の上りし類聚國史、また有名なるものなり。法制其外の雜書にては、桓武の朝に古語拾遺、大同本紀。嵯峨の朝に弘仁格式、新撰姓氏錄、淳和の朝に令義解、清和の朝に貞觀格式醍醐の朝に延喜格式等の撰ありき詩文集には文華秀麗集、經國集、本朝文粹、都氏文集、菅家文草、性靈集等ありきて當時の歷史は、專ら編年の体を用ひ、主として朝廷年中の行事百官の敘任、又は天變地異の類を、年代の順序に隨ひて列記したる者にして、毫も事實の連絡關係、若くは事變の源因結果を明にせず。又事實の撰擇をもせず、徒に卷帙浩瀚なるを以て、よしとしたるが如し。其文章は、文選史漢等の熟語成句を、其儘引用したる處多ければ、さすがに華麗なりこ雖も、また決して漢文こして見るべき者にも非ず。國文學より

費用足らざりしかば、新に學田百三十二町を増加し給ひき。之を勸學田といふ。この後、文德天皇の頃に至るまで、歷代の天皇、みな意を漢學に用ひ給ひしを以て、漢學の勢を得しこと、前代に比なし。貴紳の人々も亦校舍を設けて、教育を奬勵したり。即檀林皇后は學館院を建てゝ、橘氏の子弟を勵まし、左大臣藤原冬嗣は、藤氏の學校、勸學院を建てゝ千戸の封を寄附せり。此外、在原行平の奬學院、恒貞親王の淳和院、菅原大江兩氏の文章院、空海の綜藝種智院等、孰れも皆榮えたりき。されば、漢文の著書も少からずして國史には、桓武天皇の朝に、續日本紀、仁明天皇の朝に日本後紀、清和天皇の朝に續日本後紀、陽成天皇の朝に文德實錄醍醐天皇の朝に三代實錄の修撰ありき。是に於て本朝の六國史全く成れり。宇多天皇

## 第二章　平假名の製作

漢字を以て國語を寫すに當り、必用に迫られて、片假名の發明あるに至りしことは、既に前篇よ述べたり、片假名の出來し後と雖も、漢學益行はれて、漢文を書くこと、最も盛んなりしのみならず、漢字を用ひて、國語を寫すことも、尙多かりしなるべし。然るに、前にも云ひし如く、漢字も、點畫複雜よして、煩はしければ、之を用ふること盛んなるに隨ひ、重よ草体の字を用ふるに至りき。蓋し草体の文字は、或る制限の内にありては、字畫を省略する事自由なるに由り、其效恰ゟ片假名を用ふるに似たり。されば、此草体漸變して、遂に平假名となりぬ。其字体の一定せしは、嵯峨天皇の頃、僧空海が、いろは歌を作りたる後なるべし。空海は、高野山を開き、密教の眞言を

觀察を下す時は、續紀の中ゟ、宣命の文ある等を除きては、甚だ價値ある者なし、然れども、尙ほ六國史以下の諸書が、史學上ゟ貴重なること、今茲に言ふを待たざるなり、漢文詩賦の最も盛に行はれしは、嵯峨天皇の頃なり、當時は、專ら六朝の四六駢儷体の文を、書くことを勉めたりしかば、學者の中には、文選を暗誦せし人さへ少からざりきされば、其文章には生氣なくして、恰も作り花の香氣なきが如し、讀者試に本朝文粹を繙け。必ず、漢文詩賦も、能く當時の人情風俗を寫して、遺す所なきを知らん。又之と同時にかの八代の文弊を排して、其衰を起せし、韓愈の如き人の出でざりしを嘆ずるならん。此後。醍醐天皇の朝に、遣唐使を止め給ひしよりは、漢學また前日の如く盛んならず。從ひて、漢文を屬することも、漸く拙くなりぬ。

かの漢字の數千を學びて、尙は思ふことを、充分に寫し得ざるに比すれば、其差遠、豈啻に天壤のみならんや、是れより、人の思想、想像を述べ、感情を寫すこと、漸く盛んになりしほどに、散文の文學は、さながら旭の昇るが如く、物語、日記、紀行、隨筆、歌序の如き、前代にはなかりし文學も、一時に現はるゝに至れり。既に前篇にもいひし如く、本邦の文學は、歌謡を以て始り、奈良の朝に至りて、始めて祝詞、宣命等の散文ありしと雖も、これは、韻文を距ること、尙未だ遠からざりき。然るに、片假名先きに成り、平假名後に製作せらるゝに及びて、純粹なる散文、始めてわが文學史中に、曙光を放つに至りぬ。尙此章を讀むには、前篇第二章を參看すべし。

弘めたる名僧ましして、漢學にも精しく、梵語にも通じたりければ、從來行はれたりし、諸種の平假名を精撰し、其四十七文字を以て、佛說を寓したる今樣歌を作りたり。然るに、空海も當時の名僧といひ、殊に草聖と稱せられしほどの、能書なりしかば、其書きたりし四十七文字のいろは歌は、平假名文字の標準ともありしなるべし。其効、吉備眞備の片假名に於けると異ならず平假名を作りたるは、空海なりといふ傳說あるに至りしも、亦片假名を作りしは、吉備公なりといふに至りしと、善く相似たり。但し人々假名を習ふには、片かなを先きにし、平かなを後にせりといふ。

平假名出來しよりは、四十七字をたゞ知れば、自國の言語語法を以て、如何なる事をも書きあらはし得るに至りしかば、

て、人情を寫し、以てかの優美にして柔懦なる、佳人才子の消閑の具となす事、大に行はれたり。物語即ち是れなり。さて、物語なるものゝ文体と結構とを見るに、大略は同じけれども、各少しづゝ異なる處あり。過ぎにし世にありし事、又は己れの經歷を、人に語り聞かするさまとなし、些少なる事實を根據として、之に附會して、之を敷衍したるもあり。或は、全く作者の想像により、趣向を搆へたる、空中の樓閣なるものあり。或は世にありしことを、其儘に記錄せるものあり。伊勢物語、大和物語、等其第一類に屬し、竹取物語、源氏物語、住吉物語、宇津保物語、濱松中納言物語等、其第二類に屬す。其第三類のものは、名は物語といふと雖も、其實は即ち記錄なり歷史なり。故に、古來之を雜史と稱して、物語と分てり。榮花物語の類、即ち

## 第三章　物語。即ち小說の文

平假名の出來し頃には、既に平假名文の行はれしこと、自然の勢にして、疑ふべくもあらざ。されど、其平假名文にて、一種の体裁を備へ、平安朝の文學を形づくりたる一大要素となりしものは、即ち、物語文是れなり。抑、物語といふは、もと話說の義ましして、ふるく日本書紀には、談の一字を、ものがたりとよみたり。この名をば、話說を綴りたる書物ま用ひ、物語とよみたるものなるべし。我國上古の傳說を、記錄したる紀記の二書には、神代よりの物語甚だ多し。人皇の御代となりても、夢野の鹿、浦島子などの物語あるは、能く人の知る處なり。降りて平安の朝に至りては、文物大に開け、且つ假名文字の用法自在なりしかば、或は人生の盛衰を述べ、或は脚色を設け

錄にして、第三類のは、歷史的記錄なるの差違あるのみ。是を以て、此時代の小說は、殊ゝ歷史の參考となること多し。蓋し我古來の歷史は、いはゞ、途を行きて、路傍の家を外よりのぞき見たらんが如し。內部の事は、少しも知られず。若しよき文明史体の眞史出でなば、其家の內には、如何なる容貌の人の、如何なる衣服を着け、如何なる言行をなしつゝあるかを知り得べし。然れども、人と交際するゝは、其住宅、容貌、衣類等にても、大概は知らるべけれど、詳なる處は及ぶべからず。須らく、其內部ゝ立ち入りて、其心裡を窺はざるべからず。物語文は、即ち、其心裡を表はしたるものにして、之を讀むときは千年以上の人物の胸中も、鏡にかけて、見るが如き思あり。物語の中にて、最も古きは、伊勢物語と竹取物語となるべし。

是れなり。此れは第六章に論ずべし。

さて、右に云へる第一類と、第二類とに屬するものは、社會の事のをかしき、おもしろき、哀れなることを綜合し、世態人情を寫したるものなれども、其作者は、概ね翠帳紅閨の貴婦人なれば、其寫す所の區域、甚だ狹隘にして、たゞ平安城裡の四季折々の事物と、男女のなからひとを、題目と爲したりしのみ。而して、之を讀むものは、即ち、かの花に戯るゝ狂蝶の如き、佳人才子にして、皆、讀者が物語中の主人公か、主人公が讀者かと疑はるゝばかりの人々なりしかば、之をよみて、いみじく物のあはれを觀たり。其人物の容貌といひ、言行といひ、其事件の性質顚末は、第三類の物語中のものと、異ることとあらず。蓋し、第一類第二類のものは、當時の人情風俗の小説的記

なり。

今先づ竹取物語を最も古しとして、其脚色をいはん。昔、竹取の翁といふ者ありき。野山に分け入り、竹をとりて種々の事につかひたりき。或る時、竹の中に、光り耀く少女を見出だしたりしかば、とりて養ふ程に、すく〳〵と生ひ立ちて、世に類なき美人となりき。之を赫哉姫といふ。かくと傳へ聞く皇子公達ども、みな思ひをかけ、如何にもして、此乙女を得んとて、備さに辛苦を嘗め、或は龍の腮の珠をさぐり、或は、燕子の子安貝を求め、或は、火鼠の皮衣をたづねて、之を挑みしかど、赫哉姫、遂に靡かず。時の帝、このことを聞食して、天子の尊と四海の富とを以て、之を靡かしめんとし給ひしが、赫哉姫は、八月の十五夜に、其故郷なる、月の都より下り来し、迎ひの使に伴は

此二書の中にて、いづれか先、孰れか後といふこと、詳ならず。本居宣長は、源氏物語の文を引きて、繪合の巻に「物語の、いでき始めの祖なる竹取の翁に、宇津保のとし蔭を合せてと、あれば、此竹取や始めなりけん。其物語、誰がいつの代に、つくれりとは、定かに知らねども、いたく古きものとも見えず。延喜などよりは、こなたの物とぞ見えたる。」といはれたり。然るに、伊勢物語は、或は在原業平の手になるといひ、或は伊勢の御の作なりともいひて、古來其說一ならざれども、其書の趣をみるに、全く一人の手になりたりとは、考へられず。思ふに、始め業平の書きたる日記、詠みたる歌をば、後の人の補ひ定めたる者あるべし。文中に、延暦遷都の後、遠く距たらざる時のさまを、かきたるなどを見れば、其古きこと、推して知るべき

示すに足れり。而して、この結構は、佛說寶樓閣經等の書中に、見えたる事實に基くといふ。

其文章は、通常の物語文の、優美にのみ長じて氣力なきに似ず、少しく遒强なるを見る。文法簡潔素樸にして、稍古文に似て、蒼然古色を帶ぶと雖も、其思慕怨恨を寫せる處は、委曲緻密の筆を用ひて、毫も遺憾なからしめ、恰も莊子を讀むが如き感あらしむ。但し、これはかれの如く、艱澁ならざるにより、其古きに似ず、却て解し易し。余輩、其文章の遒强なると、滑稽事實を以て、骨子とせしを以て、此書の作者は、たとへ、世人の傳ふる如く、源順ならずとするも、尙、學識深遠なる、男子の手に成りしものなるを信ずるなり。

伊勢物語と、竹取物語とは、時代を去る事遠からず。其文章も、

れ、昇天せり。其時、帝に不死の藥を遺し置きたるを、帝は是だに思ひの種なりとて、天に近き高山に登り、かの不死の藥を焚き給ひけり。これより、其山をふじの山といひ、その煙絶えず、雲の中へたち登るとぞいひ傳へたると、書きて局を結べり。」

今、此書を見るに、其趣向はかくの如く、荒誕不稽なるに似ず。竹の園生の御身、または上達部の人々が、一婦人のためには、身を忘れて、之れが歡心を得んとし、萬乘の尊、また之れがために、心を蕩かし給はんとせしさまを、寫したりしこと、或は、諷刺規諫の意を、寫したるものゝ如くに見ゆと雖も、當時、小說を以て、人情風俗を裨益する事は、未だ之を知る者なかりしかば、これまた、普通の滑稽小說なるのみ。然れども、滑稽の材料を、婦人を挑むに取りしは既に、平安の朝の文學たるを

ざるが故よ、和歌には秀逸なるもの多しと雖も、散文にはすぐれたる處割合に少し。

伊勢物語はかくの如く、小說よりは、寧ろ序文の長き歌の集、若くは、虛飾多き日記、紀行の文とも見るべきものなれば、其書きたる事柄は、連續せるものにあらず。其情事を敍する中に、或は哀むが如く、或は怨むが如く、或は憤り、或は怒る、故に古來、業平を以て放縱自恣の徒と罵り、或は其實、忠誠なるも、時を得ずして、深く自ら韜晦せしものと賛し、甚しきに至りては、其汚穢敗德の行も、亦策略なりといふに至る。然れども、余輩は、平安朝の文學に於て、多くは其文章をとりて、其紀事を取らず。或は、其文と其紀事とを取るも、其人を斥くること少からず。此書に於ても、またしかいはざるべからず。

大に相似たる處あり。殊に、其簡潔にして適强なるところ、或は之に過ぐ。其詞少くして意滿ち、好んで結尾の斷截せられたる短句を用ひ、或は「てにをは」を省きたる處の類、極めて古風なり要するに、奈良朝の散文は、句節層々相重り、恰も聯珠の如く、文理稍流暢ならざる傾きあり。平安朝に至りては、動詞の語尾を活用して、接續辭に代用すること多きを以て、大に此弊を除きたり。略言すれば、奈良朝の文は、多くの短句を聯ね、平安朝のは、少數の長句を、連ねたるものなり。又、形容詞のみをあらはして其下に來るべき名詞を省略するが如き縮約法は、皆、此朝に至り、始めて行はれしことなり。然れども、全体を評すれば、伊勢物語は、和歌を主として、散文は其附屬物なるが如し。蓋し、散文の部分は、殆ど和歌の序たるに過ぎ

なり。枕草紙にも、物語は、住吉、宇津保とあれば、甚た古きものなるべし。然れども、此草紙にいへる住吉物語は、早く亡びて傳はらず今日に現存する處の住吉は、後人の假托なりといふ學者の定論あり。其文辭を見ても、直ちに其僞作たるを知らるべけれど、さりとて、無下に卑むべきにもあらず。其文章は甚た見るべき處あり。宇津保物語は、今本誤脱多く、蠹魚の害を蒙りし處、また少からず。且つ、順序の間違ひたるところなどありて、如何にも讀み下しがたし。されど、其文章の古色靄然たると、全體の仕組みの樸實無味なるとによりて、推考するに、此書は竹取よりは、新しくして進みたるものなるべけれど、今の住吉物語よりは、遙かに古代のものたること著し。

此種類の物語にして、後に出來ざるは、即ち大和物語なり。其作者、或は業平の子滋春なりといひ、或は、花山天皇なりといふ。皆信ぜられず。其全体の組織より、文章に至るまで、細大悉く伊勢物語を學びたるものなれども、稍簡淨ならず。又やゝ遒強ならず。詞多くして實少く、まゝ拙き古言の交りたるのみならず、稀に、伊勢物語中の事項を、詞をかへて載せたる處などは、いよ〳〵其拙きを覺ゆ。後人の僞作竄入せしと思はるゝ處、亦多し。されど、此種類の物語の中にては、伊勢の次に位すべきもの、此書を措きて他にあるべからず。古人も之を賞したり。ことに歌人の必ず見るべきものと、八雲御抄にも宣ひき。

次にあらはれたりといひ傳ふる者は、住吉物語、宇津保物語

取。落窪等の著者として指さるゝは、信を措きがたしといへども、平安朝の一大國文學者たりしことは疑ふべからざるなり。

濱松中納言物語に、中納言なる人の、唐土に渡りしとき、その皇后と通じ、子を設けて、わが國に還りしことを陳べ、落窪物語に、中納言なる人の女、繼母に憎まれ、寢殿の放出のまた一ト間なる、落くぼなる處に住まはされ、落窪の君と呼ばれて、暮らしわびしを、あこきなる侍女の媒介にて、藏人の少將と契り、遂に家を脱し、此少將と相住みて、榮えたる事を書きし類は、皆當時の風俗習慣をうつしたり。「とりかへばや」に、或る卿、男女二人の子を有ちしが、男兒はめゝしく、女兒はかへりて雄々しきを悲しみ、いかでか此二人の性質を、とりかへば

以上の諸書何れも、其作者と、其世に公になりし精細なる年代とを、知る能はざるは、遺憾の至りなりといふべし。之に次ぎてあらはれし、濱松中納言物語、落窪物語、とりかへばや、の類、皆、其作者を詳にせず。而して、源順といふ人、しばしば其作者の一人として、世に傳へらる。順は村上、冷泉、圓融諸帝の朝に歴任せし人にして、詩文を能くし、和歌に巧みにして、後撰和歌集を撰びし梨壺五人（後に出づ）の一人なり。嘗て、勤子内親王のために和名類聚抄廿卷をあらはし、天地、氣候、人事より、舟車、器具、禽獸、草木に至るまで、一切のものゝ和名をしるし、文字の出處を詳にせり。これ實に、後世文學者の、秘寶とするところなり。然れども、此人、官途沈滯、僅かに能登守に至りしのみなりしかば、憂鬱慷慨、まゝ文辭の上にあらはるといふ。其竹

ども、今傳はらざるもの、極めておほし。然れども、余輩は唯かの絶世の傑作、千古の妙文と稱へらるゝ、源氏物語をして、此種の散文を代表せしめ、少しく論ずる處あらんとす。源語は、啻に物語文を代表するのみならず、啻に平安朝文學の精粹にして、雅文の極美なるものなれば、余輩は、出來得べくんばの紙面を之に與へんとす。されども、其前に、まづ竹取、伊勢等の文例を示さざるべからざるぞ。

龍珠を求めんとして暴風に逢ふ（竹取物語）

我弓の力は、龍あらば、ふと射ころして、首の玉はとりてむ。遲く來るやつばらを、待たじとのたまひて、船に乘りて、海ごとにありき玉ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に、こき出

ぞと、願ひしおもむきを、記せるは、一ト通りの作り物語なるべし。かの住吉物語に、中納言兼左衞門督なる人のむすめ。繼母に憎まれて、辛酸を嘗めし末、遂に住吉の浦に流寓せしが、行末大に富み榮えたるさまを寫し、繼母は之に反して、不幸なる境遇に陷りし事を、述べたるがごときは、稍後世の所謂勸善懲惡主義を、寓したるものゝ如し。此一事を見ても、以て此書の他のものよりは、甚だ新しき物語なることを、知るに足るべし。

上に云へる如く、物語と名づけられたる書、甚だ多く、尙此外にも、朝倉物語、交野少將物語、ねざめ物語、井手中將物語、梅壺少將物語、自から悔ゆる物語、あし火焚く屋の物語、ふせごの少將ものがたり等、源氏、狹衣、枕草子等に名は擧げられたれ

ぞと、青へどをつきての玉ふ。梶取、答へて申す。神ならねば、何わざをか仕う奉らん。風吹き波はげしけれども、神さへいたゞきまゝ落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求め玉ふ故なり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り玉へといふ。よき事なりとて、梶取の神きこしめせ。をぢなくこころ幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の筋ひとすぢをだに、動かし奉らじと。よごとを放ちて、たちゐ、なく〳〵よばひ玉ふ事、千度ばかり申たまふけにやあらむ。やう〳〵神なりやみ、すこし光りて、風は猶はやく吹く。梶取のいはく、これは龍のしわざにこそありけれ。この吹く風は、よき方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方へおもむきて、ふくなりといへども、大納言は、これをきゝ入れ

でたまひぬ。如何しけむ。はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもちありく。何れの方とも知らず。舟を海中にまかり入りぬべく、吹きまはして、波は舟に打かけつゝまき入れ、神は落ちかゝるやうに、ひらめきかゝるに、大納言はまどひて、まだかゝるわびしきめ見ず。如何ならむとするぞとのたまふ。梶取答へて申。こゝら舟にのりてまかりありくに、まだかくわびしき目を見ず。御船、海の底にいらずば、神落ちかゝりぬべし。若し幸に神のたすけあらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御もとに仕うまつりて、すゞろなる死にをすべかんめるかなと、梶取なく。大納言これをきゝて、のたまはく。船に乗りては、梶取の申事をこそ、高き山ともたのめ。などかく頼母しげなき事を申

りしかば、殿へもえまゐらざりし、玉の取りがたかりし事を知り玉へればなむ、勘當あらじとて、まゐりつると申。大納言、起きいで、のたまはく。汝等よく持て來ずなりぬ。龍はなるかみの類にこそありけれ。それが玉をとらむとて、そこらの人々の害せられむとしけり。まして龍をとらへたらましかば、又こともなく我は害せられなまし。よくとらへず止みにけり。かぐや姫てふ大盜人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに、今は通らじ。男ども、なありきそとて、家に少し殘りたりける物どもは、龍の玉をとらぬものどもに賜びつ。これを聞きて、離れ給ひしもとのうへは、腹をきりて笑ひ給ふ。糸をふかせ作りし家は、鳶鴉の巣に皆くひもていにけり。世界の人いひけるは、大

玉はず。三四日吹きて、吹きかへし寄せたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に、吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、いきつき臥し玉へり。ふねにある男ども、國につけたれば、國の司參うで訪ふにも、得起きあがり玉はで、船底に臥し玉へり。松原に御むしろをしきて、おろし奉る。その時にぞ。南海にあらざりけりとおもひて、からうじて、おき上り玉へるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝを二つ付けたるやうなり。これを見奉りてぞ、國の司もほゝゑみたる。國におほせ玉ひて、たごし作らせ玉ひて、やう／＼に擔はれ玉ひて、家に入り玉ひぬるを、いかでか聞きけむ。つかはしゝ男どもまゐり申やう。龍のくびの玉を、得とらざ

かれわかれて、橋を八つ渡せるによりてなん、八橋とはい
ひける。その澤のほとりの、木のかげにおり居て、かれいひ
喰ひけり。その澤に、かきつばた最とおもしろく、咲きたり
けり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふいつ
文字を、句のかみにすゑて、旅心を詠めといひければ、

唐ころも着つゝ馴れにし妻しあれば
はる／＼來ぬる旅しぞおもふ

とよめりければ、みな人、かれ飯のうへに、涙落して、ほとび
にけり。ゆき／＼て、駿河國うつの山に至りぬ、わが入らむ
とする道はいと暗う、蔦、かへでの葉繁りて、もの心細く、す
ゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。かゝる道
にもいかでおはしましつるといふに、見れば、見し人なり

件の大納言は、龍の首の玉やとりておはしたる。否さもあらず。みなまなこ二つに、すもゝのやうなる玉をそへて、いましたるといひければ、あな堪へがたといひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、たへがたとは、云ひはじめける。………

業平東に下る(伊勢物語)

むかし、男ありけり。その男、身を用なきものに思ひなして、都にはあらじ、東の方に、住むべきところ、求めむとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりして、いきけり。道しれる人、ひとりもなくて、まどひ行きけり。三河國、八ッ橋といふ處にいたりぬ。そこを八橋といふは、水のくもでにな

びあへるに、渡守はや船にのれ、日も暮れなんとすといふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、都に思ふ人、なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、嘴と足と赤きが、しぎの大きさなる、水の上にあそびつゝ、魚を食ふ。都には見えぬ鳥なり、わたし守に問ひければ、これなん都鳥といふをきゝて、

名にしおはゞいざこと問ん都鳥
わか思ふ人はありやなしやと。

とよめりければ、舟こぞりて泣にけり。

筒ゐつゝ（伊勢物語）

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出て遊びけるを、おとなになりにければ、男も女もはぢかは

けり。みやこに、其の人のもとにとて、文をかきてつく、

駿河なるうつの山べのうつゝにも

　夢にもひとにあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月（さつき）のつごもりに、雪いとしろうふれり。

時しらぬ山はふじのね、いつとてか

　かのこまだらに雪のふるらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を、二十ばかり、重ね上げたらむかたちして、なりは、しほじりのやうになんありける。なほ、ゆき〳〵て、武藏國と、下總の國との中に、いと大きなる河あり。それを隅田川といふ。その川のほとりに、群れゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも、來にけるかなと、わ

けしきもなくて暮るればいだしたてゝやりければ、男、異心(ことごころ)ありて、かゝるにやあらむと、おもひうたがひて、前栽の中にかくれ居て、彼の河内へいぬるがほにて、見れば、この女、いとようけさうして、うちながめて、

風ふけばおきつ白浪たつた山、
　夜半にや君がひとり超ゆらん。

とよみけるをきゝて、限りなく悲しと思ひて、河内へも、をさ／＼いかずなりにけり。さてまれ／＼、かの高安に行きて見れば、始こそ、心にくゝもつくりけれ。今は、うちとけて、髪をまき上げて、みづから、飯(いひ)かひをとりて、笥子(けこ)の器物に、盛りけるを見て、心憂がりて、いかずなりにければ、女大和の方を見やりて、

してありけれど、男はこの女をこそ得めと思ひ、女も此の男をこそと思ひつゝ、母のあはせむといふことをも、聞かでなむありける。

つゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけ、
　　をきにけらしな妹見ざる間に。

かへし、女

くらべこしふりわけ髮も肩をぎぬ、
　　君ならずして誰かあぐべき。

かく、いひ〳〵て、遂に本意の如くあひにけり。さて、としごろ經る程に、女親なくたよりなくなるまゝに、諸共に、いふかひなくてあらむやとて、河内國、高安の郡に、いき通ふ所、いできにけり。さりけれど、このもとの妻、あしと思へる

橘のよしとしといひける人、内におはしましけるとき、殿上に侍ひて、御ぐしおろし玉ひければ、やがて、御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られ玉はで、ありき玉ひける御ともに、これなむたくれ奉らで侍ひける。かゝる御ありき玉ふ、いとあしき事なりとて、内より少將、中將これかれ、さふらへとて、奉らせ玉ひけれど、たがひつゝありき玉ふ。和泉國にいたり玉ひて、日根といふ所ま、たれしまゝ夜あり。いと心細う、かすかにて、たはします事を思ひて、いとかなしかりけり。さて日根といふ事を、歌によめと仰せ言ありければ、このよしとし大とく

故鄕のたびねの夢に見えつるは、

怨みやすらんまたと訪はねば。

君かあたり見つゝををらむ生駒山、
　雲なかくしそ雨はふるとも。
といひて見いだしたるまゝ、からうじて、大和人、來むといひ
さりければ、喜びて待つに、たび〳〵すぎまければ、
君こむといひし夜ごとにすぎぬれば、
　たのまぬものゝこひつゝぞふる。
といひけれど、男すまずなりにけり。

故鄕のたびねの夢（大和物語）

帝（亭子院）おりゐ玉ひて、又の年の秋、御ぐしおろし玉ひて、ところ
〳〵山ぶみしたまひて、おこなひ玉ひけり。備前の掾にて、

ぬ。この人の志の愚かならぬ、何れにもあふまじけれど、此れも彼れも、月日を經て、家のかどに立ちて、萬にこゝろざしも見えければ、しわびぬ。これよりも、かれよりも、同じやうにおこするものども、とりも入れねど、いろ／＼に持ちて立てり。おやありて、かく見苦しく年月をへて、人のなげきを、徒におふもいとほし。ひとりにあひなば、いまひとりが思ひは、絶えなむといふに、女、こゝにもさ思ふに、人のこゝろざしの同じやうなるになむ、思ひわづらひぬる。さらば、如何すべきといふに、そのかはいくたの川の面に、ひらはりをうちてゐにけり、かゝれば、そのよばひ人どもを、呼びにやりて、親のいふやう、たれもみこゝろざしの同じやうなれば、此の幼きものなむ、思ひわづらひて侍る。今日如

とありけるに、皆人なきて、え詠まずなりにけり。その名をなん、寛蓮大とくといひて、後までさふらひける。

津の國の乙女塚(大和物語)

むかし、津の國に住む女ありけり。それを、よばふ男二人なんありける。某の國に住む男、姓は、うばらになんありける。今一人は、和泉國の人になんありける。姓は、ちぬとなんいひける。かくて、其の男どもよはひ、顔かたち、人のほど、たゞ同じばかりになむありける。心ざしのまさらむにこそは、あはれと、れもふまゝ、こゝろざしの程、たゞ同じやうなり。暮るれば、諸共に來あひぬ。物おこすれば、唯同じやうまおこす。いづれ、まされりといふべくもあらず。女、思ひわづらひ

ばふ男二人、やがて同じ處に落ち入りぬ。ひとりは、足をとらへ、今一人は、手をとらへて、死にけり。そのかミ、親甚じく騷ぎて、取り上げて、泣きのゝしりて、葬りす。男どもの親も來にけり。此の女の塚の傍ま、又塚どもをつくりて、ほりうづむ時に、津の國の男の親のいふやう、同じ國の男こそ、同じ所にはせめ。異國の人のいかで、此の國の土をばえ貸すべきといひて、妨くる時に、和泉の方の親、和泉國の土を舟に運びて、こゝに持て來てなむ、終にうづみてける。されば、女の墓をば中にて、左右になん、男の塚ども今もあんなる。

---

一條天皇嘗て宣はく、朕、不德なりといへども、唯人を得るの

何にまれ、此の事を定めてむ。あるは、遠き所よりいまする人あり。あるは、こゝながらそのいたつき限りなし。これもかれも、いとほしき業なりといふ時に、いとかしこく喜びあへり。申さむとおもひ玉ふるやうは、此の川は、浮きて侍ふ水鳥を射たまへ、其れを射あて玉へらん人に奉らむといふ時は、いとよき事なりといひて、射る程に、ひとりは、かしらの方を射つ。今一人は、尾の方を射つ。何れといふべくもあらぬは、女思ひわづらひて、

住わびぬわが身なげてん津の國の、
　生田の川は名のみなりけり。

とよみて、此のひらばりは、川にのぞきて、しさりければ、つぶりと落ち入りぬ。おや、あわて騒ぎのゝしる程に、此のよ

故實に通じ、且つ、最も文詞を巧みにせり。夫、宣孝に早く後れて、寡居したりしが、時に一條天皇の中宮彰子、藤原道長の女、上東門院と號す。婦人の才學あるものを撰びて、左右に侍らしめ、文詞の御遊ありしかば、式部またしば〳〵伺候して、御覺えめでたかりき。或はいふ、源語五十四帖も、村上天皇の皇女、大齋院、選子內親王が、中宮に徒然慰むべき、めづらしき草子や侍ると、たづね給ひしとき。中宮は宇津保、竹取などは目馴れ給ふべければ、新らしく作りて上らんとおほし、さて、式部に命じて、綴らしめ給ひしものなりと。然れども、此說に就きては、古來疑義多し。學者多くは、宮仕への前、寡居せしあひだの作ならんといへり。又傳ふ、此書成りしとき、一條天皇、叡覽ありて、是れ能く日本紀を讀みたる者の、筆なりと賞し給

一事は、敢て延喜天暦の世に讓らずと。當時源經信、藤原公任、源俊賢、藤原行成は四納言と稱せられ、閨閣の秀才には、清少納言、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔の流あり。各文學を以て鳴る。就中、紫式部を以て第一となす。是れ實に源氏物語の作者なり。

紫式部は、右衛門權佐藤原宣孝の妻なり。其父、式部丞藤原爲時といふは、菅三品の門に遊びて、文章生より起こり、越前守となりし學者なり。式部の兄惟規。伯父、太皇太后宮亮爲賴等、皆歌を以て名あり。式部、性聰敏にして、いとけなき時より、兄の書を讀むを聽き、之を暗記せしことありといふ。父爲時甚だ之を愛し、常に「口惜しう、男子にもたぬこそ、幸なかりけれ。」と云ひき。年、稍、長じて、博く和漢の書史を涉獵し、朝廷の典禮

摸範たるのみならず、また德行を以て、閨閤の龜鑑たるべきものなるべし。或る書に、式部を評して、古往今來唯一人の婦人なりといひしも、過言にはあらざるべし。

紫式部の本名は傳はらず。紫の名は、源語の中に、女主人公紫の上のことを寫しゝところ、特に秀れたるがゆゑに、始め藤式部と云ひしを。今の名に更められしに基くといひ、或は、藤式部の名は、玄妙ならざるにより、其花の色をとりて、紫の字に換へしなりといひ、或は一說に、式部は、一條天皇の乳母の子なり。上東門院に仕へしめられしとき、天皇これは我がゆかりの者なり。あはれとおぼしめせと、申させ給ひしといへるに據り、さて、武藏野の故事に基きて、紫式部と名づけられたりといふ。諸說紛々として、孰れか是なるをしらず。

ひしかば、式部は、これより、日本紀の局の名を得しと。其才華かくの如し。然れども、其著はすところの日記を觀るに、思はるゝに似ず、順良謹愼にして、所長に矜らざりしことを知る。又貞淑にして、節操の譽高く、御堂關白道長が、其才色を悅びて、之を挑みしときも、遂に從はざりき。此時、道長は、上東門院の父を以て、威權極めて盛んなりしに、式部の其挑みを拒みしこと、男子も愧づる色有るべし。古來の俗傳に、式部は道長の妾となれりといひ、又若かりしときは、西宮左大臣高明と通じたりといふの非なることは、古人既に之を辨じて、また遺すところなし。嗚呼、當時、淫奔浮薄の空氣天地に滿ち、諸姬嬪は、妓流を去ること遠からざりし中に於て、毅然として、獨り高かりしをおもへば、紫式部は、啻に文辭を以て、千歲の

# 源氏巻次第文字鏁

源氏の勝れてやさしきハ、墓なく消えし桐壺よ餘所にて見えし帚木ハ、我から音になく空蟬や、休らふ道のゆふがほは、若紫のいろことに匂ふ末摘む花の香に、錦と見えし紅葉の賀かぜをいとひし花の宴むすびかけたる葵草さか木のえだふ置く霜は、花散る里のほとゝぎす須磨のうらみま沈ミまし、忍びてつさふ明石潟たのめし末のみをつくししげき蓬生露ふかミ、水に關屋のかげうつし、しらぬふしなる繪合や宿にたえせぬまつかぜも、うのうき空の薄雲よ世を朝顔のはなのつゆゆかり思ひし乙女子が、かけつゝしのぶ玉蔓らうたき春の初子の日、ひらくる花ま舞ふ蝴蝶ふりきはたるの思こそ、そのなつかしき常夏

源氏物語は、源氏の君といふ容貌極めて都雅にして、情に富み、諸藝に通じたる皇子を以て、主人公とし、配するに紫の上といへる絶世の佳人を以てして、其履歴を骨子とし、無數の人物、複雜なる事件を、之に纏ひたるものあり。叙事の時代は、醍醐、朱雀、村上の三朝に亘るととなへ、且つ、物語中の主要なる人物は、多少準據する處ありと稱せらる。一部五十四帖を以て成る。世に源氏卷の次第文字鎖といふものあり。何れの時代に、何人の手に成りしかをしらざれども、總て文字鎖といふものは、平安朝の末より、室町時代まで行はれし、文章上の一種の遊戲なり。されば、茲に之を掲げて、五十四帖の名稱をしめし、併せて文字鎖の一例とせん。文中圏點を施したる者は、即ち五十四帖の名目なり。

右五十四帖のうち、雲隠れの巻のみは、名ありて文なし。蓋し、此巻には、源氏の君の薨去を、暗にしめしたるものなるべしといふ。されば、其れより以下は、多くは、其子、薰大將の事に係り、特に橋姫より、結尾の夢の浮はしに至るまでを、宇治十帖ととなへ、以て本文と分つといふ。

此物語、古來盛んに弄ばれ、我國文學上の至寶として貴ばれしかば、之が註釋を下し、評論を試みたる書、いと多し、素寂法師の紫明抄、一條兼良の花鳥餘情、牡丹花肖柏の弄花抄、西三條公條の細流抄、西三條實澄の明星抄、九條植通の孟津抄、紹巴の源氏紹巴抄、中院通勝の岷江入楚、能登永閑の萬水一露、熊澤蕃山の源氏外傳、僧契沖の源語拾遺等其重なるものにして、此他擧げて數ふべからず。就中、解釋簡單にして其要を

ややり水をゞしかゝり火の、野分の風のふきまよひ、日かげ曇らぬ御幸まれ、花もやつるゝ藤ばかま、まきの杜は忘れどを、をる梅か枝は匂ふやと、とけにしふぢの裏はかな。なにとて摘し若菜ども。もりの栢木ならの葉よ。横ぶゑの音はおもおろや宿のすゞむし聲も憂く、くらき夕霧秋ふかみ、御法をさとるいその蛋、まぼろしの世の程もなく雲かくれにし夜半の月。聞く名も匂ふ兵部卿、うつろふ紅梅色ふかし。忍ぶふしある竹河や、やそ宇治川の橋姫の、これか れ果てにし椎が本。ともに結びし総角は、春を忘れぬさわらびも、もとの色なき宿木や、やどりとめきし東屋の、のちの名もうき舟の道。契りあだなるかげろふを、己がすさびの手習は、はてぞゆかしき夢の浮はし。

菩提を示すといひ、儒者は、莊子史記に基き、一字の褒貶は春秋に則り、以て仁義五常を諭すと説く。甚しきに至りては、式部後に妄語の罪障懺悔のために、般若一部六百卷を自書して、石山寺に奉納したりといひ、安居法印聖覺なるものは、源氏物語表白なるものの一卷を作りて、「南無西方極樂彌陀善逝、ねがはくは、狂言綺語のあやまりを翻して、紫式部が六趣苦患を救ひたまへ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の縁として、これを弄ばん人を安養淨刹に迎ひたまへ。」とさへ云へり。然れども、平安朝の形勢を詳にしたる人は、余輩が前篇にいへる如く、佛教と漢學との影響、極めて盛んなる時にあらはれ、しかも漢學に通じ、佛典にも明かなりし紫式部其人の如き、名家の手になりし大作なれば、其痕跡の昭々たるを怪

得、初學の徒ェ便なるは、北村季吟の湖月抄六十卷なり。此書の事は、尙第六篇江戶時代の文學の條下に云ふべし。萩原廣道の源氏評釋は、未完の書なりといへども、湖月抄よりは更によし。又、式部が物語に就きて、懷きし見解とおぼしきもの、及び其文學上の技倆は、本居宣長の玉の小櫛、之を詳かにし、其才德兼備の閨秀たりしことは、安藤爲章の紫女七論ェ辨じたり。源語を繙くものは、必ず少くとも、此四書を參看せざるべからず。

かくの如く、此物語を解釋し、評論するもの極めて多き中には、佛者は、此書は徹頭徹尾、佛典に據りて作られたるものにして、天台六十卷に擬して、六十帖ェ作り成し、生老病死、有爲轉變を說き、尙、進んでは世間常住壞空の法文をたて、煩惱即

處に件はざるなきは、假名文字なる利器を有するに由り、又其學識の深邃なるに由るべしとはいへ、如何にも、其高妙なるに驚かるゝなり。其妖艶美麗の筆は、身外の森羅萬象を抽きて、精細遺すところなく、山青水明の景にも、讀者をして、足其境を踏むの想あらしめ、春花秋月にも、目その物をこるが如き感あらしむるのみならず、婉曲縝密の文、能く喜怒哀樂の情は更なり、幽玄深遠なる思想、複雜摸捉しがたき想像をも寫し出して、明鏡に向ひ、炬火を觀るが如くならしむ。殊に、かの雨夜の品定めの一段の如きは、議論体の雅文の模範として、人口に膾炙する處にして、其女子の品評を題目とし、飽くまで思ひを漲へ、考を凝らして、縱横錯綜せる事柄を論じ、短氣の人なりせば、たゞ〳〵一刀兩斷の途に出づべきを、婉

まざるべし。安ぞ、專ら漢籍にのみ基くといひ、佛書にのみ據りて作れりといはんや。古の國學者の中には、往々かゝる拘泥說を墨守する者、少なからざりしなり。

源語の文章の妙は、其思想結構の巧みと相合し、著書の上乘として、稱へられつべき價値あるものなる事、世既に定論あり。今ことさらに言ふを待たず。されば、漢學のみ行はれて、耳を彼土ま尊くし、目を我國に卑うせし人々も、此書を讀みては、必ず言ふべからざる妙所を見出し、遂に或る點ま於ては、漢文も企て及ぶべきまあらずと思はしめし事常なりき。殊に、今日に於ては、西洋各國の文學と對照せられて、尚一層の光輝を發揚し、我文學の面目を施しゝは疑ふべからず。其筆の自由自在にして、意の到る處に從はざることなく、情の赴く

の薄き事とは、此種の文体一般の弱点なるが上ゝ、特に婦人の手になりしものなれば、到底之を掩ふこと能はざるべし。

余輩は、此物語の文例を撰ぶに當りて、他の書には例(ためし)なき困難を覺えたり。蓋し、全篇處として妙ならざるなければ、殊に其一部分を拔萃するは、猶瑩々たる白玉を碎きて、其一片を示すが如く、又金殿玉樓の中より、一斑の裝飾物を持ち來りて、其全豹を想はしむるが如くなればなり。然れども、古人の特に秀でたりといひし處と、余輩の絶妙と覺えしものを、此章の末に掲ぐべし。世に傳ふ、古、藤原定家は、明石の卷の

「三昧堂近くて、かねの聲、松の風にひゞきあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前栽どもゝ、虫の聲をつくしたり。こゝかしこの有りさまなど

々幾千言を重ぬるに至るとも、遺す處なく、叮嚀に之を分疏し讀者をして、其坐にありて、親しく其評論を聽くが如くならしめ讀ミ去り讀ミ來りて、無限の趣味あるを覺えしむ。然れども其文は、猶温厚謹愼にして貞靜なる其人の如く、到る處、其鋭利なる筆鋒を裹むを見る、玉の小櫛にも「女の學問だてして、賢しだち、さえがるをばいみじう憎みて、自からも、人にしか思はれじと、深く用意したるさま處々に見ゆ。」といへるが如し。概していへば、紫式部の文は、艶麗緻密にして、其特異の點は、温厚沈着なるに在り。逸氣奔放の一点に至りては或は枕草紙に讓る處あるべし。而して、一篇の中、文章の抑揚、起伏、照應等の用意を、周密にせるものは、王朝の文、一としてこの書の上に出づるものなし。但し平調に流れ易きと、氣力

ぎず、人物、景色、情況、事件の配置、權衡、前後相照應して、また著るしき缺點なきは、余輩の信ずる處なり。悲哀なる情況を寫せる筆力は、桐壺、夕顔等の巻に於て、讀者をして覺えず暗涙を催さしめ、其滑稽（コメヂーク）を寫すところは、紅葉の賀の巻等に於て、唖然として笑はしむ。特に其人物をして、各、特質を有せしめて、源氏の君の終始閑雅にして、情に富みたる。紫の上の婉柔にして、飽くまで上臈めきたる等。皆劃然として、分別し得べし。後世の作者の、全一人物をして、交る〳〵異様の假面を蒙り、話説中にあらはれしむるが如き、破綻には陥らざりしなり。

さて此書は、式部が、當時平安城裡の實相を寫し出でたるものなれば、完全なるわが寫實流小説の、最も古くして且つ最も巧となるものなるべし。然れども、式部は、寫實より入りて、

御覧ぜ。嬢住ませたる方は、心、殊に磨きて、月入れたる槇の戸口、けしきばかり推しあけたり。……」

云々とある一節を、一部中第一の語なりといはれたりと。されバ、余輩か揭げたる數頁は、或は、源語の文の一斑を示すに足らん、

式部の和歌に巧みなりしこと、源語一部中に、載せたるものをもて知るべきなり。梨壺五歌仙の中、恐らくは、紫式部の右ふ出づるものなからん。其名歌の勅撰集に入れるもの、亦多し。（梨壺五歌仙の事後よ出づ）

源語を小說として觀るときは、如何なる價値あるものかは、余輩は、玆に詳論せざるべし。但し、其富贍なる想像により、充分意匠を凝らして、一篇の脚色を設け、ちかも奇思、妙想に過

理想的の事多きが故にこそ、遂は源氏の君と、藤壺の女御との密通の如き、云ふに忍びざる事をも、書きつくるは至りたるなれ。抑、古來源語を論ずる者、之を罵る人は、其事柄を以て其文辭をさへ取らず、之を賞する人は、其長所は眩惑せられて、其缺點短所をも曲庇する傾あり。殊に、佛書に引きつけ、漢籍に付會して論ずるものは、源語を以て、善を勸め惡をこらし、好色を誡むる道德書なりといひ、甚しきに至りては、此書が、延喜の朝を心あてとして書き出でしゝは、上六國史に繼がんが爲なりなどといふ。妄言も、こゝに至りて極まれり。本居宣長の玉の小櫛の如きは、此書は關係ある從來の諸書を是非褒貶して、大に正確なるものなれば、かの安藤爲章の紫女七論だに尙免れざりし源語ハ勸懲の書なりといふ見解

理想の境に進みたるものある事を知らざるべからず。既に前に云ひし如く、當時の上流社會は優柔懦弱にして、詩歌、管絃を弄び、花鳥風月に戯るゝ外は、唯癡嬌を事とせしのみ。源語も其材料を、これ等の眞像より取りしゝ相違なしといへど、も、もと作り物語なるが故に、よき人としたる人の上の事は、何事もめでたからざるはなく、あしき方に伴ふことは、一として悪しからざるはなく、善き。は。極。め。て。善。く。悪。し。き。は。極。め。て。悪。し。く。描き出せるが故に、其人物は、概ね所謂理想的の人物なるのみ。事實を寫してもまた然り。理想的とは、事物の十全なる程度を、示したるものにして、到底この世の中には、看當り得ざるも、若しあらば、當に然るべからんものを云ふ。源氏の君、紫の上、孰れか理想的の才子、又は佳人ならざるべき。

出で、そのあひだ〻、深き哀を見せたるものなり。」と說きたるは、曲庇にあらずして何ぞ、總て、美術上の製作物は、深意(ミーニング)あるを要す。深。意。なき時は、其製作物、死物たるを免れず。死物と雖も、其美術品たるには妨けなけれど、美術品の上乘とはいひがたきなり。而して其深意なるものは、必ず善(グード)と美(ビユーチー)と眞(ツルース)と。この三觀念の齊一(ハーモニー)を標準とし、之に接近せんことを求むるものならざるべからず。抑も、純善、純美、純眞の齊一は、之を人間世界には求むべからずと雖も、この理想を標準と定め、其方角に向ひて、進步せんことを務むるは、日常人々の、當に口に言ふべく、又當ま實際に行ふべき所なり。特に、美術上の製作物の如く、動もすれば、人をして柔懦驕奢に流れしめ易きものに於ては、特に意を之に注かざるべからず。惜い哉、昔人は

を排斥して、此書ハ、單に社會の眞相を、寫し出だせるまでのものありといひき。是れ、さすがに宣長の卓見なりといふべし。然れども、尙まゝ曲庇の跡の、昭々として掩ふべからざるを見る。蓋し淫風は、當時の習ひなれバ、理想的の淫風を示さんには、源氏と藤壺との如き、甚しきことをも、寫し出でざるべからず。是れ實ハ、心理小說家の忌む處なりとす。然るに宣長ハ、これをしも差支なし。それ物語は、物のあはれを知るを旨とす。源氏も不德不品行あり。然れども、是れ物のあはれを知るより起れることなりとして、「世ハすぐれてよき人どちにて、物の哀れの忍び難き事もあればなり」といひ、遂に、「戀の中にも、さやうのこりなく、あながちなる筋には、今ひときハ、物の哀の深きことある故にことさらに道ならぬ戀をも、書き

下の風俗壞亂して、「名譽とは、婦人の貞操といへると等しく、單に虛名なるのみ、德とは、唯愚人を嚇すの語に過ぎず」といふ有樣となりしかば、其文學も卑陋を極め、貴婦人に向ひて、卿はチャールス時代の某々の書を讀み玉ひしかといへば、顏をあからめて、話頭を他に轉ぜしめ、又、或る人をして、當時の書を讀むは、時と金とを棄てゝ、不德を學ぶものなりと云はしめしを思ふて、屢なり。

源氏物語は、名にしおふ大篇なるが故に、記事、敍事、議論の文等、中古文章の種類、大抵その中に備はれるのみならず、對話問荅の條最も多きにより、平安朝の通用語の如何なりしかを、推測し得るの便あり。抑も、源語の文章は、純粹なる言文一致にハ非ざるべきも、其對話問荅の條は、蓋し其實際を去る

いまだ此考なく、唯小說は、人を娛ましむるものなる事をのミおもりて、人を誨ゆる者なることをばしらざりけん。紫式部の如き、其人物は、殆ど善、眞、美を兼有すと雖も、其著書は、即ち文學上の至寶にてありながら、動もすれば、誨淫の書なりと譏られ、敗德亂倫の文なりと斥けらる。遺憾の極といふべし。顧みて惟ふに、婦人は多く謹愼なるが故に、不德の行は、成るべく之を隱庇すること、古今東西の婦人作者に見る處なり。然るふ紫式部にして、尙源語をかきしを見れば、蓋し當時の風俗、如何なりしかを察するに足るべし。且つ、源氏と藤壺との關係の如き、もし之を實際にあらしめ、さて源氏が臣下の人なりしならば、これ畏くも、皇家の御系統に關する事にあらずや。余輩之を考ふれば、英王チャールス第二世の時代に、上

趣向文章、共に母の源語ゝ摸したるがごとしと雖も、遠く之には及ばぞ。

---

朱雀院より、姫宮の事を、紫の上ゝのたまひ遣はされたる文(源氏物語若菜の卷)

稚き人の心地なきさまにて、うつろひものすらんを、罪なくおぼし許して、後見たまへ。たづね玉ふべき故もやあらん。「そむきましし此世にのこる心こそ、いる山道のほだしなりけれ」。やみをえはるけく、きこゆるもをこかましや。

源氏の君、須磨にうつろはんとし玉ふ時、東宮に侍ふ王命婦のもとゝ、(源氏須磨の卷)

こと、甚だ遠からざるべし。殊に一篇の中、處々に散見する往復文あるを以て、當時消息体の文章の、一斑を窺ひ得べし。はじめは、漢學の盛んなるにつれて、男子の往復文、ことに表ざちての書面は、專ら漢文のみなりしが、假名の用ひ盆開くるに從ひ、從來婦人の間にのみ、行はれたりし假名文の、次第に男子の間にも通用するに至りしと見ゆ。茲に、源語より一二の例を掲け、且つ參照に供へんため、落くぼよりも、一例を引用せり。

紫式部、女子あり。賢子といふ。太宰大貳高階成章に嫁し、のち後一條天皇の乳母となりて、三位に叙せられしにより、大貳三位と稱ふ。母に似て、文詞に巧みなりしかば、狹衣八卷を作れり。狹衣大將なるものを設け、其物語を綴りしものにして、

とまあらば、今日、必すたちよらせ玉へ聞えさすべきことと
あり。

### 源氏物語の例

#### 桐壺更衣の卒去

そのとしの夏、御息所はかなきことゝちにわづらひて、まかでなんとし玉ふを、暇さらに許させ玉はず。年頃つねのあつしさになり玉へれば、御めなれて、猶しばしこゝろみよとのみ、のたまはするに、日々に重り玉ひて、たゞ五六日の程に、いとよはうなれば、母君、なく／＼奏して、まかでさせたてまつり玉ふ。かゝるをりにも、あるまじき恥もこそと、心づかひして、御子をば留め奉りて、忍びてぞ出玉ふ。限り

今日なん都離れ侍る。また參らずなりぬるなん、數多の憂にまさりて、思ひ玉へられ侍る。よろづおしはかりとりけいし玉へ。「いつかまた春の都の花を見ん。時うしなへる山かつにして」

王命婦のかへし

御かへりは、さらに聞えさせやり侍らぞ。御前ま啓し侍りぬ。心細げにおぼしめしたる御氣色も、いとじうなん「咲きてとく、散るはうけれど、ゆく春は、花の都を、立ちかへり見よ」。時しあらば、

衛門督より中納言どのに、(落窪物語)

きのふ、越前守してきこえし御消息は、申されけんや。御い

見奉りて、

限りとてわかるゝ道のかなしきに、

生かまほしきは命なりけり。

いとかく思ふ玉ひましかばと、いきも絶えつゝ、聞えまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを、御らむじ果てむとおぼしめすに、今日、始じむべき修法ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵よりと聞えいそがせば、わりなくおぼしながら、まかでさせ玉ひつ。御胸のみ、つとふたがりて、つゆまどろまれず。あかしかねさせ玉ふ。御使の往きかふほどもなきに、なほいぶせさを、かぎりなくの玉はせつるを、夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはて玉ひぬるとて、泣きさわ

あれば、さのみもえ止めさせ玉はず、御覽じだにおくらぬおぼつかなさを、いふかたなくおぼさる。いと匂ひやかに、うつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いと哀れと、物を思ひしみながら、言にいでゝも聞えやらず、あるかなきかに、消え入りつゝものし玉ふを、御らむずるまゝ、來しかた行末おぼしめされず。よろづのことを、なく〳〵契りのたまはすれど、御いらへもえ聞え玉はず。まことなども、いとたゆげまて、いとゞなよ〳〵と、われかの景色にて臥したれば、いかさまにかと、おぼしまどはる。手車の宣旨などのたまはせても、又入らせ玉ひては、更にゐるさせ玉はず。限あらむ道にも、後くれ先だゝじと、契らせ玉ひけるを、さりとも、打棄てゝはえ行きやらじとの玉はするを、女もいといみじと、

むなしき御からをみる〳〵、猶おはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり玉はむを見さてまつりて、今は無き人とひたぶるに思ひなりなむと、さかしうの玉ひつれど、くるまゝより落ぬべう、まどひ玉へば、さは思ひつかしと、人々もてこづらひ聞ゆ。内より御使あり。三位の位贈り玉ふよし、勅使きて、その宣命よむなむ、悲しきことなりける女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜うおぼさるれば、いまひときざみの位をだにと、贈らせ玉ふなりける。(中略)はかなく日頃すぎて、後の業などまも、おまかに吊はせたまふ。(中略)野分たちて、俄にはだ寒き夕暮のほど、常よりもおぼしいづることおほくて、靫負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ玉ふて、やが

げば、御使もいとあへなくて、かへりまゐりぬ。きこしめす御心まどひ、何事もおぼしめしわかれず。籠りおはします。御子はかくても、いと御覧ぜまほしけれど、かゝる程よ、さぶらひ玉ふ例なきことなれば、まかで玉ひなんとす。なに事かあらむ共おもほしたゝず。侍ふ人々の泣きまどひ、上も御涙の隙なくながれおはしますを、あやしとみたてまつり玉へるを、よろしきことにだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、まして、哀にいふかひなし。かぎりあれば、例のさほうにをさめ奉るを、母北の方、おなじ煙にものぼりなむと、なきこがれ玉ひて、御おくりの女房の車に、したひのり玉ひて、愛宕といふ所に、いといかめしう、其さほうしたるに、おはし着きたる心地、如何ばかりかはありけむ。

て、げにえたふまじくない玉ふ。…………………………

## 雨夜の物語

つれ〴〵と降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上にも。をさ〳〵人少なに、御とのゐ所も、例よりはのどかなる心地するに、おほとなぶらちかくて、ふみどもなど見玉ふついでに、近き御厨子なる、色々のかみなる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、さりぬべき少しは見せん、かたはなるべきもこそと、ゆるし玉はねば、その打解けて、かたはら痛しとおぼされむこそゆかしけれ。をしなべたる大方のは、数ならねど、程々につけて書きかはしつゝも見侍りなむ。おのがじゝ怨めしきをり〳〵、まちがほならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめと怨すれど、やむこ

て眺めおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせ玉ひしに、心異ある物のねをかきならし、はかなく聞え出る言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、面影につと添ひておぼさるゝも、やみのうつゝには尙劣りけり。命婦かしこにまかでつきて、門ひきいるゝより、けはひ哀なり。やもめ住なれど、人ひとりの御かしづきにと、かくつくろひたてゝ、めやすきほどにて過ぐし玉へるを、やみにくれて臥ししづみ玉へるほどゝ、草もたかくなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入たる、南おもてにおろして、母君もとみに得ものもの玉はず、今までとまり侍るがいとうきを、かゝる御使の、蓬生の露わけいり玉ふにつけても、はづかしうなむと

書き、をりふしの答へ心えて、うちしなどばかりは、ぞいふむに宜しきも、多かりとみ玉ふれど、そも誠に其のかたを取いでむ撰びま、必ず淺るまどきはいとかたしや。我心得たる事ばかりを、おのがおし心をやりて、人をば貶しめなど、かたはら痛き事おほかり。親なきたちそひもてあがめて、生い先きこもれる窓の中なる程は、たゞ、片かどを聞き傳へて、心を動す事もあめり。容をかしくうちおほどき、わかやかにて、まぎるゝ事なき程、はかなきすさびをも、人まねふ心を入るゝ事もあるに、おのづから、一つ故づけてしいづる事もあり。見る人、おくれたる方をばいひかくし、さてありぬべきかたをばつくろひて、まねび出すに、それ然あらじと、そらにいかゞは、押量り思ひくたさむ。誠かと見も

なくせちまゝ隠し玉ふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、うちおき散し玉ふべくもあらず。深くとりかくし玉ふべかめれば、是は二のまちの心やすきなるべし。かたはしづゝ見るに、かくさま〴〵なるものどもこそ侍けれとて、心あてまゝ、それかかれかなど問ふ中に、いひあつるもあり。もてはなれたる事をも、思ひ寄せて疑ふもをかしとおぼせど、言少なにて、とかくまぎらはしつゝ、とりかくし玉ひつ。足下(そと)にこそおほくつどへ玉ふらめ。少しみばや。さてなむ、この厨子も、心よく開くべきとのたまへば、御覧じ所あらむこそ、かたく侍らめなど聞え玉ふついでま、女の是はしもと、難つくまじきは、かたくもある哉と、やゝ〳〵なむ見玉へしる。たゞ、うはべばかりの情(なさけ)にて走り

づれを三の品におきてか分くべき。もと品高くむまれながら、身は沈み、位みじかくて、人けなき。又、なを人の、上達部などまでおりのぼりたる、我れ顔にて家のうちをかざり、人に劣らじとおもへる、そのけぢめをば、いかゞ分くべきと、問ひ玉ふ程に、左の馬の頭藤式部のぜう御物忌に籠らむとて、参れり。世のすきものにて、ものよくいひとれるを、中將まちとりて、このしな〳〵をこきまへさだめあらそふ。…………………

## 陋巷の夕顔

きりかけだつものに、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひかゝれるに、白き花ぞおのれ獨ゑみの眉ひらけたる。をちかた人にもの申すと、ひとりごち玉ふを、御隨身つ

て行くまゝ見劣りせぬやうはなくなむあるべきと、うめきたるけしきも恥しげなれば、いと、なべてはあらねど、我もおぼしあはする事やあらむ、うちほゝゑみて、其のかたぞもなき人は、あらむやとの玉へば、いと、さばかりならむあたりには、誰かは、すかされ寄り侍らむ。とるかたなく口惜しききはと、優なりとおぼゆばかり、すぐれたるとは、數ひとしくこそ侍らめ、人の品たかく生れぬれば、人まもてかしづかれて、かくるゝ事もおほく、自然まゝ、其のけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々おのがじゝのたてたる趣も見えて、わかるべき事かた〴〵多かるべき。下のきざみといふきはゝまなれば、ことゝ耳たゝずかしとて、いと隈なげなる氣色なるもゆかしくて、その品々や如何ま。い

日もいと長きに、つれ〴〵なれば、夕ぐれのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとにたちいで玉ふ。人々は歸し玉ひて、惟光ばかり御供にて、のぞきたまへば、たゞかの西面にしも、持佛すゑ奉りて、行ふ尼ありけり。簾少しあげて、花たてまつるめり。中の柱によりゐて、脇息の上に、經を置きて、いとなやましげに誦みゐたる尼君、たゞ人と見えず、四十あまりにていと白くあてゝ、瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髮のうつくしげにそがれたるすゑも、なか〳〵長きよりも、こよなう今めかしきものかなと、哀に見玉ふ。清げなるおとな二人ばかり、さてはこらはべ出で入りあそぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、白ききぬ、山吹などのなれたる着て走り來たる女ご、あま

いゐて、かの白く咲けるをなむ、夕顔と申侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲き侍りけると申。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、此面彼面、あやしう、打よろぼいて、むね〳〵しからぬ軒のつまなどに、はひまつはれるを、口惜しの花の契りや、一ふさ折りて參れとの玉へば、この押しあけたる戸に入りてをる。流石にされたるやり戸口に、黄なるすゞしのひとへ袴、長く着なしたる女の童の、をかしげなる出で來てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、これにおきて參らせよ。枝もなさけなげなめる花をとて、とらせたれば、門あけて惟光の朝臣の出できたるして奉らす。……………………

東山にて、源氏君始めて紫の上を見る。

いふかひなう物し玉ふかな。おのがかく今日あすになりぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀したひ玉ふ程よ、罪うるをぞと常にきこゆるを、心憂くとて、此方(コチ)やといへば、つい居たりづらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、びわけなく、かいやりたる額つき、かんざしいみじううつくし。ねびゆかむ様ゆかしき人かなと、目とまり玉ふ。さるは、限なう心を盡くし聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるゝなりけりと思ふにも、涙ぞおつる。尼君、髪をかき撫でつゝ、けづるをもうるさがり玉へど、をかしの御髪(グシ)や。いとはかなうものし玉ふこそ、哀にうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを、故(コ)姫君は、十二にて殿に後れ玉ひし程、いみじう、ものは思ひ

た見えつるこどもに似るべうもあらず。いみじう生先(おひ)みえて、美しげなる形なり。髮は扇をひろげたるやうに、ゆら〳〵として、顏はいと赤くすりなして立てり。なにごとぞや。童べと腹だち玉へるかとて、尼君の見あげたるに、少しおぼえたる所あれば、子なめりと見玉ふ。雀の子を、いぬきが逃がしつる。ふせ籠(ご)の中に、こめたりつる者をとて、いと口惜しとおもへり。この居たるおとな、例の心なしの、かかるわざをして、さいなまるゝこそ、いと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やう〳〵なりつるものを、烏などもこそみつくれとて、立ちて行く。髮ゆるらかにいとながく、めやすき人なめり。少納言のめのとゝぞ、いふめるは、この子の後見なるべし。尼君いで、あなをさなや。

方に、源氏の中將の、瘧病(ワラハヤミ)まじなひにものしたまひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び玉ひければ、えしり侍らで、此處に侍りながら、御とぶらひにも、まうでざりけりとの玉へば、あないみじや。いとあやしきさまを、人やみつらむと、簾おろしつ。此世にのゝしり玉ふ光源氏、かゝるついでに見奉り玉はんや。世をすてたる法師の心地にも、いみじう、世の憂わすれ、齡のぶる人の御ありさまなり。いで、御消息きこえむとて、立つ音すれば、かへり玉ひぬ、

月夜彈琴

のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれるも、住なれ玉ひし故鄉の池水に、思ひまがへられ玉ふに、いはん方なく戀しきこと、いづかたともなく、行ゑなき心地し

ありたまへりしぞかし。只今、おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせんとすらむとて、いみじう泣くを見玉ふも、すゞろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、ふしめになりて、うつぶしたるに、こぼれかゝりたる髪、つや〳〵とめでたうみゆ。

おひたゝんありかも知らぬ若草を、
　おくらす露ぞ消えんそらなき。

また、ゐたるおとな、げにとうちなきて、

はつ草のおひゆく末もしらぬまに、
　いかでか露の消えんとすらん。

と聞ゆる程に、僧都あなたより來て、此方はあらはにや侍らむ、今日しも端におはしましけるかな。このかみの聖の

## 野分のあした

中宮のおまへに、秋の花をうゑさせ玉へること、つねの年よりも見所多く、色草を盡くして、由あるくろ木、赤木のませを結ひませつゝ、おなじき花の、枝ざしすがた、あさ露の光りも、よのつねならず、玉かとかゞやきて、つくりこたせる野邊の色を見るに、はた、春の山も忘られて、涼しう面白く、こゝろもあくがるゝやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心よする人は、かずまさりけるを、なたゝる春のおまへの花園に、心よせし人々、またひきかへしうつらふ氣色、世のありさまに似たり。これを、御覽じつきて、里居し玉ふ程、御あそびなどもあらまほしけれど、八月は、故前坊の御忌月なれば、心もとなくおぼしつゝ、あけくるゝに、この

玉ひて、たゞ目の前にみやらるゝは、淡路島なりけり。あはと遙かになど、の玉ひて、

あはとみるあはぢの島のあはれさへ
のこるくまなく澄める夜の月。

ひさしう手もふれ玉はぬ琴を、ふくろよりとり出玉ひて、はかなく掻きならし玉へる御さまを、見たてまつる人も、やすからず、哀に悲しう忍びあへり。廣陵といふ手を、ある限りひきすまし玉へるまゝ、かの岡部の家も、松のひゞき、浪の音にあひて、心ばせあるわかき人は、身にしみて思ふべかめり。何とも聽きわくまじき、このもかのもの、しはふる人どもゝ、すゞろはしくて、濱風をひきありく。入道もえ堪へで供養、ほうたゆみて、いそぎ參れり。

します程は、中將の君まゐり玉ひて、東のわた殿の小障子のかみより、妻戸の明きたるひまを、何心もなく見入れ玉へるに、女房あまた見ゆれば、たちとまりて、音もせでみる。御屛風も、風のいたう吹きければ、押疊みよせたるに、見通しあらはなるひさしの御座に、ゐ玉へる人、ものにまぎるべくもあらず、氣高く淸らに、さと、うちにほふ心地して、春の曙の霞のまより、おもしろきかば櫻の、咲きみだれたるをみる心地す。あぢきなく、見奉る我顏にも、うつりくるやうに、愛敬は匂ひたり。またなくめづらしき人の御さまなり。みすの吹きあげらるゝを、人々おさへて、如何にしたるにかあらむ、うちわらひ玉へる、いといみじう見ゆ。花どもをこゝろくるしがりて、得みすてゝいりたまはず。御前

花の色まさる景色どもを御らむずるに、野分、例の年よりもおどろ〳〵しく、空の色かはりて吹きいづ。花どものしをるゝを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひさわがるゝを、まして、草むらの露の玉の緒、乱るゝまゝに、御こゝろまどひもしぬべく、おぼしたり。覆ふばかりの袖は、秋の空にしもこそほしげなりけれ。暮れ行くまゝに物も見えず吹きまがはして、いとむくつけゝれば、み格子などまゐりぬるに、うしろめたく、いみじと、花の上を覺し歎く。南のおとゞにも、前栽つくろはせ玉ひけるをりにしも、かく吹き出て、本あらの小萩、はしたなくまちえたる風のけしきなり。をれかへり、露もとまるまじう吹きちらすを、すこし端ちかうて見玉ふ。おとゞは、姫君の御方におは

ど、この渡殿の東の格子もふきはなちて、たてる所のあらはになれば、おそろしくてたち退きぬ。今参るやうに、うち聲つくりて、簀子の方にあゆみ出で玉へれば、さればよ。あらはなりつらむとて、かの妻戸のあきたりけるよと、今ぞみ咎め玉ふ。年頃、かゝる事の露なかりつるを、風こそげに巌も吹きあげつべき物なりけれ。さばかりの御心どもをさわがして、珍らしくうれしきめを、みつるかなと覺ゆ。

なる人々も、さま〴〵にものきよげなる姿どもは、ことわたさるれど目うつるべくもあらず。おとゞのいとけどほく。はるかにもてなし玉へるは、かくこゝろたゞには得思ふまじき御有様を、いたり深き御心にて、若しかゝるをもやと、おぼすなりけりとおもふに、けはひおそろしくて、たちさるにぞ西の御方より、うちの御障子ひき開けて渡り玉ふ。いとうたてあはたゞしき風なめり。こゝかうしおろしてよ、をのこどもあるらむを、あらはにもこそあれと聞え玉ふを、又よりて見れば、物聞えて、おとゞもほゝゑみてぞみたて奉り玉ふ親ともおぼえず、若く清らになまめきて、いみじき御かたちのさかりなり。女もねびとゝのひ、あかぬこなき御さまどもなるをみるに、身に染むばかりおぼゆれ

よりは、寧ろ、娯樂の爲めまかきたるものなり。然れども、何れも、當時の人の、當時の事件を記したるものなれバ、歴史家が參考として、甚た益あるものとす。其文章の巧なるは、また言を待たざるなり。

紫式部日記ハ、式部が夫藤原宣孝まおくれて、寡居せし後の記錄なり。其上東門院に奉仕せしありさま、御堂關白道長に懸想せられしを、心には憤れども、道長は門院の父なれバ、さすがに色を正しくし、聲を勵まして、拒みもならず、婉曲に之を辭して、其貞操を全うせしさまより、日本紀局の稱を得しこと等、余輩が式部の傳記につきての智識は、多く此一部の日記に由る。その文章は、概して優美なりといへども、鎭密にして莊麗なるは、則ち源語に劣るが如し。これ、かれは意匠を

## 第四章　日記。及び紀行の文。

平安の朝の散文にて、物語につぎて見るべき者は、日記、及び紀行の文なり。日記は、著者が日々の出來事を、記錄したるものにして、紀行は、旅行の際に起りたる事件、途次ま於て見聞したる事物を叙べたるものなり。日記にありては、紫式部日記、最も價値あるものにして、蜻蛉日記、和泉式部日記、讃岐典侍日記等、亦觀るべし、紀行には、土佐日記其首位を占め、更科、「いほぬし」等の日記之ま次ぐ。然れども、土佐日記の如きは、日記と稱して紀行なり。又、後に云ふ方丈記の如きは、日記ありといへども、大ゐ隨筆の如き有樣ありて、三者の間に、劃然たる區域を設くるを難し。

日記も紀行も、其目的は殆んど物語と同しく、實用に供する

ト」。といへるに基きたれば、蜻蛉の文字を用ふるは、蓋し唯、其訓の同じきにとれるなるべし。其文体は、日記の中にて稍異なれるものなり。たゞ年月の下に、其出來事を繫ぐるのみならず、まゝ隨筆に似たる處あるが如し。和泉式部日記（又和泉式部物語ともいふ）も、また主として、冷泉天皇の皇子敦道親王が、式部の許へ通ひ玉ひし顛末を記せるものなり。讃岐典侍日記に、堀河天皇の御惱より、次で崩御ありしこと、明年後鳥羽天皇の御即位より、次で大嘗會を行はせられし事を錄せるは、日記中、最も類ひなきものにして、歷史法制を學ぶものゝ參考となる事多し。文章も甚だ巧みなり。更科日記亦見るべし。これは、菅公六世の孫、菅原孝標の女の日記にして、後冷泉天皇時代のものなり。

凝らし丶物語にして、これはさまで經營せずして、事實をかきつけし日記なればなるべし。されば、敬語少く潤色薄く、其思ひのまゝに筆を下して、毫しも苦心斧削の痕を見ず。輕快にして簡淨なるは、却りて源語の上に出で、巧過相償ふに足るべし。

蜻蛉日記は、右大將道綱の母、東三條攝政兼家が室の記録なり。兼家いまだ微なりしとき、此女に通ひはじめてより、道綱を生みし前後の事をしるしたれば、村上、冷泉、圓融の三朝に亘れる代の、風俗を見るに足るべきものなり。此書の名は、巻中に「か丶年月はつもれど、おもうやうにもあらぬ身をしなげくは、とし改まるもよろこばしからず、尙、ものはかなきを思へば、有るかなきかの心地する、かげろふの日記といふべ

ども之が旅に五十日を費し、途中海賊の難を恐れしてなど、當時の狀態目の前に見る心地する中に、處々滑稽諧謔の文句を挿めるは、最も出色なりと覺ゆ。須磨記と松島日記と、一は菅公の撰といひ、一は淸少納言の作といふ。其文章は古風なれども、共に假托の書なること、世既に定論あり。

土御門殿の秋のけはひ（紫式部日記）

秋のけはひ（寬弘五年）の立つまゝに、土御門殿のあさま、云はん方なくをかし。池のわたりの梢ども、やり水の邊の草むら、おのがじゝ色づきわたりつゝ、大方のそらも艷なるに持てはやされて、ふだんの御讀經の聲に、あはれまさりけ

紀行の第一なる土佐日記は、紀貫之が土佐守となり、任所に在ること五年、承平四年に任滿ちて、京に還りし時の紀行なり。當時紀行日錄の類、殊に男子の文は皆漢文にして、假名文は女の專ら用ふるのみなりしかば、貫之の此紀行は、ことさらに他の婦人の筆したるものゝ如くし、開卷第一に、「男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり」と書きたり。

貫之は歌仙と稱せられ、文章も亦巧みなり。土佐日記の前にも古今和歌集序、大井川行幸和歌序(共に後に出づ)等の作ありしが、日記はこれらの序文の如く、浮華なる嫌なし。其長ずる處は輕妙にして、文字の上に痛心經營の痕跡を留めざるに在り。土佐の國府より京都まで凡そ百里。遠からざるにあらざれ

見む。心元なき御わざを、我が心をやりて、ささげうつくしみ玉ふも、ことわりよめでたし。或るときは、わりなき行(ワザ)しかけ玉へるを、御紐ひた解たて。御几帳の後にて、あぶらせ玉ふ。あはれ此宮の御しこに濡るゝは、嬉しきわざかな。此の濡れざる爛るこそ、思ふやうなる心地すれと、喜ばせたまふ。………………

すたもの(同上)

(上略)源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、れいのすゞろごとども、いで来る次(ツイデ)に、梅の枝に、しかれたる紙に、書かせたまへる、

すきものと名にし立てれば見る人の、

折らで過くるはあらじとぞ思ふ。

り。やう〳〵涼しき風のけしきにも、れいの絶えせぬ水の音なん、夜もすがら聞き通はさる。御前にも、近う侍ふ人々はかなき物語りするを、聞こしめしつゝ、惱ましうおはします可かゝめるを、さり氣なく、持てかくさせ玉へり。御有樣などの、いとさらなることなれど、浮世のなぐさめには、かゝる御前をこそ、尋ね參るべかりけれど、うつし心をば引たかへ、たとしへなく、萬忘るゝにもかつはあやしき、……

稚兒の愛（仝上）

十四日までも、御帳出でさせ玉はず。西のそばなるたましに、夜も晝も侍ふ。殿の、夜中にも曉にも、まゐり玉ひつゝ、おん乳母(メノト)の懷を、ひきさがさせ玉ふに、打ちとけて寢さる時などは、何心もなくおふふれて、驚くもいと〳〵をかしく

## かをる香(和泉式部日記)

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつゝ、明かし暮らす程に、はかなくて四月十月あまりにも成りぬれば、木の下、くらがりもて行く、はしの方を眺むれば、築地の上の草の、青やかなるも、ことに人は目とゞめぬを、哀に眺むるほどに、近き透垣のもとに、人のけはいのすれば、誰にかと思ふほどに、さし出でたるを見れば、故宮に侍ひしことねり童なりけり。哀に物を思ふ程に來たれば、などか、いと久しう、見えざりつる、遠ざかる昔の名殘にはとおもふをなど、いはすれば、其の事とさふらはでは、馴々しきやうにやと、つゝましう候ふうちに、日比、山寺に、まかりあり(一本ゆかり)き侍るになん、いと便なく、徒然にさふらへしかば、御かはりゝ、見參

賜はせたれば、

人にまだをられぬものを誰れかこの、
　すきものぞとは口ならしけん。

めざましうと聞こゆ。渡殿にねたる夜、戸をたゝく人ありと聞けど、恐ろしさに、音もせで、明かしたる、つとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞ、
　槇の戸口にたゝきわびつる。

返し

たゞならじ戸ばかりたゝく水鶏ゆゑ、
　明けては如何にくやしからまし。

くれの方に、景色ばみありけば、かくれの方にて、御覽じつけて、如何にぞと問はせ玉ふに、御文をさしいでたれば、御らんじて、

同じ枝に鳴きつゝをりしほとゝぎす、

聲はかはらぬものと知らなん。

と書かせ玉ひて、童に賜はらせとて、かゝる事人にいふな。すきがましきことのやうなりとて、入らせ玉ひぬ。………

石山寺の眺臨(蜻蛉日記)

(上略)石山に、十日ばかりと、思ひたつ。(中略)申時(さる)の終ばかりに、寺の中に着きぬ。(中略)やゝに物などしきたりければ、行きて臥し

らせんとて、師の宮になん參りて侍りしと語れば、いと善き事にこそあなれ。其の宮は、いとあてに、けちかうおはしますなるは、昔のやうには、得しもあらじなど云へば、然おはしませど、いとけ近うおはしまして、常に參るやと問はせ玉ふ。參り侍りと、申し侍りつれば、これ持て參り、如何見玉ふと、參らせよとて、橘を取り出でたれば、昔の人のと云はれて、參りなん。いかゞきこえさせんといへば、言葉に聞こえさせんも、片腹いたうて、なにかは、仇々しくもきこえさせ玉はざる。はかなき事もと思ひて、

かほる香によそふるよりはほとゝぎす、

聞かばやおなじこえやしたると。

きこしいでたり。まだ、はしにおはしましける程に、かの童か

心地空なりといへば、おろかなり。思ひ入りて行ふ心地、ものおぼえてなほあれば、みやりなる山の彼方ばかりに、田守のものおひたる聲、云ふかひなく情なげに、打ち呼ばひたり。など、かうしも取り集めて、膽を碎くこと多からんと思ふに、果てはあきれてぞ居たる、さて、どや行ひつれば下りぬ。身弱ければゆやにあり。夜の明くるまゝに、見遣りたれば、東に風はいとのどかにて、霧立ち渡り、川の彼方は、繪に書きたるやうに見えたり。川面に、放ち馬どものあさり歩りくも、遙に見えたり、………

大湊を出帆す（土佐日記）

ぬ。心地せん方しらず、苦しきまゝにふし轉び、うる氣なく、夜になりて湯などものして、御堂にのぼる身のあるやうを佛に申すまゝも、淚に咽ぶ。いひもやられず。夜うち更けて、外の方を見出だしたれば、堂は高く、下は谷と見えたり。片岸に木ども生ひこりて、いとくらかりたる、二十日の月、夜更けていと明かるけれど、木陰にもりて、所々に來しかたぞ見ゆ渡りたる。見下ろしたれば、麓まある湖は、海のごと見えたり。高欄ま押しかゝりて、とばかりまもり居たればゝ、かた岸に、草の中にそよ〳〵としたるもの、怪しき聲するを、これ何ぞと問ひたれば、鹿のいふなりといふ。などか、例の聲まはなかざらんと思ふ程に、さし離れたる谷の方より、いとうら若き聲ま、はるかにながめなきたなり。聞く

ず、いくそばく、いく千とせへたりとしらず。もとごとに波うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと、みるにたへだして、ふな人のよめる歌、

見わたせば松のうれごとにすむ鶴は、千代のどちとぞ、おもふべらなる」とや。この歌は、こころを見るにえまさらず。かくあるをみつゝ、こぎゆくまに〳〵、山も海もくれ、夜ふけて西東もみえずして、てけのこと、かじとりの心にまかせつ。をのこも、ならはぬはいとも心ぼそし。まして女は、舟底にかしらをつきあてゝ、ねをのみぞなく。かくおもへば、かじとりは舟うたうたひて、なにともおもへらず。そのうたふ歌は、

春の野にてそねをばなく。わか薄(スヽキ)にて、手をきる〳〵、摘(ツン)

九日、つとめて大湊より、なはのとまりをおはんとて、漕ぎいでけり。これかれたがひに、國のさかひのうちはとて、見送りにくる人あまたなるなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等、みたちより出でたうびし日より、こゝかしこにおひくる。この人々の、深きこゝろざしは、この海にもおとらざるべし。これより、今は漕ぎはなれてゆく。これを見おくらんとてぞ、この人どもはおひ來ける。かくて、漕ぎゆくまにまに、海のほとりにとまれる人も、遠くなりぬ。ふねの人もみえずなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。

　おもひやる心は海をわたれども、ふみしなければしらずやあるらん。」かくて宇多の松原をゆきすぐ。その松のか

たるに、ましていはんかたなく、あはれにかなしと、おもひなげかる。母などは、皆なくなりたるかたにあるに、かたへにとまりたる、をさなき人々を、左右にふせたるに、荒れたる板屋のひまより、月のもりきて、乳兒の顔にあたりたるが、いとゆゝしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、今ひとりをもかきよせて、おもふぞいみじきや。そのほど過ぎて、しぞくなる人のもとより、むかしの人の、必ずもとめて、おこせよとありしかば、もとめしに、そのをりは、え見いでずなりにしを、いましも人のおこせたるが、あはれにかなしきことゝて、かばねたづぬる宮といふ物語を、おこせたり。まことにあはれなりや。かへりごとに、

うづもれぬかばねをなにゝたづねけん。苔の下には身

ゝる菜を、親や、まほるらん。しうこめや、くふらん。かへらや。昨夜(ヨンベ)の、うなゐもがな。錢(ゼニ)こはん、そらごとをして、おきのりわさして、錢もてこそ。おのれだにこず。」これなみにおほかれど、かゝぞ。これらを人の笑ふをきゝて、海はあるれど、心はすこしなぎぬ。かくゆきくらして、とまりにいたりて、おきなひとひとり、たうめひとり、あるがなかに、こゝちあしみして、ものものしたまへで、ひそまりぬ。…………

苔の下には身こそなりぬれ(更科日記)

その五月のついたちに、姉なる人、子生みてなくなりぬ。よそのことだに、をさなくより、いみじくあはれと、おもひこ

づねてりみし。」これをきゝて、まゝ母なりし人、
そこはかと、しりてゆかねどさきにたつ涙ぞ道のしるべなりける」、かばねたづぬる宮おこせたりし人、
すみなれぬ野べの笹原あとはかもなく〳〵いかに尋ねわびけん」。これを見て、せうとは、その夜おくりにいきたりしかば、
みしまゝにもえし烟はつきにしを、
いかゞたづねし野べのさゝはら。

こそなりぬれ」めのとなりし人、今はなにゝつけてがなと、なく／＼、もとある所に、かへりわたるに、

ふるさとにかくこそ人はかへりけれ。あはれいかなるわかれなりけん。」むかしのかたみには、いかでとなんおもふなどかきて、硯の水のこほれば、皆とぢられてとゞめつといひたるに、

かきながすあとはつらゝにとぢてけり。なにをわすれぬかたみとかみん」。といひやりたる、かへりごとに、

なぐさむるかともなぎさの濱千鳥、なにかうき世にあともとゞめん」。このめのと、墓所みて、なく／＼かへりたりし。

のぼりけん野べは煙もなかりけり。いづこをはかとた

白樂天の詩に「香爐峰雪撥簾看。遺愛寺鐘枕欹聽」とあるに基きしものなり。是れ、後の世の話柄となり、又畫工の好材料となりて、普く人の知る處なり。皇后その才華を嘉し玉ひ、奏して内侍ともと、おぼされしが、たま〳〵后の兄藤原伊周、罪ありて流竄せらるゝ事ありしかば、果たし給はさりき其末年の事情は詳かならず唯甚だ零落して陋屋に住まひしとき、年少公達の之を冷笑せしかば、清少納言は中より駿馬の骨を買ふもののあるを聞かずやと答へしかば笑ひしもの慚ぢてたち去りし事を傳ふるのみ。

枕草紙は草子文の最も古く、且つ最も妙なるものとす。草子とは草案草稿の義なりといひ、或は冊子の轉音なりともいふ後世の隨筆といひ漫筆といふものの即ち是なり。此種の文

## 第五章　草子。即ち隨筆の文。

平安の朝にあらはれたる、雅文の雙璧とも稱せられ、源氏物語と、肩をならぶるものは、枕草紙なり。其著者を淸少納言といふ。父は淸原元輔とて、歌を以て著はれ、後撰和歌集撰者の一人なり。榮花物語には、淸少納言を以て、三條天皇の女御淑景舍の官女とせり。枕草紙の中には、此女御の事、處々に見えたれども、其局に奉仕せしこと、明かならず。されば、後の學者は概ね、淸少納言は、一條天皇の皇后藤原定子に仕へて、大に寵遇をうけし人となす。當時、其盛名紫式部に下らず。其機敏にして、才情の溢るゝが如き、しば〳〵人を驚かしたりといふ。ある雪の朝に、皇后左右を顧み給ひて、香爐峰の雪は如何と、宣ひしかば、淸少納言は直ちに立ちて、御簾を捲きぬ。蓋し

言記としるせるものもありといふ。

余輩は先きに既に源氏物語の文を評論せしにより、枕の草子を論ぎるに當りては、かれとこれとを照らし合して、雅文の双璧を比較するの便りとせん。此二書、一は物語にして、一は随筆なれば、其体裁の異あるは論なし。今は唯其文筆の上にあらはれたる差異を云はん。此紫清二女、共に當時無双の閨秀にして、學問の博き、氣韻の高き、互に相伯仲して、其間に軒輊をなしがたし。されども其人物に至りては、一は既に前に云ひしごとく、温柔貞淑にして、徳行ある婦人の龜鑑なるがゆゑに、其文章にあらはれたるところ、自づから其風あり。他はあまり今様にして、内行も修まらず、且つ才學に誇ること常なり。故に、式部は博學なりといへども、之をあらはさず。

學に屬せる著書は甚だ少し。江戸時代に至りては隨筆の見るべきもの多くあらはれたりと雖も其以前には唯枕草子の外には吉田兼好の徒然草鴨長明の方丈記四季物語等あるのみ枕草紙の名は或は此書のおはりに内大臣藤原伊周が皇后へ料紙をまゐらせしとき皇后は清少納言にこれは何をかかまし。上の御前(一條天皇)は史記といふ文をなん書かせ給へると宣ひしを枕にこそし侍らめと答へ申しければさはえよとて賜はりし紙に書きしものなる事を載せたるを據りどころとして此名ありといひ或は此草子は「花は云々」「山はしかじか」「まくきものは云々」と題詞を設けて書きしものなるにより、さては枕草子と名づけたりと云へり。兎に角、枕の草子の名は後人の命せしものにして古くは清少納

て、議論の高妙なる、筆鋒の自在にして、記事の趣味ある、古來實に枕草子に及ぶものなし。華美なる平安の朝廷にて、上達部殿上人の、或は束帶、或は衣冠して、儀式だちたるふるまひ、或は、此等の人々が、宮仕への諸姫嬪に戯れて、互に相嘲謔するさまの、ひとたび少納言の鋭利なる筆に寫され、其冷評をうけたるものは、千歳の下、なほその實際を見る想ひあらしむ。其他、四季のけしき、花鳥風月のさまのみならず、如何なる事物にても興あるものは、皆深く注意して寫しとりたりと見ゆ。その文體は、李義山の雜纂に倣ひたりといはるれども、之に上る事數等、其差違、啻に鷄鷹のみならざるべし。而して、其寫し取りたる事物に批評を加へて、或は冷笑し、或は譏刺し、或は賞賛嘆美したりしときの顏つきさへ、眼の前に見ら

一といふ文字をだに知らざるさましたれども、少納言は男を男とも思はず、故事古語を引きて盛んに議論し、其活潑なること鬚眉男子もしばしば後に瞠若たることあり。されば、源語よりは其性質の相似たる紫式部日記を以て枕草子と比較するに、一方は温厚靜肅の出來事多くして格別飄然たる妙味なく、一方は逸氣奔放奇拔なること多くして巻を掩ふ能はざらしむ。この人物の差異外にあらはれて即ち文章の差異となれるがごとし。

概して云はゞ隨筆の文は多くは外より應ずるものにして時々刻々目に視耳に聽き胸に浮びしことを書きあつめたるものなり。故に少しく學問あり文才あるものゝ斷簡零篇を蒐むとも尚一部の隨筆を得べし。然れども意思深邃にし

法は、實に人の意表に出づるものおほし。故に、まゝ艱澁にして、解しがたきことあり。普通の省筆法は、源語、其外の物語り文にも多しといへども、枕草子のは、其獨得の長所なること疑ひなし。この差違も、一は續き物語にして、一は斷續常なき隨筆なるに由るといへ、また紫清二女の人物氣象の、仝一ならざるより、起りし者居多なるべし。要するに、二女の文は、互に上なりがたく、下なりがたしといへども、強ひて之を褒貶せんとならば、余輩は云はんとす、式部の文は、醇乎として醇なるものなり、少納言のは、即ち大醇にして小疵ありと、是れ韓退之が、孟荀二子を評せし語なるが、余輩は之を紫清の二女にうつして、失當ならざるを覺ゆ。

るゝやうにして、其議論の巧ミなるは、かの源語の、雨夜の品定めの段に似たる處少からず。寸鐵人を殺すの力は、即ち遙かに其上に出づ。

源語、枕草子、共に富麗妖艶、極まりなしといへども、特に源語は、緻密沈着なるに長じ。枕草子は、輕快豪放なるに長ずること、既に云ひしがごとし。後者は畢竟、大抵外より應じたる文にして、筆に縁りて、趣をおこすこと多きが故に、自然と莊重を失ひ、浮巧に流るゝ憂あるがごとし。然れども、もと才華に富ミ、且つ氣昌んなるがゆゑに、其一氣呵成の筆鋒の鋭きこと、源語も及ばざるところ多し。且つ、怒りやすき人の言語の如く、突然と思想の途次をかへ、或は、なほ幾十言を費すべきところに、僅かに兩三語を以て、之を充たす等の奇拔なる文

すみもてわたるもいとつき〳〵し、ひるになりて、ぬるく
ゆるびもてゆけば、すびつ、火をけの火も、しろき灰がちに
なりぬるはわろし。

## 木の花の評

梅のこくもうすくも、紅梅。櫻の、花びら多きに、葉色濃きが、
枝細く咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いと
めでたし。卯の花は、品劣りて、何となけれど、さく頃のをり
しう、郭公のかげに、かくるらむと思ふまゝ、いとをかし。祭の
かへさに、紫野のわたりちかき、怪しの家ども、おどろなる
垣根などまゝ、いとしろう咲きたるこそ、をかしけれ。青色の
うへに、白きひとへかさねかづきたる、青くちばなど似か

# 枕草紙の例

## 四季の評

春はあけぼの、やう〳〵しろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲の、ほそくたなびきたる。夏はよる、月の頃はさらなり。やみもなほ螢とびちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山ぎはいとちかくなりたるに、鴉のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど、とびゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日いりはてゝ、風のおと、虫のねなどいとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるは、いふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでも、いとさむき、火などいそぎおこして、

の御使にあひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは、おぼろげならじとおもふに、猶いみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。桐の花、紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉のひろごり様、うたてあれども、又異木どもとひとしう、いふべきにあらず。唐土に、ことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらむ心ことなり。まして琴に作りて、さまざまなる音の出くるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。木のさまぞにくげなれど、あふちの花、いとをかし。かればなにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

よひて、いとをかし。四月のつごもり、五月の朔日などの比(ころ)ひ、橘のこくあをきまゝ、花のいと白く咲きたるに、雨のふりたる、つとめてなどは、世になく、こゝろあるさまにをかし。花の中より、實の黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかま見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず。時鳥のよすがとさへおもへばにや、猶更に、いふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじく、あやしきものにして、めに近く、はかなき文つけなどだにせず。あいきやうおくれたる人の顔など見ては、たとへにいふも、實にその色よりして、あいなくみゆるを、唐土(もろこし)に限りなきものにて、文にもつくるなるを、さりともあるやうあらむと、せめて見れば、花びらの端に、をかしき匂ひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、帝

けり。なげしのもとに、火ありくとりよせて、さし集ひて、へんをぞつく。あなうれしや。とくおはせなど、見つけていへど、すさまじきこゝちして、何しにのぼりつらむと、おぼえて、すびつのもとにゐたれば、又そこにあつまりゐて、物などいふ〳〵、何がしさふらふと、いと花やかにいふ。あやしく、いつのまに、なに事のあるぞと問はすれば、主殿つかさなり。たゞこゝに人づてならで、申すべき事なむといへば、さし出て問ふに、これ頭中將のたてまつらせたまふ。御かへり言とくといふに、いみじく惡みたまふを、いかなる御文ならむとおもへど、只今急ぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえむとて、ふところにひきいれて入りぬ。猶、人のものいふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、さらばそのあ

# 廬山雨夜艸庵中

頭中將の、そゞろなる虚言(そらごと)を聞きて、いみじう言ひおとし、何しに、人とおもひけむなど、殿上にても、いみじくなむのたまふときくに、はづかしけれど、眞ならばこそあらめ。おのづから聞き直したまひてむなど、わらひてあるに、黑戸のまへなど渡るにも、こゑなどするをりは、袖をふたぎて、露見おこせず。いみじう憎みたまふを、とかく言はず、見もいれですぐす。二月つごもりがた、雨いみじう降りて、つれ〴〵なるまゝ、御物いみにこもりて、さすがにさう〴〵しくこそあれ。ものやいひにやらましとなむのたまふと、人々かたれど、世にあらじなど、いらへてあるに、一日しもにくらして、まゐりたれば、よるのおどゝに、入らせたまひまゝ

どろしう間へは、などてか、さ、人げなきものはあらむ。玉の臺求めたまはましかば、いで聞えてましといふ。あなうれし。おもにありけるよ。うへまで尋ねむとしつるものをとて、よべありしやう、頭中將のとのゐ所まで、すこし、人々しきかぎり、六位まであつまりて、萬の人の上、むかし今とかたりて、いひしついでに、猶このものの、むげに絶え果てての後こそ、さをがにえあらね、をし、れひれづることもやとまて、どれ、さゝか何ともおもひたらず、つれなきがれとねたきを、今宵ありしとも、よしとも、定めきりて、止みなむかしとて、みな云ひあはせたりしことを。たゞいまはみるまゝきとて、入たまひぬとて、主殿づかさきたりしを、又おひかへして、たゞ袖を捕へて、どうざいをさせず、こひとりもて來ずは、

りつる文を、たまはりて來となむおほせられつる。とく〳〵といふに、あやしく、いせの物語なるやと見れば、あをきうすやうに、いと清げに書きたまへるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。らんしやうの花の時、きんちやうのもとゝ書きて、末はいかに〳〵にとあるを、いかゞはすべからむ御まへのおはしまさば、御覽ぜさすべきを、これがすゑしりがほに、たど〳〵しきまんなに書きたらむも、見苦しなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞそのおくに、すびつのきえたるすみのあるして、草のいほりをたれかたづねむと、かきつけてとらせつれど、かへりごともいはで、みなねて、つとめて、いとゞくつぼねにおりたれば、源中將の聲して、草のいほりやある〳〵と、おどろお

いへば、なぞ、つかさ召しありともきこえぬに、何になりたまへるぞと問へば、いで、眞にうれしき事の、よべ侍りしを、心もとなく、思ひかしてなむ。かばかり面目あるをなかりきとて、はほめありける事ども、中將のかたりつるおなほ事どもをいひて、このかへりをふしたかひて、さる物ありとだに思はじと、頭中將のたまひしに、たゞに來りしは、中々よりりき。持て來りしたびは、如何ならむと胸つぶれて、眞にわろからむは、せうとの爲にも、わろかるべしとおもひしに、なのめざまあらず、そこらの人の、ほめ感じて、せうとこそ聞けとの玉ひしかば、下心には、いとうれしけれど、さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になむ侍ると申しかば、ことくはへきゝ知れとにはあらず。唯人にか

文をかへしとれど、いましめて、さばかりふる雨のさかりにやりたるに、いとゝくかへりきたり。これとてさし出たるが、ありつる文なれば、かへしてけるかとうち見るに、あはせてをめけば、あやし、いかなることぞとて、皆よりてみるに、いみじき盗人かな、猶えこそすつまじけれど、見さわぎて、これがもと付けてやらん。源中將つけよなどいふ。夜ふくるまで、つけわづらひてなむやみにし。この事、必ず語り傳ふべき事なりとなむさだめしと、いみじくかたはら痛きまで、いひきかせて、御名は、今は草のいほりとなむ付けたるとて、いそぎ立ちたまひぬれば、いとわろき名の、末まであらむこそ、口をしけれといふほどに、修理亮のりみつ、いみじきよろこび申に、うへにやとてまゐりたりつると

り。うへの渡らせ玉ひて、かたり聞えさせ玉ひて、をのこどもも、みな扇にかきて持たるとおほせらるゝにこそ、あさましう、なにのいはせける事にかとおぼえしか。さて後に、袖几帳なぞとりのけて、おもひなほり玉ふめりし。

にくきもの

ねふたしと思ひて臥したるに、蚊のほそこゑゝ名のりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身のほどにあるこそ、いと憎くけれ。きしめく車にのりてありくもの、耳もきかぬにやあらんと、いとにくし。わが乗りたるは、その車のぬしさへにくし。……………のみも、いとにくし、きぬのしたにをどりありきて、もたぐるやうにするも。

これみて、聞ゆするぞとの玉ひしなん、すこし口惜しきせうとのおぼえに、侍りしかど、これがもと付け試みるに、いふべきやうなく、殊に又これが返しをやすべきなどいひあはせ、わろき事いひては、中々まねたかるべしとて、夜中までなむおはせし、これは身の爲めにも、人の爲めにも、さて、いみじき喜びには侍らずや、つかさめしに、少將のつかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむといへば、げに數多して、さるをあらんとも知らで、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれておぼゆる、この妹と兄といふををば、うへまで皆知ろしめし、殿上にもつかさ名をばいはで、せうとゝぞつけたる。物語などしてゐたるほどに、まづと召したれば、參りたるに、この事おはせられんとてなりけ

寛平年中より、堀河天皇の寛治年中まで、凡そ二百年のあひだに亘れども、主として、御堂關白道長の、榮華のさまを寫したるものなり卷中に、殿(御堂關白)の御前の榮花のこと、開けそめにし後、千とせの春の露、秋の霧まもたちかくされず、風も動きなくして、枝をならさねば、香をりまさり、世に有りがたくめでたき事、優曇華の如く、水に生たる花は青き蓮、世にすぐれて匂ひたる花、ならびなきがごとしと云々といへる一節を以て、其全豹を察するに足るべし、此書、全篇を四十帖にわかち、一帖毎に、月の宴、花山たづぬる中納言、さまざまのよろこび、見はてぬ夢、かゝやく藤壺、鳥部野等、小説めきたる題詞を設けたり、かく卷ごとに標目を立てゝ書き出でしは、宇津保物語にはじまるといふ、榮花の文章は、優美にして周密な

## 第六章　歴史体の文學

既に、前篇のはじめま云ひしごとく、國史は云ふまで及ばず、すべて表立ちたる記錄は、皆、漢文のみなりしかば、わが國文學として見るべきにあらず、されば、平安朝の歴史文學は、唯、文章といひ、体裁といひ、小說に類似したる雜史あるのみ、雜史とは、榮花物語、大鏡の類をいふ、榮花物語は、前に云ひし如く、物語の名ありて、其体例もまた物語の如く、且つ其目的とするところも、また娛樂に在るべけれども、尙、當時の事實を記錄したるものなることは、決して疑ひを容れず、學者或は此書れ文詞の摸樣を以て、其日記なるべきことを論ずるものさへあるなり、

榮花物語、四十一卷、（或は四十卷）。その記するところは、宇多天皇の

に大鏡（又世繼物語）は著ありて、彼是れ、文章体裁の全からざるあり、故に、安藤爲章、加茂眞淵等は、赤染右衛門の書きし日記等を本として、後の人の書きつらねたるものならんといへり。

大鏡は、即ち爲業の著はすところなり、爲業は、崇德天皇の朝に仕へ、皇大后宮の大進となりし人なるが、後、剃髮して寂然と號し、大原山に隱遁したるが、其弟、賴業、爲隆、また世を避けて、寂念、寂超と呼び、おなじところに棲みしかば、世の人、これを大原の三寂といひき、嘗て、雲林院の菩提講にて、世繼の翁と夏山繁樹なるものとの對談に擬して、上、文德天皇より、下、後一條天皇に至るまで、十四代凡百七十六年間の、君臣の事蹟を記錄したり。これを大鏡といひ、また世繼物語ともいふ。抑、

ゑ世の人、稍もすれば、榮花は名にも似ず花おくれて、いと實やうなりといふ。是れ此書は、事實を記錄せしものなるが故に、只管文章にのミ、力を盡くす能はざりしに由るならん。もとより、源氏物語、枕草子などの文と、比ぶべきものに非ず。然れども、なほ何處となく秀れたる文章なること、文例を見ば容易に知らるべし。

此書の作者、或は、赤染右衛門といひ、或は、藤原爲業といひ、書名も、世繼物語といふをよしとせしといふ。何れを信じがたし。赤染右衛門は、大江匡衡乃妻にして、有名なる歌人なり。かゝる人こそ、かゝる書をも能くすべけれど、書中赤染右衛門より後のことをも記したれば、其作ならんこと、古人も疑ふこころなり。爲業もまた文詞に秀でたる人なれども、此人は、別

宇治平等院の南なる、南禪坊と云ふに在りて、其路傍に、あやしげなる茶店を設け、往來の人ハ貴賤を問はず、之に茶をすゝめて、何にもあれ、其聞見せるところを語らしめ、自からハ障子の内にありて、その物語を書きとゞめたり。かくして多年を經しかバ、積んで數十卷となりぬ、宇治大納言物語即ち是れなり。或ハ其毎條のはじめに、今ハ昔と書き出だせるにより、今昔物語ともいふ。異本種々ありて、或ハ六十卷とし、或ハ廿九卷とし、一樣ならず、其部類をたつるも、或は天竺、震旦、本朝とわかち、或ハ世俗、怪異、惡行、宿報、佛法、雜事の諸傳にわかつ。其材料ハ、右に云ひしごとく、多くハ村老野人の口より出でしものなるにより、所謂齊東野人の語多く、荒誕無稽の説其半を占む、稍信ずべきものと、全く信ずべきものとハ、殘

勅撰此國史は、乾燥なる事實を列記したるに過ぎざるのみならず、修飾辯護するところ多しといへども、この菩提講の物語は、少しも忌諱することなく述べたれば、當時の狀態、今目睫の前に見る心地す、されば、史學の上より觀るも、堂々たる國史とひとしき、價値あるものなり、その文章は、榮花物語より上ること一等なるべし、書中、事實の性質に應じて、或は輕快、或は嚴肅の筆を用ひ、或は時々滑稽諧謔の文句をも、挿入したるは、和文の歷史を書するに適當なることを、能く示したるものと云ふべし。

是より先き、後冷泉、後三條、白河諸帝の御代に亘りて、宇治大納言源隆國ありて、宇治大納言物語をあらはしたり。此人、體格肥大にして、暑を恐るゝこと甚しかりしかば。夏日は、常に

たるものに遠からざるが故に、言詞概ね平易にして、文理暢達し、瀟洒の中に、自ら婉曲にして、風雅の趣を存したり。後の人、此物語の漏れたるをあつめ、足らざるを補ひて、宇治拾遺物語と名づけたるものを作りき。(或は云ふ拾遺とは侍従の官を云ふ、故にこの題名ありと)其文章は、今昔物語より後に出でゝ、却りて古風なり。鎌倉時代に出でし古今著聞集は、即ち此物語に倣ひしものなるべし。

今榮花物語、大鏡および、今昔物語の一例を左に掲げ、以て平安朝の歴史文學の一斑を示さん。

## 花山天皇の風流(大鏡)

りの半を占むるならん。かく玉石混合、眞僞雜糅の書なりといへども、其眞なるものは、修史家を裨補するは勿論、其荒誕無稽なるものも、また當時人心の執迷と、想像との、如何なる程度に在りしかを知るに足り、極めて有益なるものなり。朝廷のありさま、上等社會の事などは、他の書に詳しくしたるもの多しといへども、中等社會以下の、人情風俗を寫したるものは、唯、今昔物語の類あるのみ。

此書の文章は、大鏡等の前に成りしものなれども、既に平安朝の雅文より、後世の和漢混和文に、一轉する傾向をあらはしたるものなり。即ち和文にして、まゝ漢語を交へたるものなり。和文なりといへども、源氏物語枕草子等のごとく、修飾を盡くしたるものにあらず。殆んど當時の言語を、其儘寫し

きんだちは、むこどりし。をとこ君だちは、みなほど〱につけて、位どもおはせしを、それもみな、かた〱にながされ給ひて、かなしきに、をさなくおはしけるをとこ君、をんな君たち、したひなきておはしければ、ちいさきはあへなんと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにゐてくだり給ひしぞかし。みかどの御おきてきはめて、あやにくにおはしませば、この御子どもを、おなじかたにつかはさゞりけり。かた〱にいとかなしくおぼして、御まへの梅の花を御らんじて。

こちふかばにほひおこせようめの花、あるじなしとて春をわするな。又亭子の帝に聞えさせ給ふ。

ながれゆくわれはみくづとなりぬとも、君しがらみと

此の花山院の、風流者にきへこそ、おはしましけれ。(中略)またこだち作らせ玉ひお折は、櫻の花は優なるに、枝ざしのこはくしくて、もとのやうなどもにくし、梢ばかりを見るなむをかしきとて、中門より外に植ゑさせ玉へる、何よりもいみじう、おやしよりたりと、人は感じ申しき、また撫子のたねを、築地の上におふせ玉へりければ、思ひかけず、四方にいろしくに、唐錦をひきかけたるやうに、咲きたりしなどを見玉ひしは、如何に、めでたく侍りしかは、………

菅公の左遷(仝上)

昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりて、ながされ給ふ。このおとゞの子ども、あまたおはせしに、をんな

えはドめけれ。又雲の、うきてたゞよふを御覽ドても、

山わかれとびゆく雲のかへりくる、かげ見るときぞな

はたのまるゝ。さりともと、よをれぞしめされけるなるべ

し。月のあかき夜、

うみならずたゞよふ水のそこまでもきよきこゝろは

月ぞてらさむ。」これかしこくあそばしたりかし。げに月日

こそは、てらし給はめ、ここそはあやまれ、まことに、おどろ〳〵

しきことは、さる物にて、かくやうの歌や詩などをさへ、い

となだらかに、ゆゑ〳〵しう、いひつゞけまねふに、見きく

人々、めもあやにあさましく、あはれにもまもりゐたり。物

のゆゑ知りたる人なども、むげに近くゐよりて、ふかめせ

ず、見きくけしきどもを見て、いよ〳〵はへて、物をくりい

なりてとゞめよ。」なき事により、らくつみせられ給ふぞ、かなしくおぼしなげきて、やがて、山ざきにて出家せしめ給ひてけり。その程、きはめてかなしきことおほかり。ひでろへて、都とほくなるまゝに、あはれに心ぼそくおぼされて、

君がすむやどのこずゑをゆく〳〵と、かくるゝまでもかへりみしかな、又播磨の國までおはしつきて、明石の驛といふ所に、御やどりせしめ給ひて、驛の長の、いみじう思へるけしきを御覽じて、つくらしめ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改、　一榮一落是春秋。

かくて、おはしましつきて、あはれに心ぼそくおぼさるゝゆふべ、をちかたに所々けふりたつを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけふり、なげきよりこそも

め給へりける詩を、帝かしこくかんぜ給ひて、御衣をたまはせ給へりしを、筑紫にもてくだらしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞそのをり覺召しいでゝ、作らせ給ける。

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、
恩賜御衣今在茲、捧持毎日拜餘香。

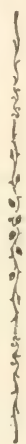
この詩いとかしこく人々感じ申されき、この事どもたゞちりぐ\なるにもあらず、かの筑紫にてつくりあつめさせ給へりけるを、かきあつめ、一巻とせしめ給ひて、後集となづけられたり、又をりぐ\の歌、かきおかせ給へりけるを、おのづからよにちりきこえしなり、よつぎがわかう侍りし時、この事の、せめてあはれにかなしく侍りしかば、大學の衆どもの、なま不合にいますがりしを、問ひたづね

たをまさに、いひつゞくるほとぞ、まことに希有なるやしけき、なみだをのごひつゝ、けうじゐたり筑紫におはしまし所のみ、門もかためておはします。大貳のゐどころははるかなれども、樓のうへのかはらなどの、心にもあらず御覽おやられけるに、又いと近く、觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色、　觀音寺只聽鐘聲

これは文集の、白居易の遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まさゞまにつくらしめ給へりとこそ、むかしの博士どもは申けれ。又あの筑紫にて、九月十日、菊花を御覽おけるついでに、いまだ京におはしましゝ時、九月のこよひ、內裏にて、菊のえんありしに、このおとゞ、つくらし

御事をおほして、御門を傾け奉らむと、おほしかまふとい
ふこといできて、世にいと聞憎くゝのゝしる。いでや、さる怪
しからぬ事あらじなど、世の人申おもふ程に、佛神の御ゆ
るしにや、けに御心のうちにも、あるまじき御心やありけ
む。三月廿六日に、この左大臣殿に、撿非違使打圍みて、宣命
よみのゝしりて、帝を傾け奉らむと構ふる罪によりて、太
宰權帥になして、流しつかはすといふことを讀みのゝしる。
今は、御位もなきぢやうなればとて、網代車に乘せ奉りて
たゞいきまゐて奉れば、式部卿の宮の御心地、おほかたな
らむにてだに、いみじとおほさるべきに、まいて、我御事に
よりて、出て来たる事とおほすに、せむかたなくおほされ
て、これも〳〵と出て立ちさはがせ玉ふ。北の方、御むすめ

かたらひとりて、さるべきゑぶくろ、わりごやうのものてうじて、うち具してまかりつゝ、ならひとりて侍りしかど、おいのけのはなはだしきことは、みなこそわすれ侍にけれ。これはたゞ、すこぶるおぼえ侍るなりといへば、きく人々、げに〳〵いみじきすきものにも、ものし給ひけるかな。今の人は、さる心ありなんや、と感じあへり。……

生別（榮花物語）

ことしは、安和二年とぞいふめるに、位にて三年にこそなれならせ玉ひぬれば、いかなるべき御有樣にかとのみ見はさせ玉ふ。かゝる程に、世の中に、いと怪しからぬ事をぞいひいでたるや。それは、源氏の左のおとゞの、式部卿の宮の

聖(ヒジリ)の御門とさへ申しゝ帝の、一のみこの源氏になり玉へるぞかし。かゝる御有様は、世にあさましく悲しう、心うき事に、世の中のゝしる。式部卿の宮、法師まやなりなましとおほせど、稚なき宮たちの、うつくしうておはします。大北の方の、世をいとこじきものにおぼえたるも、たゞ今は、宮びと所の御蔭にかくれ玉へれば、えふり捨てさせ玉はず。いみじう哀に悲しとも、世の常なりずませ玉ふ宮のうちも、よろづまおほゐうもれたれば、おまへの池、やり水も、みくさゐむせびて、心もゆらぬ様なり。さま〲に、さばかり植え集め、つくろはせ玉ひお前栽植木ども、心ま任せて生ひあがり、庭も淺茅が原になりて、あはれま心細し。宮は、哀にいみじうとおぼし召しながら、くら闇にてすぐさせ玉

男君たち、いへバ愚なる、殿のうちの有様なり。おもひやるべし。昔し菅原のおとゞの、流され玉へるをこそ、世の物語、まきこしめしゝか。これは、あさましう、いみじきめを見てあきれ迷ひて、皆泣きさわぎ玉ふも悲し。男君たちの、冠りなどし玉へるも、おくれじ後れじとまどひ玉へるも、あへて寄せ付け奉らず。たゞ有るがなかの弟にて、わらはなる君の、殿の御懐はなれ玉はぬぞ、なきのゝしりて、まどひ玉へば、事の由奏して、さばれそれはとゆるさせ玉ふを、同じ御車にてだにあらず。馬にてぞおはする。十一二ばかりまぞおはしける。たゞ今世の中に、悲しく、いみじきためしなる人の、なくなり玉ふ、例の事なり。これは、いとゆゝしう心うし。醍醐の帝、いみじうさかしう、かしこくおはしまして、

らせ玉ふ。姫宮を、かやうに生うし立て奉らばやと、覺し召さる可し。異御方々、皆ねびとゝのふらせ玉ひ、およすげさせ玉へれば、唯今此御方をば、我が御姫宮を、かしづきすゑ奉らせたまはらんやうにぞ、御覽ぜられける。年頃の御目うつりたとへなく、哀にらうたく見奉らせ玉ふべじうちはし渡らせ玉ふよりして、此御方の匂ひは、たゞ今ある空炷物ならねば、もしは、何くれの香のかにこそあんなれ。なども、かくす何となく、しみかほり渡らせたまひての御移り香は、異御方々にも似ず覺されけり。墓なき御櫛のはこ、硯の箱の中よりして、をかしく、めづらかなる物どもの有樣に御覽しつかせ玉ひて、御厨子など御覽ずるに、何れか御目とゞまらぬ物あらん。弘高が歌繪書きたる草紙に、行成

ふにも、昔の御有樣戀しう悲しうて、御直衣の袖も、絞りあへさせ玉はず。いきながら、身をかへさせ玉へるぞ、哀にかたじけなき。源氏のおとゞの、あるがなかの弟の、女きみの五つ六つばかりにおはするは、おとゞの御はらからの、十五の宮の御むすめも、おはせざりければ、迎へ取り奉り玉ひて、姫宮とてかしづき奉り玉ひて、養ひ奉り玉ふ。それにつけても、いと哀なるものは、世の中なりけり。帥殿は、法師になり玉へりとぞ聞ゆめる。

上東門院の御ありさま　(仝上)

上、藤壺に渡らせ玉へれば、御しつらひ有樣は、さもこそあらね、女御(上東門院)の御有樣もてなし、哀にめでたく、覺し見渡

たや此世のめでたき事には只今の我等がまおらひをこそせめとぞ云ひ思ひける。なまはのことも、ならはせ玉ふ事なき有樣におはします。…………

博雅三位蟬丸を訪ふ（今昔物語）

今ハ昔、源博雅朝臣と云ふ人有りけり延喜の御子の兵部卿親王と申す人の子なり。萬の事、やむごとなかりけり。中にも、管絃の道をなむ極たりける琵琶をも微妙に彈きけり笛をも艷に吹きけり。此人、村上の御時に、□□□の殿上人にて有けり其時に會阪の關に、一人の盲、庵を造て住けり。名をば蟬丸とぞ云ける。此れハ敦實と申ける、式部卿の宮

の君、歌かきたるなど、いみじうをかしう御覽ぜらる。餘り物興じをるほどに、「むげに政知らぬ、しれものにこそなりぬべかめれ。」など仰せられつゝぞ、還らせ玉ひける。（中略）同じ帝と申しながらも、いかにぞ、あたなりにあらぬ處もおはしますものを、此上はいみじう、御容よりはじめ、清らにあさましきまでぞ在します。御酒などは、少しめしけり。御笛を、得もいはず、吹きすさませたまへれば、侍ふひと〳〵も、めでたう見奉る。打ち解けぬ有さまなれば、「これ打ち向きて見玉へ」と、申させたまへば、女御殿、笛をば聲をこそ聞け。見るやうやはある。」とてきかせ玉はねば、「さればこそ、これや幼き人。七十の翁の言ふ事を、かくの玉ふよ。あな恥あしや。」と戯れ聞こえさせ玉ふふども、侍ふ人々、あなめで

はむと思ふ心深く、其に、盲ら有む事も計難志。亦、我も命を知らず。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり、此は、世に絶ぬべき事なり。唯、此盲のみこそ、此を知りたるなれ。構へて、此が彈くを聞かむと思ひて、夜、彼の會坂の關に行きにけり。然れ共、蟬丸其の曲を彈く事なかりければ、其後三年の間、夜々會坂の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や彈く、今や彈くと竊に立聞けれども、更に彈かざりけるに、三年と云ふ、八月の十五日の夜、月少く上陰りて、風少し打吹きたりけるに、博雅、哀れ今夜は興あるかな。會坂の盲、今夜こそ流泉、啄木は彈くらめと思て、會坂に行きて立聞けるに、盲琵琶を掻き鳴して、物哀れに思へるけしきなり。博雅此を、極めて喜しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて、咏じて云く、

の雜色にてなむありける。其の宮は、宇多法皇の御子にて、管絃の道に甚じかりける人なり。年來琵琶を彈き玉ひけるを、常に聞きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に彈く。而る間、此博雅、此道を強ちに求けるに、彼の會阪の關の盲、琵琶に上手なる由を聞て、彼の琵琶を、極て聞かまほしく思ひければも、盲の家異樣なれば、行かずして、人を以て內々に、蟬丸に云せける樣、何どて思ひ懸けぬ所には住むぞ、京に來ても住めかしと、盲此を聞きて、其答へをば爲さずして云く、

　世の中は、とてもかくても、すごしてむ。

　　みやも藁屋も、はてしなければ、

と、使返て此由を語りければ、博雅此を聞て、極く心懷く思ひて、心に思ふ樣、我強ちに此道を好むに依りて、此盲に會

件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、只、口傳を以て此を習て、返々喜ひけり。曉に歸りにけり。此を思ふに、諸の道は、此の如く好くべきなり。其れに近代は、誠に然らず。然れば末代には、諸道に達者は少きなり。實に此れ哀れなる事なりかし。蟬丸、賤き者なりといへども、年來、宮の彈き玉ひける琵琶を聞て、此極たる上手にて有りけるなり。其が盲に成にければ、會坂には居たるなりけり。其より後、盲、琵琶を世に知るなりとなむ、語り傳へたるとや。

逢坂の關の嵐の、はげしきま、

強てぞねたる。夜をそこすとて、

とて琵琶を鳴らすに、博雅之を聞き、涙を流して、哀れと思ふ事、限りなく盲、獨言に云く、哀れ興ある夜かな。若し我れに非ず、□□者や世にあらむ。今夜、心得たらむ人の來よりら。物語せむと云ふを、博雅聞きて、聲をいだして、王城にある博雅といふ者こそ、此に來たれといひければ、盲曰く、此申すは誰にか御座すと。博雅の云く、我は然々の人なり。強ちに此道を好むに依りて、此の三年、此庵の邊に來つるに、幸に今夜汝に會ふと。盲此を聞きて喜ぶ。其時に博雅も、喜びながら、庵の内に入りて、互に物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聞かむと云ふ。盲、故宮ハ此なむ彈き玉ひしとて、

の優劣を判し一字一句をも褒貶し、以て其輸贏を決すること熾んになりき。されば歌の行はるゝに従ひ、その風調は奈良の朝のと、いたく異なるに至れり。

かくて寛平(宇多)延喜(醍醐)の間には、かの柿本人麿と併せ称せらるゝ紀貫之、及び凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則、僧正遍照、小野小町等を始めとして、俊秀なる歌人多かりしを以て、古今集の如き、勅撰の和歌集さへ出來たり此集のときは、承香殿の中なる御書所にて撰ばせ給ひしが、次で村上天皇に至りては、天暦五年に、新に和歌所を置き、歌人をして萬葉集の訓點を付せしめ、繼でまた後撰集を撰ばせ給ひき。是より、和歌沖天の勢を以て京中に行はれ、大宮人はたゞ和歌に酔へるが如くなりしかば、政綱次第に弛廢せるにも拘はらず、勅撰の

## 第七章　和歌、歌序、及び艶詞。

桓武天皇の御代より、清和天皇の頃に至るまで、凡そ七八十年の間は、漢文學極盛の運に向ひしかば、韻文にては詩賦のみなきりに行はれ、特に嵯峨天皇の如きは、最も之を好ませ給ひしにより、姫宮に至るまで、巧みなる詩を作らせ給ひき。されば、奈良の朝には、驚くべき發達をなせし和歌は、一時殆んど、すたれたる有様なりき。

然るに、天下泰平、日既に久しく、文事益開けしに從ひ、清和天皇の頃よりは、在原行平、在原業平、大友黒主等の歌人輩出して、和歌の再び榮ゆべき時運に向へり。然れども、その殊に盛んになりしは、宇多天皇及寛平の頃より後なり。この頃よりは、大宮人の間に、歌合といふも殆まりて、歌の作意と、風姿と

での歌を載せたり。故に此集には、それより後、延喜の五年四月まで、殆ど百五十年間の歌を撰びたり。然れども、まゝ萬葉時代に溯りて、その歌を採れるもあり。後の撰集大抵皆然り。此集始めは、体裁を萬葉に則り、其名をも續萬葉集と云いしを、新に部立てをなし、古今集と名づけしものなりといふ。其の部分けは、春夏秋冬、戀、賀、羇旅、雜体等と定めたり。以後の歌集は、概ねみな此集を以て摸範とし、唯或いは哀傷の一部を加へ、或いは神祇釋教等の分類を增すのみ。

此集に出でたる歌人ましくて、有名なるものを擧くれば、撰者の人々の外には、かの六歌仙と稱せらるゝ僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、大友黑主、小野小町等、其最なるものなり。藤原敏行、素性法師、在原行平、伊勢等の歌も亦多し。

歌集はつぎ〳〵にあらはれて、源頼朝が覇府を開きし頃までには、後撰に次ぎて拾遺集あり、後拾遺、金葉、詞華、千載等の撰集又相次ぎ、凡て七種之より鎌倉をへて、南北朝の時に至るまで、凡て二十一代の集あり。されば、和歌の勅撰盛にして、皇家の衰運を見るといふ議論は、夙に見識あり、氣慨ある者のいふところなり。さて、これらの歌集に載れる平安朝の歌と、奈良朝のとの差違、及びこれらの歌集中の優劣などは、つぎ〳〵に論ずべし。

古今和歌集二十巻は、表立ちたる勅撰集の濫觴にして、醍醐天皇延喜五年に、御書所の預り紀貫之が、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と共に、勅を奉じて撰びたるものなり。是より以前、萬葉集を撰びし時には、淳仁天皇の天平寶字三年正月ま

物に寄せて思ひを述ぶることゝ大に行はれしが、古今集の時代には、題を設けてわざと詠むこと、一層甚しくなりしかば、物にふれ折に臨みて、實況實情をよみいづること、之に應じて衰へき。是れ全く第一章總論に云ひし影響のあらはれたること、殊に歌合せにて、歌の作意と風姿との優劣を定め、一言一句をも褒貶黜陟して、互に勝負を爭ふこと劇しかりしに由るなり。故に、歌よむ者は、みな令詞を擇び、句を構へ、さまざまに思ひ廻らして詠みければ、其姿自から婉麗なり。されば、いまだ尙下れる世の歌の如く、全く氣力なきにはあらずといへども、彼の「海行かば、水つくかばね、山行かば、草むすかばね」などいひし、万葉の歌の姿、雄偉にして、意の至誠なるに似ず。是を以て、古人がこの歌体の變化を評して、大和は男子の國に

さてこれより、少しく歌体の論をのべん。抑、古今集の時代は、万葉集の時代と相距ること、僅に百年餘りなるが、其詠みいづる歌のこゝろ、歌に用ふる言、共に大に異なりて、姿も調も亦甚ど同じからず。特に著るしき相違は長歌に在り。抑、長歌は、万葉集の骨髄なりしに、古今集には、晨星落々僅かに兩三首を見るのみ、其兩三首といへども、姿も調も万葉集に載れるものとは、極めて其様を異にせり。万葉集の長歌の詞のつづけ様は、五字七字とつゞけて、七字句を以て句の切るゝものなるに、古今集の長歌には、詞意七字五字とつゞきて、五字句を以て句の切るゝものあり。是れ大に古調と異なるところにして、後に長歌全くすたれ、今様歌の起るに至りし第一着歩なるべし。さて、短歌の方にありては、万葉集の時代より

れりとはいふべからず。唯、長歌のみは、如何に論ずども、萬葉獨得の長處なることを、爭ふべからざれども、其短歌に至りては、或は質に過ぎて、文に乏しきを免れず。古今の歌は、婦人の國に生れし歌なれども、奈良の朝を去ること尚未だ甚だ遠からざれば、其雄壯活潑なる氣風の痕跡、尚、歴然として認め得べし。その文質孰れの一方にも偏せずして、華實を兼ね備へたるもの多きが如きは、或は萬葉に駕すともいふべし。是より年代を經るに從ひ、日常人々の談話に用ふる語と、文章に用ふる詞とは、益、別れ行きたれども、尚、其格調の大体は更にかはらず。宗とする處はこの古今集に在り。實に此集のみは、後世、歌を讀むものの摸範となり、邦國の治亂、權家の興亡にも拘はらず、又、一般に學問の衰へしにも伴はず獨り珍重

て、山城は女子の國なり。遷都の後は、丈夫のをゝしき手ぶりはうせて、手弱女のめゝしき姿となれりけるといひたるは、失當のことにあらず。

かく、歌体の一變したるのみならず、其詞も、歌に用ふるものは、成るべく通俗を避け、高雅にして華麗なるものを擇びたり。されば、歌の詞と平生の俗語とは、稍、差別を生じ、かの平語をもて直に歌とすること、上代の如くにはあらざりしこと明かなり。然れども、土佐日記の中に、水夫の詞、直ちに歌となりしこと、また、小兒すらもよく歌を詠みしことあるを考ふれば、この平語と歌語との懸隔は、さまで著しからざりしことを知るべし。古今集の歌は詞も姿も、萬葉のものと異となること、上に述べしがごとしと雖、決してこれのみを以て、古今は萬葉より劣

しか如きものにして、婉麗極まりなく、恰も源氏の君が紅葉の賀に當り、青海波を舞ひしときに、盛装して、紅葉の折枝をかざして立ち出でたれば、夕日に輝くそのさま、常よりは光ること見えし姿に似たるべし。されば、其浮華に過ぎ輕阿に陷りしあとは掩ふべからず。殊に大井川行幸和歌の序の如きは、文脈絕ゆるが如くにして尙絕えず斷るゝ如くにして斷れず。稍讀者をして厭はしむる傾あり。是より漸く下りて藤原俊成等の文章には、一篇たゞ一の「センテンス」を以て成るものなるに至りぬ。歌序は散文なる事を待たず。然れどもその歌に伴ふものあるを以て、便宜之を茲に擧ぐ。特に古今の序の如きは、啻に其文章の見るべきのみならず。述ぶる處の事柄は、或は、歌の起源を論じ、或は、此集の成立ちを說く。就中

せられたり。

歌序の論、古今集に至りて大に喧し。抑、歌序は、詩の小引などと同一のものにして、萬葉集などの歌には、漢文の序あるもの尠からず、かの假名文の盛んに行はるゝに及びては、從來漢文にて書きたりし歌序は、凡て假名文に改めたること勿論なり。さて歌序には、歌集の序と、歌の小序との二種あり。集序にて最も有名なるものは、古今集の序、小序にて著名なるは、大井川行幸和歌序等にして、共に紀貫之の作に係る。小序と雖、やゝ長篇なるものあり。今、此等の序文を見るに、表は和文のさまなれども、漢文の意義句調は、到る處、其裏面に潜伏す當時專ら行はれたりし漢文は、即ち本朝文粹に載る處のものにて、四六駢驪なり。されば、歌序の文も、唯之に和裝せしめ

れと同樣なる性質のものはなし。或は假名文の序は語格の誤り、時の違ひ等あるを見て、貫之ほどのものゝ、かゝる誤謬をなす事なし。是れ必ず後人の僞作なるべしといふ人さへありといふ。

## 古今集序　　紀貫之

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざしげきものなれば、心におもふことを、みるもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になく鶯、水にすむかはづの聲を聞ば、いきとし生けるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをも入れずして、あめつちを動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと

其歌仙を品評するところは、千古の妙文にして、譬喩の巧みなること、企て及ぶべからず。これ能く集中の主なる人物を比較したるものなれば、一層茲に載するの必要を覺ゆるなり。

さて、此集の歌序につき、古來最も議論あるは、漢文の序と假名の序と、共にある事是れなり、其先後眞僞の論未だ一定せず。然れども、序文なるもの、はじめは、皆、漢文を以て綴りしが故に、古今の序も、先づ紀淑望、貫之に代りて、漢文を以て之を書きしを、後に和文に改めしものなるべしとの說、多數の贊成を得たるが如し。然らざれば、全一の集に、和漢二序あるべき理なければなり。然るに、假名文の序を、歌集に挿むこと、唯、此集あるのみにて、古今の前には勿論なく、古今の後にも、こ

もかくのごとくなるべし。浪花津の歌はみかどの御はじめなり。あさか山の言のはゝ、釆女のたはふれよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。抑、歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞあるべき。この六種のひとつにはそへうた。大鷦鷯のみかどをそへ奉れるうた、

なにはづに、さくやこの花、冬ごもり、
今をはるべと、さくやこのはな。

二つには、かぞへうた、

さく花に、おもひつくみの、あぢきなく、
身にはたつきの、入るもしらずて。

三つには、なぞらへうた、

おもはせ、男女の中をもやはらげ、たけきものゝふの心をもなぐさむるは歌なり此歌天地のひらけはじまりける時より、いできにけり。しかはあれども、世につたはることは、ひさかたの天にしては、下照姫にはじまり、あらかねの地にしては、須佐乃男命よりぞおこりける。千早振る神代には、うたの文字もさだまらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、須佐乃男命よりぞ、三十文字あまりひと文字はよみける。かくてぞ、花をめで鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心、言葉おほく、さま〴〵になりにけり。とほき所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、高き山も、ふもとのちりひぢよりなりて、あま雲たなびくまで、おひのぼれるがごとくに、此歌

なるうた、はかなきことのみ、いでくれば、色このみの家に、うもれ木の人しれぬこととなりて、まめなるところには、花すゝき穂にいだすべきことにもあらずなりにたり。そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。古の世々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々を召して、ことにつけつゝ歌をたてまつらしめ玉ふ。あるは花をこふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月をおもふとて、しるべなきやみにたどれる、心々をみたまひて、さかしおろかなりとしろしめしけり。しかあるのみにあらず、さゞれいしにたとへ、筑波山にかけて、君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしびこゝろにあまり、富士の煙によそへて人をこひ、松蟲の音に友をしのび、高砂、住の江の松もあひおいのや

君にけさ、あしたの霜の、おきていなば、
こひしきをに、きえやわたらむ。
といへるなるべし。四つには、たとへ歌、
我戀は、よむともつきじありそ海の、
濱のまさでは、よみつくすとも、
といへるなるべし。五つには、たゞことうた、
いつはりの、なき世なりせば、いかばかり、
ひとの言の葉、うれしからまし。
といへるなるべし。六つには、いはひうた、
この殿は、むべもとみけり。さきくさの、
みつはよつはに、とのつくりせり。
今の世の中、いろにつき、人の心花になりにけるより、あだ

ろまりにける彼の御世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつのくらゐ柿本人麻呂なむ、歌のひじりなりける。これは、君もひとも、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、龍田川にながるゝ紅葉をば、みかどの御目に錦と見玉ひ、春のあした吉野の櫻は、人丸が心には雲かとのみなむおほえける。又、山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人丸は赤人の上にたゝむをかたく、赤人は人丸の下にたゝむをかたくなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世世に聞え、かたいとのより〳〵に、たえずぞありけるこれよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。こゝにいにしへのことをも、歌の心をもしれる人、わづか

うにおぼえ、をとこ山のむかしを思ひでゝ、女郎花のひとゝきをくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又、春のあしたに花のちるを見、秋の夕暮に木の葉のおつるをきゝ、あるは年毎に、かゞみのかげにみゆる雪と浪とをなげき、草の露、水の沫を見て、わが身をおどろき、あるは、昨日はさかえをごりて、時をうしなひ世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは、松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるは、くれ竹のうきふしを人にいひ、よしの川をひきて世の中をうらみきつるに、今は富士の山も煙たゝずなり、ながらの橋もつくるなりと、きく人は、歌にのみぞ、心をなぐさめける。古より、かく傳はるうちにも、平城の御時よりぞ、ひ

雲にあへるか如し。よめる歌おほくきこえねば、かれこれをかよはして、よくしらず。小野小町は。いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにてつよからず。いはゞ、よき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬは、女の歌なればなるべし。大伴黒主は、其さまいやし。いはゞ、薪おへる山人の、花のかげにやすめるが如し。此の外の人々其名聞ゆる、野邊に生へるかつらのはひひろごり、林にしげき木の葉の如くにおほかれど、歌とのみ思ひて、其のさましらぬなるべし。かゝるに、今すべらぎのあめのしたしろしめすこと、四の時こゝのかへりになむなりぬる。あまねき御うつくしみのなみ、八島のほかまでながれ、ひろき御めぐみのかげ、筑波山の麓よりも、しげくおはしまして、萬のまつりごとを

にひとりふたりなりき。しかはあれど、これかれ得たる所、得ぬ所、互になむある。彼の御時よりこのかた、年は百年あまり、世はとつぎになむなりにける。古のことをも歌をも、しれる人、よむ人多からず。いまこのことをいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなればいれず。その外に、近き世に其名聞えざる人は、即ち僧正遍照は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、繪にかける女を見て、徒に心を動すが如し。在原業平は、其心あまりて言葉足らず。しぼめる花の色なくて、匂ひのあれるが如し。文屋康秀は、ことばたくみにてそのさま身におはず。いはゞ、あき人のよききぬきたらむが如し。宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、始め終りたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の

ばれて、山下水のたえず、濱の眞砂のかずおほくつもりぬれば、今は飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さゞれ石のいはほとなる喜びのみぞあるべき。それがしらは、春のはな匂ひ少くしてむなしき名のみ、秋の夜のながきをかこてれば、かつは人の耳におそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲のたちゐ、なくしかのおきふしは、貫之らが此世に同じく生れて、この事の時にあへるをなむ、よろこびぬる。人丸なくなりにたれど、歌の事とゞまれるかな。たとひ、時うつり事さり、たのしび、かなしびゆきかふとも、このうたの文字あるをや。青柳の絲絶えず、松の葉のちりうせずして、まさきのかづら永く傳はり、とりのあと久しくとゞまれらば、歌のさまをも知り、ことの心を得たらむ人は、

きこしめすいとま、諸の事をすて玉はぬあまりに、古の事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし玉ふとて、今もみそなはし、後の世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀の友則、御書のところのあづかり紀の貫之、さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らにおほせられて、萬葉に入らぬ古き歌、みづからのをもたてまつらしめ玉ひてなむ。其がなかにも、梅をかざすよりはじめて、時鳥をきゝ、紅葉をゝり、雪を見るに至るまで、又、鶴、龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩、夏草を見てつまをこひ、逢阪山に至り手向を祈り、あるは春、夏、秋、冬にも入らぬくさ／＼の歌をなむ、ゑらばせ玉ひける。すべて千うた廿卷。なづけて古今和歌集といふ。かくこのたびあつめえら

こなた、春の梅津より、御船よそひて渡守をめして、夕月夜小倉の山のほとり、行く水の大井川ゝ行幸し玉へれバ、久方のそらにハ、たなびける雲もなく、みゆきをまち、流るゝ水底には、濁れる塵なくて、御心にぞ協へると、詔して仰玉ふ事ハ、秋の水に浮びてハ、流るゝ木の葉とあやまられ、秋の山を見れバ、織る人なき錦とおもほへ、紅葉のはの嵐にちりて、曇らぬ雨ときこえ、菊の花の岸ゝ殘れるを、空なる星と驚き、霜の鶴、河邊に立て、雲の下るかと疑がはれ、夕べのさる、山のかひに鳴きて、人の涙をおとし、旅の雁、雲路をまどひて、玉章とみえ、遊ぶかもめ水にのミて、人になれたり。入江の松、幾世經ぬらむと、いふことをぞよませ玉ふ。我等短き心の、このもかのもにまどひ、つたなき言の葉、吹く風

大空の月を見るか如くに、いにしへをあふきて今をこひさらめやも。

初瀬に詣づるごとに、宿りける人の家に、久しくやどりて、程へて後にいたりたれば、かの家の主、「かくさだかになんやどりはある」と、云ひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りて詠める、　　貫之

人はいさ、こゝろもしらず。故郷は、
　　花ぞむかしの、香ににほひぬる。

大堰川行幸和歌序　　仝人

あはれ、我君の御代長月の、九日ときのふいひて、殘れる菊を惜み玉ひ、又くれぬべき秋を惜み玉はむとて、月の桂の

の五人といふとは別なり）

後撰は古今に次で成りしものなれども、古今に比ぶれば、著るしく劣れるが如し、鴨長明の無名抄に「古今のとき花實共に備はりて、其さま〴〵に分れたり後撰には、よろしき歌古今に取り盡されて、後いくほども經ざりければ、歌得がたくして、姿を擇ばずして、心をさきとせり」といひ、阿佛尼の夜の鶴には、「後撰集はやさしき歌多く、又みだりがはしき歌も、多くまじりたり。梨壺の五人、心々やかゝりけん」といひ、八雲御抄には、「梨壺の五人めでたしといへども、彼古今の四人の撰者には及ぶべからずと宣へり。要するに、古今の花實共に備はれるよりは、下る事數等、其弊はやゝ質に過ぎて、文足らざるにあり。

の空にみだれつゝ、草の葉の露と共に、うれしき涙おち、岩浪と共に、悦ばしき心ぞたちかへる。若しこの言の葉、世の末まで殘り、今をむかしにくらべて、後の今日をきかむ人、海士の拷繩くりかへし、しのぶの草の忍ばざらめや。

古今集成りてより後、和歌を以て一代の宗匠たるもの、しばしバ勅撰の命を被りき。村上天皇天曆五年、大中臣能宣、淸原元輔、源順、紀時文、阪上望城等、勅を奉じ、古今以後殆んど五十年間の歌を撰びて之を上る。後撰集是れなり。世ま此集の撰者を、梨壺の五人といふ。梨壺とハ昭陽舍にて、歌を撰びし處の名なり。此時始めて和歌所なる官署を置き給ひしは、前ま云へり。（因に云ふ、上東門院の官女なる、赤染衛門、紫式部、和泉式部、馬内侍、伊勢大輔を、梨壺の五歌仙と呼ぶ事あり。梨壺

原通俊後拾遺和歌集を上りき。此集に載れる歌人にて主なるものは、源經信、藤原公任、藤原範長、大中臣輔親、源重之、僧の能因、良暹等とし閨媛には紫式部、和泉式部、赤染衛門、大貳三位の流ありて、其歌見るべきもの多し。然れども、古今集の秀でたる處は、華實共に佳なるに在るを忘れ、次第に古調を遠かり、優艶にして纖巧なるに陷りき。されば、此集の撰ばれし當時にも、古人などは之を喜ばず。後拾遺の姿と名づけて、口惜きことに思ひ、誹謗頻りに起りしといふ。八雲御抄に宣へることあり「經信卿ばかりこそ、楚國に屈原がありけんやうに、ひとり古體を存ゐて、並びなかりしかど、天下に之をよしと定むる人もなし」と、當時の狀、推して知るべし。但し緇徒、女流に至るまで、文詞に長じたる人の、輩出せし時なれば、技術

古今、後撰の二集に、拾遺集を加へて、之を三代集といふ。はじめは萬葉、古今、後撰を三代集といひしに、拾遺の成りし後は、之を加へて萬葉集を棄てしといふ。萬葉の古調漸く失はるるに從ひ、其書もまた省かるゝに至りしは、豈、偶然ならむや。拾遺は、花山天皇自から撰ばせ給ふといひ、或は一條天皇の長德年中、大納言藤原公任、勅を奉じて撰すともいふ、然れども、集は天皇親しく撰び給ひ、公任卿は、之が抄を作りしものならんとの說、眞に近きが如し。その歌後撰を去ること遠からず。歌を引用するに當り、其原を誤りしも亦多し。但、此集の歌は幽玄深邃ならず。意義明白に。文字の上に露はれて、餘韻なく、只管風姿のすなほなるをよしとせりといふ。

これより九十餘年を經て、白河天皇の應德三年に、中納言藤

しかば、俳諧歌ならずして、俳諧歌に類するもありて、歌の姿も大に變りぬ。要するに、輕妙巧緻を以て主とするなり。是れ古今以來の風に飽きて、新奇を求むるより起りしなるべし。源俊頼、藤原顯輔、基俊等を以て此風の率先者となす。當時の歌人、此風に靡きし者極めて多し。勅撰の和歌集には、大抵穩かなる者の限りを撰びたれば、あまり異樣なる歌は多からずといへども、此時代にあらはれし百首、歌合集などに至りては、輕浮なる心に思ひたるまゝを、憚らず云ひ出し、又、方言俗語をさへ用ひて、よみたる歌ありて、奇怪なる者多し。有名なる堀川百首前後集は、此頃に出來たるものなり。

是より先き、拾遺集の中に連歌體のものありしが、いまだ連歌の名はなかりき。金葉集出づるに及びて、始めて連歌の一

の一點より觀察すれば、さすがに名歌といふべきものおほし。是より先き、古今集に、既に俳諧歌なるものありしが、此集またこれを置き、又、拾遺に神祇の部ありしに倣ひて、此集また新に釋敎の部をたてたり。

是より後、四十年にして、崇德天皇大治二年源俊頼、金葉集を上り、又七十年にして近衛天皇の天養元年、藤原顯輔、詞華集を撰び、又四十二年を經て、後鳥羽天皇文治三年、藤原俊成、千載集を上る。千載集の上奏は、實に是れ源頼朝が幕府を鎌倉に開きて、大權京都を去りし翌年なれども、其集中の歌は、盡く平安朝のものなる事勿論なり。

金葉集、詞華集に至りては、古調を慕ひしものなりと雖、ここさらに、をかしからんことを求めて、詞のいひかけなどを用ひ

をして厭はしめんが如しと。故に俊成の歌は、多くは雅趣深遠なるを見る。然れども、用語もまた練熟にして、踈笨のあとなし。俊成、人となり温厚にして人と爭はず。其師藤原基俊は、源俊頼と相善からざりしかば、其徒互に門戸を張りて相毀りしかど、俊成獨り然かせず。基俊の學力を慕ふと同じく、また俊頼の風体を取りしといふ。俊成は元久元年に九十一にて薨じぬ。其子定家次で和歌に巧みにして、遂に之を以て其家の世業となすに至れり。

上に述へ來りしものは、平安朝の敕撰歌集なるが、もとより和歌の極めて熾なりし時代なれば、私に撰びし歌集も亦甚だ多し。貫之の新撰和歌集、藤原清輔の續詞華集、(鳥羽天皇の敕を奉じて撰びしものなれども、奏覽を經ざりしにより、敕撰に列せず)藤原の公任の金玉集、能因法

部別に設けられぬ。詞花集まゞ同じ。此章の尾に、源俊頼の散木和歌集より、充分なる例證を引きたれは參看すべし

藤原俊成は、金葉詞華の風姿を惡しと思ひたるにや、其勅を受けて千載集を撰びしときにも、注意して優美なる風姿のものを採りしかば、其歌は、恰も古今集の歌を、細小なる摸型の中に入れたるものゝ如し。蓋し後拾遺の風よ、少しく實を添へたるものとなれり。俊成は後鳥羽天皇に仕へて寵遇せられ、皇太后宮太夫正三位に至りし人なり。世に之を五條の三位といふ。幼にして聰慧和歌を巧みにせり。俊成、常にいへらく、歌の佳なるところは、たゞ大体を得るにあるのみ。雕琢をのみ事とすべからず。たとへば、畫の妙なるも、たゞ自然の韻致に富むにあり。徒らに丹靑修飾にのみ心を用ひなば、人

かく歌の熾んなりし間には、歌人に往々奇異なる言行ありしといふ傳說あり。盡くは信を措きがたしといへども、亦以て當時の事情を窺ふに足るべし古の歌の如くに實際の情を詠ずることは漸く減じ、ことさらに構へて歌を詠むこと行はれし時代に能因法師は、かの「都をば、霞と共にたちしかど、秋かぜぞ吹く、白河の關」といふを詠じ如何にも名吟なりと思ひしかど、實事にあらぬぞと譏られんことの口惜く、乃ち閑居して顏を日に晒し、旅にありし樣して、さてかの歌を人に示ゝしといふ。又、當時、風俗甚しく壞れて、男女の間、極めて猥りなりしかば、戀歌の多くして巧みなるは勿論なるが、まゝまた歌のために、品行を汚すこともありき。待賢門院（鳥羽天皇の皇后）の女房にて、歌に堪能なりし加賀といふは、かねてより、思

師の玄々集等、其最も名あるものなり。而して躬恒、素性、業平、敏行、能宣、貫之、伊勢、忠岑等を始めとして、前にあらはれし大家は、各、其家の集なるものありて世に傳はる。歌を詠み歌を作ることを教ふる書、即ち歌話ともいふべき書の、此時代に現はれしものまた少からずして、歌の病を論じ、歌の技術を說くこと、漸く行はれき。藤原清輔の奥儀抄、袋草子及び和歌初學抄、藤原基俊の悅目抄、藤原公任の新撰髓腦等は、その中にて最も見るべきものとす。かの鎌倉時代に至りて、順德天皇の撰び給ひし、八雲御抄も、亦大に貴ばる。これより髓腦やうの書、世々多くあらはれぬ。かの和歌の上に嚴然たる法式をたて、これをして、狹隘なる天地の中に跼蹐せしむるに至りしは、其遠源實に茲にありといふべし。

頼實は「木葉ふる、宿はききわく、事ぞなき」の一首に、五年の命を縮めたりといひ、道因は、死後に千載集に其歌入れりとて、俊成の夢枕に立ちて、感謝の意表はしたりといふ類、枚擧にべらず。尚茲な吉田令世が、歴代和歌敕撰考にいへる一節を揭けん

（前略）木曾義仲信濃路に起り、源の頼朝伊豆に起りて、まつ義仲都を攻めつる其まぎれに、門さしこめて、ひそみ居られつる俊成卿こそ、千載集をば撰ばれけれ。世の中くつかへり、君はろび給へども、ともに生死を全じくせんとは思はず。よそに見なして引きこもられたる、もの丶きたなさは、何にかたとへん。歌詠む人のよこらにして、世の中におぎなひ無きこそ、かゞかりにも至れるは、皆かの心やわらゝな

ひしことをぞふし柴の、こるばかりなる、なげきせんとは」といふ歌を詠みおきけるが、たなじくば、然るべき人と慇懃を通じ、中の絶えし後ま讀えたるものとせば、歌集などに入れられて一段の面目なるべしと思ひ居たり。乃ち花園の大臣を相手として、其計畫せし如くま、かの歌を贈りしかば、大臣も大に哀を催しき。其歌は千載集に錄せられ、此婦人は「ふし柴の加賀」とて、もてはやされしといふがごとき、其一例なり。滿廷の人々、大抵天下の事を餘處にして顧みず。只管文弱にのみ流れしが、さすがにこの方には、熱心なりしこと驚くに堪へたり。藤原長能は「三月盡」といふ歌を廿日あまり九日といふに春の暮れぬると詠みて、公任に、春は三十日に限るものかはと難ぜられしかば、懊惱して遂ま身まかりしといひ、

なりまゐらせ候はんずれ。」と云ひしにあらずや。俊成の之を諾せしとき、忠度は「かばねを野山に晒さばさらせ。うき名を西海のなみに流さばながせ。今はうき世に思ひおくことなし」と喜びて、さて一族のあとを追ひしにあらずや。藤原氏の驕奢を摸して懦弱に流れしとはいへ、平氏は武人なり。此人にして尚然り、俊成のみ獨り咎むべきにあらず。當時の有樣以て知るべきのみ。

世の中の治乱盛衰は如何にもあれ。歌のことは獨り熾んなりしかば、歌合なども、追々に其巧みを弄せんために、種々の工風を凝らし、或は調度の品に付きて歌を合せ、或は花卉禽獸、其他さま〴〵のものを題として歌を鬪はし、或は一首の歌の中に、數箇の題の意義を詠み込むなどの戲も出て來たり

るより、かくはなりまがるまこそあれ。其の中に居て歌集を撰ばれざるは、打ちあかりみやびたる業とや云はまし。またはいふかひなき稚子の、たはふれに近しとやいはまし。これを譬へは、春の鳥の、風はやく雪霜さむき、冬の日ははひたゝ居て、長閑なる花の頃を待ちて、さへづるにやたとへてん。古へを思へば、かくはあらざりしなり。云々

滔々たる大宮の人、實まかくの如くなりき。されども試に思へ。薩摩守忠度は、平族の中にて人傑なり。それたゞ都落ちの時に、淀より取て返してこの俊成を訪ひ、撰集の御沙汰あるべきよし。生涯の面目ま一首なりとも御恩を蒙りたし。是ま候巻ものゝ中に、さりぬべき歌候へど、一首なりとも御恩をかふりて、草の蔭にて嬉しと存じ候はゞ、遠き御守とこそ、

催馬樂、朗詠、今樣等を總稱して郢曲といひ、又唱歌とも稱ふ。今催馬樂の一例を歌合、艷詞等と共に、和歌の終りに載せ。今樣は却りて源平盛衰記、平家物語の時代に見るべきものあるを以て、便宜により之を鎌倉時代に讓るべし。但し艷詞は其年代を詳かにせざれ殊に艷詞の如きは一種の散文なりといへども。もと歌の如く之を鬪はしものなれば、類を以て之を茲にあぐるも、這し大過なかるべし。

古今集

春たちける日　紀貫之

き、堀河天皇の如きは、最も歌を好ませ給うて、百首を撰び給ひしことも再度に及びぬ。また男女をことさらに番はせて、艶書合せといふをさへはじめ給ひき。さて長歌は早く衰へて、古今集にも既に僅に二三首あるのみ。それだゝ、既に萬葉のものに比する能はざるは、前に云ひしが、是より後まれ、長歌殆んと其跡を絶つに至りぬ。

又我國は、上代以來神祇を祭るには、神樂歌ありしが、平安の朝に至りても、其新たに作られしもの少からぞ。また里巷の謳歌を唐樂の音調に合して、平安時代の人を喜ばしゝ催馬樂あり。詩文妙句に曲節を附して吟誦する朗詠なるものあり。又、今樣と稱へられて、當時の人の嗜好に投せし歌あり。これ長歌の衰へしに代はりて大に行はれしものなり。此等の

河原左大臣かくれ給ひて後、かの家にまかりて、鹽竈といふところのさまを、つくりたりけるを見て、

きみまさでけふり絶にししほがまの、
　　うらさびしくも見え渡るかな。

をみなへしといふことを、句の上におきて、

をぐらやまみねたちならしなく鹿の、
　　へにけん秋をしる人ぞなき。

五節の舞ひめを見て

天津風くものかよひぢ吹きとぢよ。
　　乙女のすがたしばしとゞめん。

題しらず　　　　　　　　　　喜撰法師

袖ひちてむすびし水のこほれるを、
春たつけふの風やとくらん。
仝
さくら花さきにけらしも足引の、
山のかひより見ゆる白雲。
志賀の山こえに、女のおほくあへりけるに、
つかはしける。
仝
あつさ弓はるの山へをこえくれば、
道もさりあへず花ぞちりける。
題しらず
秋の野にみだれて咲ける花のいろの、
ちくさにものをおもふ頃かな。

仝

おとは山けさこえ来ればほとゝぎす、
梢はるかに今ぞなくなる。

雪のふりけるをみて　仝

雪ふれば木ごとにはなぞ咲にける、
いつれを梅とわきて折らまし。

さゝのはにおく霜よりもひとりぬる、
わか衣手ぞさえまさりける。

春の夜梅花を　凡河内躬恒

はるの夜のやみはあやなし梅の花、
色こそみえね香やはかくるゝ

わがいほは都のたつみしかぞすむ。
　よをうぢ山と人はいふなり。

題しらず　　　　　　讀人しらず

春かすみたてるやいづこみよし野の、
　芳のゝ山にゆきはふりつゝ。

三月に閏月のありける年　　　伊勢

さくら花はる加はれる年だにも、
　人の心にあかれやはする。

櫻の花ちるを　　　　　　紀友則

久方のひかりのどけき春の日に、
　しづ心なく花のちるらん。

音羽山を越えけるに、時鳥のなくをきゝて、

わが宿の花見がてらにくる人は、
　ちりなん後ぞ戀しかるべき。

もる山のほとりにて　　仝

しら露もしくれもいたくもる山は、
　下葉のこらずいろづきにけり。

田村の御時、ことにあたりて、津の國の須磨といふ處に、こもりけるに、宮の中に在りける人に、つかはしける。　在原行平

わくらはにとふ人あらばすまの浦に、
　もしほたれつゝわぶと答へよ。

花盛に京を見やりて　素性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜて、

となりより、常夏の花をこひに、おこせたりけれは、をしみて、　仝

ちりをだにすゑしとぞ思ふさきしより
　妹とわかぬるとこなつの花。

白菊の花を　仝

こゝろあてにをらはやをらん初霜の、
　おきまどはせるしらぎくのはな。

題しらず　仝

吉野川よしや人こそつらからめ。
　はやく云ひてしことは忘れじ。

櫻の花のさけりけるを、見にまうできたりける人に、よみてつくりける。　仝

世の中にたえてさくらのなかりせば、
春のこゝろはのどけからまし。

病して、よわくなりにける時、　全

つゐに行く道とはかねて聞きしかど、
きのふけふとは思はざりしを。

題しらず　　よみ人しらず

都いでゝけふみかの原いづみ川、
かはかぜさむしころもかせやま。

月のおもしろかりける夜、曉がたに　　清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、
雲のいづこに月やどるらん。

都ぞはるのにしきなりける。

奈良のいそかみ寺にて、時鳥の鳴けるを

仝

いそのかみ古き都のほとゝぎす、

聲ばかりこそむかしなりけれ。

題しらず

仝

今來んと云ひしばかりに長つきの、

有明の月をまちいづるかな。

わらび

仝

煙たちもゆとも見えぬくさのはを、

たれかわらびとなつけそめけん。

なぎさの院にて櫻を見て

在原業平

寛平御時、せられける菊合に、すはまを作りて、菊の花うゑたりけるに、くはへ玉ふ歌、吹上の濱のかたに、菊うゑたりけるを、

秋風のふき上にたてるしらきくは、
　はなかあらぬか波のよするか。

題しらず　　よみ人しらず

ほとゝきす鳴くやさつきのあやめ草、
　あやめもしらぬ戀もするかな。

題しらず　　よみ人しらず

行く水に數かくよりもはかなきは、
　思はぬ人をおもふなりけり。

題しらず　　壬生忠岑

題しらず

小野美材

女郎花おほかるのべにやどりせば、
あやなくあだの名をや立なん、

題しらず　　よみ人しらず

木のまよりもり来る月のかげ見れば、
こゝろづくしの秋は来にけり。

大江千里

月見ればちゞにものこそかなしけれ。
我身ひとつのあきにはあらねど、

題しらず　　よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁の、
数さへ見ゆる秋の夜のつき。

ほの〳〵と明石の浦のあさぎりに、
島かくれゆく舟をしぞおもふ。

冬の長うた　　凡河内躬恒

ちはやふる　神な月とや　けさよりは　くもりもあへず
うちしくれ　紅葉とともに　ふるさとの　芳野の山の
山嵐も　さむく日毎に　なりゆけば　玉のをとけて
こきちらし　あられみだれて　しもこほり　いやかたまれる
庭のおもに　むら〳〵見ゆる　冬草の　うへにふりしく
白雪の　つもり〳〵て　新玉の　年をあまたも
過しつるかな

久方の月のかづらも秋はなほ、
　もみぢすればやてりまさるらん。
題しらず　よみ人しらず
君や來んわれや行かんのいざよひに、
　槇の板戸もさゝずねにけり。
題しらず　よみ人しらず
うたゝねこそ今はあだなれこれなくば、
　忘るゝひまもあらましものを。
題しらず　小野小町
思ひつゝぬればや人の見えつらん、
　夢としりせばさめざらましを。
題しらず　よみ人しらず

いとゞしく過ゆかたの戀しきに、
うらやましくもかへるなみかな。

酒のみて、醉にのりて、人人子供のうへなど
申しけるついでに、

兼　輔

人のおやの心はやみにあらねども、
子をおもふ道にまどひぬるかな。

文屋朝康

しら露に風のふきしく秋の野は、
つらぬきとめぬ玉ぞ散りける。

七夕の日

よみ人しらず

七夕のあまの戸わたることよひさへ、
をちかた人のつれなかるらん。

後撰集

正月一日二條のきさいの宮にて、白きおほうちぎを給はりて、　藤原敏行

降雪のみのしろ衣うちきつゝ、
はる來にけりこたごろかれぬる。

紀貫之

春霞たなびきにけりひさかたの、
月のゝつらも花やさくらん。

あつまへまゐりけるに、過ぬるゐたゝこひしく覺えけるほごに、川を渡りける、波のたちけるをみて、

在原業平

かへし

紅葉もしぐれもつらしまれに來て、

かへらん人をふりやごゝめぬ。

さためたる男もなくて、物をおもひ侍るころ、

小野小町

あまのすむ浦こく舟のかぢをなみ、

よをうみわたる我ぞ悲しき。

いそのかみごいふ寺にまうでゝ、日の暮れにければ、夜明けてまかりかへらんごゝまりて、この寺に遍照侍るご人の告げはべりければ、ものいひこゝろみんごて、いひ侍りける、

母のふくにて、さとに侍りけるに、先帝の御ふみ給へりける御返事、　近衛更衣

五月雨にぬれにし袖にいとゞしく、
　露おきそふる秋のわびしさ。

御かへし　延喜御製

おほ方も秋はわびしきときなれど、
　露けかるらん袖をしぞおもふ。

十月ばかりに、大江千古がもとに、あはんとてまかりたりけれども、侍らぬほどなれば、帰りてまた、たづねてつかはしける。　藤原忠房

もみぢ葉はをしき錦と見しかども、
　時雨とゝもにふり出てぞこし。

うらやましくもすめる月かな。

題しらず　　　　よみ人しらず

時鳥なくやさ月のみじかよも、
　ひとりしぬればあかしかねつゝ。

拾遺集

大覺寺に人々あまたまゐりて、ふるき瀧を
よめる、　　　　　藤原公任

瀧の音はたえてひさしくなりぬれど、
　名こそながれてなほきこえけれ。

小野小町

岩の上にたびねをすればいとさむし、
　苔のころもをわれにかさなん。

僧正遍照

かへし

よをそむく苔の衣はたゞひとへ、
　かさねばうとしいざ二人ねん、

素性法師

延喜御時月次序屏風に

あら玉のとしたちかへるあしたより、
　またるゝものはうぐひすのこゑ。

藤原高光

法師にならんと思ひ立ちける頃、月をみて

かくばかりへがたく見ゆるよのなかに、

屏風に　　　　　　　　　　源　順

わが宿のかきねや春をへだつらん、

夏來にけりと見ゆる卯のはな。

冷泉院御屏風の繪に、梅花ある家に、

まらうど來たる所、　　　　平　兼盛

我か宿のうめのたち枝やみえつらん、

おもひのほかに君がきませる。

題しらず　　　　　　よみ人しらず

櫻がり雨はふりきぬおなじくば、

濡るともはなのかげにかくれん。

子にまかりおくれてける頃、東山にこ

もりて、　　　　　　　　　中　務

題しらず　　　　　　　　　　壬生忠見

戀すてふ我が名はまだき立にけり、
　人しらずこそ思ひそめしか。

入道式部卿親王の子の日に、　大中臣能宣

千とせまでかぎれる松もけふよりは、
　君にひかれてよろづ世やへん。

題しらず　　　　　　　　　　仝

紅葉せぬときはの山にすむしかは、
　おのれなきてや秋をしるらん。

題しらず　　　　　　　　　　仝

櫻花にほふものからつゆけきは、
　このめも物をおもふなるべし。

信濃の國に下りける、人の許につかはしける、　　仝

月かげはあかず見るとも更科の、山のふもとにながゐすな君。

物名ひくらし　　紀忠岑

今こんといひてわかれしあしたより、思ひくらしのねをぞのみ鳴く。

はつせへ詣で侍りける路に、佐保山のもとにまかりやどりて、あしたま、露の立渡りて侍りけれも、　　惠慶法師

紅葉見にやどれるこれとしらねばや、さほの川ぎりたちかくすらん。

咲けばちるさかねばこひし山ざくら、

たもひたえせぬ花のうへかな。

北宮のもぎの屏風に　源　公忠

行やらでやまぢくらしつほとゝぎす、

今一とこゑのきかまほしさに。

河原院まで、あれたる宿に秋來とい

ふ心を　惠慶法師

八重葎しげれる宿のさびしさに、

人こそ見えね秋れ來にけり。

題しらず　紀　貫之

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の、

川風さむく千どり鳴くなり。

むつきばかりに、津の國にありける頃、人のもとへいひつかはしける、　　能因法師

心あらん人に見せばや津のくにの、
　難波あたりのはるのけしきを。

題しらず　　良暹法師

淋さに宿をたちいでゝながむれば、
　いづくもおなじ秋の夕ぐれ。

人の娘の親にもしられて、ものいふ人ありけるを、おやも聞きつけていひければ男もうできたりけれど、かへりにけりときゝて、女に代りてつかはしける、　　よみ人しらず

二條右大臣、粟田の山ざとの障子のゑに、たび人紅葉の下にやどりたるところ、

仝

今よりはもみぢの下にやどりせじ、をしむに旅の日かずへぬべし。

荒れはてゝ、人も侍らざりける家に、さくらのさきみだれて侍りけるを見て、

仝

淺茅はらぬしなき宿のさくら花、心やすくや風にちるらん。

雪ふりける日、女のもとよりかへりて、
つかはしける、　　　　藤原通信

あけぬればくるゝものとはしりながら、
なほうらめしき朝ぼらけかな。

例ならずおはしまして、位など去らんとおぼしめしける頃、月のあかゝりけるを御覧じて、　　　　三條天皇

心にもあらでうき世にながらへば、
こひしかるべきよはの月かな。

大納言行成卿、物語りなどしてありけるが、内の御ものいみにこもればとて、急ぎかへりけるつとめて、鳥の聲にもよほされてと、

しるらめや身こそ人目をはゞかりの、
　闕になみどれとまらざりけり。　紫式部

題しらず

世の中をなにおけかましし山ざくら、
　花見るほどのこゝろなりせば。　元輔

心かゝりける女に人にかはりて、

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝ、
　すゑのまつ山なみ越さじとは。

こゝちれいならざりける頃、人の許に遣はしける、　和泉式部

あらざらん此世の外のおもひでに、
　今ひとたびの逢ふこともがな

みやこをば霞とともにたちしかど、
あきかぜぞ吹くしらかはの關。

題しらず　經信

君がよはつきじとぞおもふ神風や、
みもすそ川のすまんかぎりは。

## 金葉集

薄　源俊頼

うづらなくまのゝ入江のはま風に、
をばななみよる秋の夕ぐれ。

七十になるまで、つかさもなくて、よろづに
あやしき事を、おもひつゞけてよめる、

いひおこせければ、夜ふかゝりける鳥の聲は、函谷關の事にやと、いひつかはしたりけるを、立かへりて、これは逢阪の關に侍るとありければ、

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも、
　よにあふさかの關はゆるさじ。

長樂寺に住みける頃、人のなにごとかと云ひければ、つかはしける、

上東門院中將

思ひやれとふ人もなき山里の、
　かけひの水のこゝろぼそさを。

陸奥にくだりけるに、白川の關にて、

能因法師

關路千鳥　源兼昌

淡路島かよふ千どりのなくこゑに、
　いく夜ねさめぬ須磨の關守。

題しらず　中納言雅定

逢ふことはいつとなきさのはま千鳥、
　波のたちゐるまねをのみぞなく。

戀のうた　周防内侍

戀ひわびてながむる空の浮きぐもや、
　我がしたもえの煙なるらん。

大峰にて、たもひもかけぞ櫻の花の咲

きたりけるをみて、　行尊大僧正

もろともにあはれとたもへ山ざくら、

仝

七十まみちぬるしほの濱ひさき、
久しくも世にうもれぬる哉。

櫻　　仝

山ざくらさきそめしより久かたの、
雲ゐに見ゆるたきのしらいと

田家秋風　　大納言經信

ゆふされは門田のいなばれとづれて、
あしのまろやにあき風ぞ吹く。

水上月　　法性寺入道

あし孫はひかつみもしげき沼水に、
わりなくやどる夜半の月かな。

さこそはあまのすさびなりとも。

花をよみ侍りける　　右兵衛督伊通

白雲と峯には見えてさくら花、
　ちればふもとの雪とこそ見れ。

詞華集

一條院の御時、奈良の八重櫻を、人の奉りけるを、其をり御前に侍りければ、その花を題にて、歌よめとおほせありければ、

伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重ざくら、

花より外に知る人はなし。

小式部内侍うせて後、上東門院より、としごろ給はりけるきぬを、なきあとにもつかはしたりけるに、小式部内とかきつけられたるをみて、

和泉式部

もろともにこけの下にはくちずして、
うづもれぬ名をみるぞ悲しき。

さはる事ありて、久しう音づれざりける、女のもとより、いひおくり侍りける、

よみ人しらず

あさましやなどかきたゆるもしは草、

秋の野の草むらごとにおく露は、
よるなく虫のなみだなりけり。

寛和二年内裏歌合によませ玉ひける、

花山天皇

秋の夜の月にこゝろのあくがれて、
雲ゐにものをおもふころかな。

題志らず

仝　天皇

こゝろみにほかの月をも見てしがな。
我が宿がらのあはれなるかと、

けふここのへに匂ひぬるかな。

源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ、
碎けてものをおもふころかな。

男のたえ〴〵なりける頃、いかにととひ
たる人のかへりごとに、

高階章行

思ひやれかけひの水のたえ〴〵に、
なり行くほどのこゝろ細さを。

長恨歌のこゝろを

源道濟

思ひかねわかれしのべを來て見れば、
あさぢがはらに秋かぜぞ吹く。

題しらず

曾根好忠

旅　　　　　　　　　　　俊成

うらつたふ磯のとまやのかぢまくら、
　きゝもならはぬ波のおとかな。

題しらず　　　　　　　俊惠法師

おもひきや夢をこの世の契りにて。
　さむる別れをなげくべしとは。

寄花戀　　　　　　　　源雅光

吹く風にたえぬ梢の花よりも、
　とゞめがたきは涙なりけり。

關路落葉　　　　　　　源賴政

都にはまだあをばにてみしかども、
　紅葉ちりしくしら川のせき。

故郷花　よみ人しらず

さゞなみやしがの都はあれにしを、
昔ながらのやまざくらかな。

曉聞郭公　後德大寺左大臣

ほとゝぎすなきつる方をながむれば、
たゞありあけの月ぞのこれる。

六月祓　大納言經通

みそぎする川瀨にさよやふけぬらん、
かへるたもとに秋かぜぞ吹く。

秋のうた　俊成

ゆふされば野べの秋風身にしみて、
うづら鳴くなり深くさのさと。

戀のうた　待賢門院堀河

長からんこゝろもしらず黑髮の、
　みだれてけさはものをこそ思へ。

---

歌合（村上天皇天德年中內裏にて）

一番　櫻

左(持)　大中臣能宣

さくら花風にしちらぬものならば、
　おもふことなき春にぞあらまし。

右　平兼盛

櫻花いろ見るほどに世をしへば、
　ことしの行くをもしらでやみなん。

鹿　　　　　　　　　　　　　　　寂蓮法師

尾上よりかどたにかよふ秋風に、
　いなばをわたるさをしかの聲。

寄石戀　　　　　　　　　　　　　二條院讃岐

我が袖はしほひにみえぬ沖の石の、
　人こそしらねかわくまもなし。

戀のうた　　　　　　　　　　　　清輔

あふことはいなさほそ江のみをつくし、
　ふかきしるしもなき世なりけり。

月前戀　　　　　　　　　　　　　西行法師

なげけとて月やはものを思はする、
　かこち顔なるわがなみだかな。

り。仍以左爲勝。

十八番　戀

左(持)　本院侍從

人しれずあふをまつまに戀しなば、

なにゝかへたる命とかいはん。

右　中務

ことならば雲井の月となりななん。

こひしきかげやそらに見ゆかと、

左歌さてもありなん。右歌の上下の句に、おなじ文字ぞあめる。にくさげにぞ。如何候ふべきと　奏すれば、左右の仰なし。左の人、左はさる文字候はぞと申めれば、させる難にはあらぬにぞ、仍爲持。

左右ともによくつかまつれり。仍爲レ持。

八番　欵冬

左(勝)　源　順

春ふかみ井出の川なみたちかへり、
見てこそゆかめやまふきの花。

右　平　兼盛

ひとへづゝ八重やまぶきは開きけん、
ほどへてまほふはなとたのまん。

左歌いとおかし。さる事なりと聞ゆ。右歌、八重山ぶきのひとへづゝ開けんは、一重なる山ぶきにてこそあらめ。心はあるに似たれども、八重さかずは本意なくやあらん。又上の句のはて、下のはてと、おなじ文字あ

めはれ。その玉もて來、風〱も吹たれば、なごり〱も立てれば、水底きりて、はれ、其玉みえぞ。

### 難波梅

なんばの梅、こぎもて上る。小舟大舟、つくしつまでに、今少しのぼれ。山崎までに、

## 律歌

### 我門

我門に我門に、うハ裳の裾ぬれ、下裳の裾ぬれ、あさなつみ、ゆふなつみ、朝なつみ、夕なつみ、我名を知らまくほしからば、御薗生の、御薗生の、御薗生の、みそのふの、あやめの郡の大領の、まな女と云へ乙女(ムスメ)とこそいハめ。

四十二物諍のうち

嶺の松と　軒のしのぶと　花山院侍從君

淋しさは岩根の松やまさるらん。
　軒のしのぶはあまりめなれて、

衣擣音と　夜船漕音と　兵部卿宮

衣うつ閨には夢もかよひけり。
　ねられぬものは夜舟こぐ音。

催馬樂

呂歌

紀伊州

紀の國の、しらゝの濱に、まinduしらゝの、濱に來て居る、鷗

音にのみきくの白露、おきまがひあへず。けぬ可き心のうちは、晴れ間もしらぬしぐれ、やゝ霜結ぶ末野のあさちにや、たえぬる人も蓬生に、たれ松虫の方にきゝこし、聲さへよわりぬれば、忍ぶの山の奥までも、色に出つゝ、

思ひあまりしぐるゝ松の下もみぢ、
色にもいでぬ末をしぞおもふ。

返事

數ならぬ身も、世をうち山ごしかぞ住む、かご田のかりいほかりにだに、ありこへ誰かきくの白露、しらむ語らひに、心をみせがほの玉づさ、たまさかにだになき水ぐきの、をかのかやねをかしくも、

しぐるらんかつちる山の下もみぢ

# 艶詞

四月

郭公の初音は、いつかはと思ふたもひくるしさは、げにかこつ方なくこそ。哀れ山田のさなへ取りあへぬほどの御返事は、ゆかしく候ものかな。

返事

ほとゝぎすのはつねまちえても、猶雲井にたぼしめしとる人は、空頼めなる御事にやと、げに身は卯の花の心地して、誰故にと、由なくこそ覺え候へよ。

九月

くるといふ物の、立なみたる崎に、鵜といふ鳥と、鷺といふ鳥と、居たりけるを具したりける。六波羅別當といふ僧の中たりける。

鳥とみつるはうさぎなりけり。

これを、亮中實えつけで、京に詣で來て語りければ、つけゝるよし

木の實かとかきはまぐりは聞ゆれど、

鞍馬に參りたりけるに、師の房にて、足のきたなきをすゝがむとて、たらひをもて來りけるをみて、房主の僧に云ひかけゝる、

たらひして足をばいかゞすゝぐべき、

僧のえつけざりければ、かへりて中ける、

よし野を花の末ごたのまず。



---

連歌のこご（散木和歌集）

中納言重資、藏人頭にて侍りける時、殿上の人々あまたぐして、大堰にまかりて、船に乘りて、淸瀧こいふ所まで登りて遊びけるに、岩ごもけはしくて、浪高しごてかへりける、

隆源阿闍梨

淸瀧はがんせきざぜんの所かな、

つく

浪たかせ船わきかへらすな。

中宮亮仲實、備中の任に下りける時に、備前に、あふすきの

つりどのゝ下には魚やすまざらむ。

光清しきりに案じけれども、得つけでやみにし事などか

へりて語りしかば、心みにとて、

守つはりの影そこにみはつゝ、

(茲に引ける連歌は甚だ徳川時代の

俳諧に似たり)

水がめに湯はわかぬものかは。

鵜といふ鳥を見て、僧のしたりける。

頼算法師

あらふとみれど黒き鳥かな。

さもこそは墨の江ならめ世とゝもに、

人もつけざりければ、後にきゝて

人々あまた、八幡の御神樂に參りたりけるに、事果て、又の日、別當法師光清が堂の、池のつり殿に人々ゐなみて、遊びけるに、光清、連歌作る事なむ得さる事と覺ゆる。唯今連歌つけばやなど申居たりけるに、形の如くとて申したりける。

俊重

明治廿三年十月十三日印刷
同　　　十月廿一日出版
同　　　十二月廿三日再版
同　卅三年六月十日七版

日本文學史上卷　定價金九拾錢



著作者　本郷區駒込千駄木林町四拾五番地　三上參次

著作者　同區西片町拾番地　高津鍬三郎

發行兼印刷者　日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社

代表者　下谷區龍泉寺町四百十番地　右社長　原亮三郎

印刷所　京橋區築地三丁目十五番地　帝國印刷株式會社

大賣捌　各府縣特約販賣所

# 金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

周防國山口 宮川臣吉
同 岩國 白銀伊兵衛
長門國舟木 生田新一
同 長府 村田梅龍堂
同 萩 藤川東輔

（德島縣）

阿波國德島 黑崎精二
同 同 井關粂吉
同 脇町 小野喜代次

（高知縣）

土佐國高知 澤本駒吉

（香川縣）

讃岐國高松 清野信七
同 同 宮脇仲次郎
同 丸龜 入江開文舍

（愛媛縣）

伊豫國松山 向井藏二郎
同 同 土肥與平
同 西條 金川支店

（福岡縣）

筑前國博多 眞海書店
同 同 積善館支店
筑前國博多 森岡榮

筑後國久留米 菊竹儀平
同 同 田中幸二郎
豐前國豐津 佐野長七

（佐賀縣）

肥前國佐賀 河內壯助

（熊本縣）

肥後國熊本 長崎次郎

（長崎縣）

肥前國長崎 安中半三郎

（大分縣）

豐後國大分 甲斐治平
豐前國中津 梅津書店

（鹿兒島縣）

薩摩國鹿兒島 吉田幸兵衛

（宮崎縣）

日向國宮崎 津野書店
同 同 松井義雄

（福井縣）

越前國福井 品川太右衛門
同 敦賀 山上宗兵衛

若狹國小濱 吉岡昌太郎

（石川縣）

加賀國金澤 近田太三郎
同 同 宇都宮書店
同 小松 宇都宮源平

（富山縣）

越中國富山 中田清兵衛
同 高岡 學海堂

（新潟縣）

越後國長岡 目黑十郎
同 同 松田周平
同 同 覺張治平
同 高田 高橋直
同 水原 西村六平
同 三條 野島書店
佐渡國河原田 中山萬平

（長野縣）

信濃國長野 西澤喜太郎
同 松本 水琴堂
同 同 高美書店
同 同 松榮堂
同 上諏訪 宮坂榮次郎
同 洗馬 都築文明堂
同 辰野 荻原朝陽館
同 岩村山 文盛館

# 金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

（東京府）

東京市 金昌堂
同 林平次郎
同 播磨屋

（神奈川縣）

武藏國横濱 田沼商店
同 同 天野弘集堂
同 戸塚 柏瀬權次郎
同 横須賀 竹川新四郎

（靜岡縣）

駿河國靜岡 廣瀬市藏
同 同 吉見義次
同 同 勝見儀助
遠江國掛川 三原屋甚藏
同 濱松 谷島屋源三郎

（愛知縣）

尾張國名古屋 川瀬代助
同 同 片野東四郎
同 同 三輪文次郎
三河國豐橋 高須廣次

（三重縣）

伊勢國四日市 岩田與七
同 津 關西圖書株式會社

（岐阜縣）

美濃國岐阜 郁文堂
同 大垣 岡安慶助
同 同 上田源藏
飛彈國高山 平田鈴吉

（滋賀縣）

近江國大津 島林專次郎
同 同 淡海堂
同 彦根 廣田七次郎

（京都府）

京都市 村上勘兵衛
同 大黒屋書店

（大阪府）

大阪市 柳原喜兵衛
同 松村九兵衛

（奈良縣）

大和國奈良 圖書卸賣合資會社
同 同 阪田一郎

（和歌山縣）

紀伊國和歌山 宮井宗兵衛
同 同 三宅小二郎

（兵庫縣）

攝津國神戸 吉岡支店
同 同 熊谷幸助
播磨國明石 藥師寺卯一郎
同 姫路 矢内正太
但馬國豐岡 石田松造
淡路國洲本 福浦文藏
丹波國柏原 中井正吉

（岡山縣）

備前國岡山 武内彌三郎
同 同 森博文堂
美作國津山 仁科照文堂
備中國高梁 壺井朝太郎

（鳥取縣）

因幡國鳥取 藤谷旭日堂
伯耆國米子 今井兼文

（島根縣）

出雲國松江 川岡清助
同 同 園山文會堂
同 同 大芦庄次郎
石見國濱田 安達共榮堂

（廣島縣）

安藝國廣島 積善館支店
同 忠海 田上三郎
備後國尾ノ道 兒玉芸香堂
同 福山 桑田庄助

（山口縣）

周防國山口 桂山陽堂

# 金港堂書籍株式會社發行教科用圖書販賣所

同　野澤　岩下袈裟店

（山梨縣）

甲斐國甲府　內藤書店
同　同　柳正堂

（埼玉縣）

武藏國浦和　高野幸吉
同　川越　水村岩三郎
同　同　明文堂

（群馬縣）

上野國前橋　高橋常藏
同　高崎　柴田量平
同　富岡　本田清三郎

（千葉縣）

下總國千葉　多田屋支店
同　船橋　木內嘉兵衛
同　福岡　大野注連吉
上總國東金　多田屋本店
同　大多喜　惠比壽屋書店
安房國北條　鳥海書店

（茨城縣）

常陸國水戶上市　川又銀藏
同　石岡　高野清次
同　土浦　伊沼彌助

同　眞鍋　寺田清兵衛
同　下館　須藤市右衛門

（栃木縣）

下野國太田原　田代太郎三郎
同　足利　三泉堂

（福島縣）

岩代國福島　博向堂
同　若松　田中善平
同　須賀川　橋本太平
同　喜多方　瀨野作右衛門
岩城國中村　佐藤與七

（宮城縣）

陸前國仙臺　高橋藤七
同　同　木村文助
同　同　藤崎祐之助
同　同　有千閣
同　同　佐勘書店

（山形縣）

羽前國山形　五十嵐太右衛門
同　米澤　素月晨平
同　同　盛文堂
同　長井　風間五右衛門
同　新庄　大泉善助
同　鶴岡　日向源吉

同　同　地主文藏
羽後國酒田　白崎善助
羽後國酒田　鈴木喜八

（秋田縣）

羽後國秋田　成見清兵衛
同　横手　大澤鮮進堂
同　增田　東海林重太郎
同　大曲　榊田繁次

（巖手縣）

陸中國盛岡　佐藤庄兵衛
同　同　上村才六
同　花卷　菊地忠太郎
同　一ノ關　佐藤善平
陸前國高田　菊地重藏

（青森縣）

陸奥國弘前　今泉道次郎
同　青森　今泉支店

（北海道）

渡島國函館　魁文舍
石狩國札幌　萱左右太
後志國小樽　川南重祐

↓*↑